真白海

尾道市立高等女學校同窓會之印

尾道市立高等女學校同窓會

『眞玉第四號目次』

○口　繪
○本校職員　○第六回卒業生甲組　○仝乙組

○訓　諭　一
○本校の歴史と生徒及卒業生　杉野三治郎

○說　苑　自二至二〇
○一語一言　湘陽
○繪畫に表はれたる女性　大河内定雄
○自由と不規律　三宅素
○寄生動物の話　秋山幹
○祈念に就て　高橋みゆき

○講演抄記　自三一至二三

○文　苑　自二四至八九
○女性に關する唐詩　磐洲
○小袖曾我より　三宅素
○兎糞錄　石岡瞰溪
○英詩翻譯　二、三、四、年
○紀行（参宮記　鳴瀧行　福山行）
○競點作文　作文の中より
○日誌の中より　自九九至一一〇

○學校彙報
○日誌抄錄
○身体檢査表
○生徒原籍郡市別表○仝父兄職業別表
○朝會訓話抄
○現在職員表

○雜　報　自一一一至一一五
○職員室
○理化室
○製煮室
○寄宿舍

○校友會報　自一一六至一一八
○文藝部報
○運動部報
○役　員
○會計報告

○同窓會報　自一一九至一二八
○同窓會
○會計報告
○雁のつて

○消　息　自一二九至一五八
○井上君を吊ふ
○旧師消息
○卒業生消息

○附　錄　自一五九至一六二
○同窓會員名簿

同一職員

第六回卒業生

第六回卒業生

眞たま　第四號

訓諭

本校の歴史と生徒及卒業生

杉野三治郎

凡そ生を天地に享け時々變化して茲に盛衰を生じ興廢を來たすもの。一として歴史を有せざるはなし。人事皆歴史なり。吾人は須らく此歴史を尊重して其處に汚點を貽さぬ覺悟と努力とを持たざるべからず國には國の歴史あり。家には家の歴史あり。各々治亂盛衰の蹟なき能はされども。一國民一家族は皆其國其家の歴史に鑑み現在を戒め將來を慮り。以て一國一家の聲譽を高むるとも決して失墜なきを期すへきなり。

本校の創業は日尚淺けれとも有機體と同樣一個の生命を有し年と共に變遷して一種の特異性を發揮し社會の興望に添ふに至りしは内に獨特の内容を整へ外に嚴正の校威を揚くるに至りし結果に外ならず。内容の整頓校威の發揚は。蓋し本校終極の目的ならん現時本校に其萌芽を見るは校運進展の發露にして。本校の歴史に一段の光彩を加へしものと謂ふへし。抑も校運進展の萌芽を齎らせしものは誰ぞ。元より本校關係者の協心戮力に基因するは明なれとも。主として生徒及卒業生の多數が等しく本校を思ふ名譽心の向上と。自己の改善に努め自己の價値を自覺して社會の尊敬を享くるに至りしとに因るものなり。社會の尊敬とは無暗に諸子を譽むるの意にあらす。慢心は大の禁物なり。氣壯にして心足らさるものは躓き易し。元氣は青年の骨子なり。今日諸子の有する直情の氣は。飽く迄養ふて失ふべからず。されど細心の注意を拂はすして言動を慎まされは。徒らに他人の嘲笑を買はんのみ。嘲笑は侮蔑を意味す。恥辱なり。横溢の元氣細心の注意は其調節を誤らさるこそ肝要なれ。

諸子は本校の歴史を織り出す經緯なり。文飾の美醜は諸子が結合の如何によること亦明なり。國民は國家を愛して國史に美を濟し。諸子は本校を愛して校威の發揚を圖る。愛國愛校は其理一なり。年少の者往々他人の口車に乘りて事理の前後を顧みす其場の體裁に虜はれ。心にもなき駄辯を弄して自己の價値を失墜し。母校の名譽を汚損する事なしとも慮られず。慎まさるへからず。要は自己の思想を堅實にし自己の立場を明にするにあり。是れ驅て自己を愛し母校を愛し。本校の歴史に光輝あらしむる素因にはあらさる歟。

說苑

一語一言

湘陽

悅ひの色々

一包の饅頭を得て悅ぶは口腹の悅ひなり。久しく會はなかつた姉妹を見て悅ふは骨肉の愛情なり。他人の爲に骨折り其人の成效を見て悅ぶは武士的の悅樂なり。口腹の滿足を圖るは小人のなす所にして君子の敢て取らざる所也。

女に泣かれて

悲哀化して涙となるは人間の常なり。泣くは其人の弱味を示す表徵なり。同情を受くる利器なり。然も女に泣かれて尙且彼を打つべき力あらんや。されと氣を付けよ女の弱味を標榜して時には空泣きあることを。是れ狐狸の業なり。五尺の男子何んぞ狐狸の術策に陷りて可ならんや。

塩梅

塩梅は料理の塩加減なり。多けれは塩からく少なければは水くさし中間の程合を云ふなり。其程度こそ六つか敷けれ人に依りて異なれど其處に共通點あるを見るべし。此點を會得せしものか料理の名人なり。社會の人々は十人十色なれど其處に人道の共通點あるべし此點を掴む者は勝ち然らざるものは敗者の地位に立つべし。

彈力あれ

時計の活動は發條あるに因るものなり。日本人は由來彈力性に富む是れ進取的氣性を有する所以也軟文學は彈力性を磨滅せしむる慨あり。見え坊は多く彈力性に乏し。夫の放埒を捨て置き家產の蕩盡を見て尙且妻の恐ふは恐ふにあらず意氣地なき也。理を見てなさゞるは勇なき也。屈從は彈力なき粘土に打跟を其儘に殘すと同し。彈力なきゴム球は一文の直打なきにあらすや。

獨樂

獨樂は心棒を金にした玩具也廻はせは廻はす程すわりて倒れぬもの也。吾人の一生は獨樂の如し。辛抱を中心に働ける丈働かば益々家產の鞏固を加ふべし。力撓まば勢漸次弱りて遂に倒產の憂を見

るに至らむ。

日和見

自己に定見なく自信なきものは無論馭擊の勇氣なく群衆に押されて頻りに他人の目附顏色に依りて天晴贊成の手を擧く是を日和見と云ふ。世間此類多し一種の虛榮に外ならす賤むべし。

鉛は銀に化せず

敎育を万能の如く考へ子女を學校に送れば何者も悧巧になると思ふものあり。敎育は本質を變化せしむる能力なし各人の本質に應し可及的本質の美を發揮せしむるのみ。鉛を銀に化し眞鍮を金に變せしむる能はす鉛の銀に及はさるは止むを得さる也。されと銀も磨かされば磨ける鉛に及はず是れ敎育の效果也。

放任主義

多少敎育に志ある者に限つて幼兒を自然に放任し幼兒かなす儘に打ち捨て置くものあり是れ放埒主義也野生主義也。自由の反面には指導と抑制との存在を忘るべからす。指導抑制を離れて敎育なし敎育なき家何んぞ善良の子女を生むへき

繪畫に現はれたる女性

大河内定雄

東西両洋古來女子を題材として描かれた名畫は隨分澤山ある。試みに古來名畫と稱せらるゝもの〻中から女子を除いてしまつたら繪畫史の大部分は餘すところ極めて僅少なものとなるだらうと思はれる。

今西洋の重なる名畫について見てもラファエルは絕えゞ女性を描き其の聖母の作畫ばかりでも數へ切れぬ程ある。其の他女性を取扱つたものではレオナルド、ダ、ビンチのモナ、リザがある此の不朽の傑作が一度ルーブル美術館から竊取されて一時世間を騷した事は未だ耳新しい事である。當時佛國上下の驚愕は一通りのものではなかつた。世界の隅々まで賞金を懸けて發見に努め。二年余の後やつと無事に巴里に歸りやれ安心と胸なで下した事がある。此の盜難が世界的の遺憾となり其の發見が又世界的の喜びとなつた此のモナ、リザは僅かに一女性の肖像である。けれゞも女性の備ふる特有の美。光りと潤みとを帶びたる両の眼。薔薇色の紅味を帶びたる其の唇と顏面との調和。肉と血とを思はしむる其双頰の色

等は最も精妙なる筆致を以て忠實に表現されてゐるけれどもピンチは此の畫に對し四年の歲月を費して而も猶意の如くならぬ未成品といふに至つては彼が如何に女性の美に對し禁じ得ない憧憬の念を抱いてゐたかゞ解る。其の他ヂョルヂオネ、チャアン、リューベンス、ヴァン、デイク、ゲーンスボロ　等今日尙世に遺してゐるものゝ内には女性を取り扱つたものが限りない程澤山ある。

我日本では飛鳥時代及奈良時代に表はれた女性畫はすべて佛畫に表はれてゐる所謂神化されたる女性が描き表はされて宗敎的崇拜の對照として取り扱はれてゐた。之れは女子の姿が慈悲恩愛といふ如き心の德がよく表はれてゐるので佛畫に其の姿を借りて何れも女性化されたる姿で描かれたのである。思ふに當時の藝術家は女子を觀て神の如き姿と感じ深く此の点を考へ佛畫を描くに當り寧ろ男の形相よりも女子の方が遙かに適當であると思つたに相違ない。此の時代の遺物として有名なるは鳥毛立女屏風（樹下美人）布張（麻布）の菩薩像。吉祥天女の圖等があるが此れ等の相貌を見ると何處となく唐の女に象つたのではないかと思はれる姿がある。之れは其の時代には專ら唐の文物に耽溺してゐた時だから隨つて繪畫に表はれた相貌も自然唐風の女になつたに相違ない。

此れ等は宗敎畫に表はれた女性であるが西洋でも宗敎畫には女性を取扱つてゐるものが澤山ある。彼の聖母が幾多の姿で表はされてゐるのを見ても解る。聖母を描いた名畫にはラファエルのマドンナが古來傑出したものと曰はれてゐる。ラファエルは殆んど一生涯を聖母を描く事にさゝげ其の聖母は隨分澤山あるが其の中でもシスチーン畫堂にあるマドンナが最も有名となつてゐる。中央雲の上に立つてゐる聖母の姿は天來の美と莊重とに充ち滿ちてゐる。靜朗な額と眼とには神祕な光を湛へその顏面より輝き出づる心靈美の抵抗し難き力の前に。何人も心高めらるゝことなしに立つことが能きない程だと曰はれてゐる。ラファエルの手によつて描かれた最後のマドンナは實に之の畫である。うして聖母のモデルとなつたのは美しき羅馬の乙女ラ、ドンナ、エラータであつたと曰はれてゐる。

ラファエルは單なる此の一少女の姿を借りて偉大なる宗敎的崇拜の對照たるマドンナを描いたといふこ

とは東西両洋の藝術家の女性觀を對照して甚だ面白い事である。

平安。藤原。鎌倉時代となつて來ると世は次第に變轉して從來宗教畫の對照として女性を觀て來た藝術家の眼は此所に變じて更に異つた方面に女子を觀察して描き表はす樣になつた。從來は女子を人間界を超越した神の姿として觀て來た畫家は此の時代には宮廷生活。武門生活の中にある上流。中流社會の女子の姿を描寫する樣になつて此所に全く女子が人間界に棲息するものとなり女子の種々な生活狀態が描き表はされ女子が始めて世の中の事變に表はれて來る樣になつた藤原隆能の描いた源氏物語畫卷や嚴島神社の法華經口繪及扇面古寫經等の中には當時の社交場裏に時めきた名媛が描き表はされてゐる。其の他信貴山緣起繪卷。餓鬼草紙繪卷。春日明神驗記。住吉物語繪卷。法然上人繪傳等の中には女子が社會動乱の波に卷き込まれ中には悲劇の主人公となつて苦難を嘗むる者があり女子の活動の姿は實に當時の畫家の覗う所となつて多種多樣に描き出された。此の如く緊張したる女子の社會的生活は足利時代の末葉よりは稍々馳緩したる生活狀態が繪畫の上に見えて來た。一家團樂紅葉綠水を眺むるといつた悠長慰安の風は前代の活劇的生活に比較したら余程變つて來たと曰はねばならぬ。此の傾向は德川時代になつて其の極に達し浮世繪となつて當時の女子の生活の狀態が多種多樣に描き出された。斯くして此の浮世繪は德川時代の藝術を支配した一大流派となつた其の畫に表はれてゐる所は概して町人趣味で一般平民社會の狀態を主題として取り扱はれてゐるものが多い。一体此の時代の文藝は常に二條の道を辿つて進んでゐた傾向がある。一は上流で一は下流社會である。上流社會にては圍碁。雙六が行はれると下流社會には將棋。花骨牌。上流にて能樂。謠曲をやれば下流にては歌舞伎。淨瑠璃を喜ぶといつた具合で繪畫も狩野。土佐派が上流社會に行はれるに對して下流社會に浮世繪が流行したのは當然の事である。從つて浮世繪に表はれてゐる女子は神代諸神の事蹟歷史。物語。戲曲中の女子などもあるが多くは下流社會の生活狀態が主になつてゐる。興行物。花見。遊山。舞踊。祭禮。手品。觀劇等の中にある女子は常に浮世繪師の覗ふ所となつて此れ等逸樂生活中にある女子を題材として描き出した。當時の浮世繪師

として有名なるものには岩佐又兵衛を創始者として菱川師宣。鳥居清信。奥村政信。石川豐信。鈴木春信。北川歌麿等何れも獨特の見識を以て遺憾なく女子の艶麗なる姿を寫し出してゐる。此れ等德川時代に專ら盛んであつた浮世繪は明治時代になつてもやはり德川時代のものを套襲したといふに過ぎない樣であつたが明治の終りより大正の曉に渡つて一種新しい女子の生活が繪畫の上に表はれて來た。其れは田園生活中にある女子即ち田園と女子とを結び付けると云ふ事である。從來描かれた女子の生活中には春野の花。秋の紅葉を眺めて樂しむといつた樣な所謂女子遊樂の圖といふ樣なものが大部分を占めてゐた樣であつたのに對して嘗て試みられなかつた畫家の新しい發見である。西洋にても田園生活を描いたものはあるけれども田園的女子を描いたものは見當らない。然るに日本畫家が此の新しい生活に眼を開いたといふことは喜びに堪へぬ事である。田園生活は上流生活の如く遊樂的のものではないけれども又勞働生活とも異つてゐる。半ば勞働的分子はあるが其の勞働は決して苦痛貧窮といつた氣持ちはなく生ける自然と絶えず親しみ其の勞働は寧ろ好んでなす勞働で必ずしも生死の必要に迫られて余儀なくするものではなく其の中には多分の慰樂的分子を含んでゐる。然も清潔なる慰樂である。其の對照は新鮮なる空氣の中に雨露日光を樂しみ天地萬物を生ずるの心を味ふといふ所にあつて浮世繪などの人爲的の逸樂などの比ではない。此れ等田園的女子畫は主に京都派の日本畫家によつて試みられた。其の例を示せば都路華香の焚火の跡を第一に擧げねばならぬ。此の畫は京都效外の田園生活の狀態を描いたもので清らかな白き手拭を被り赤き襷をかけ。雪白の脚袢を着け甲斐々々しく裝ふた若き農婦が冬の朝野外に藁火を焚いて談話を交へてゐる所で如何にも平和な趣があり温雅なる風景と優美なる女性とがしつくり調和してゐる。數年前の文展に出た菊池契月の『茄子』土田麥僊の『島の女』なる作も田園と女子とが如何にもよく抱合してゐる。『茄子』と題する畫は素朴なる農婦と無邪氣なる幼き兒とが一面の茄子畑に澤山の茄子を如何にも嬉しうに摘んでゐる圖で『島の女』の方は島人生活にある女子を描いたもので南島の初夏を思はせる無花果の樹下に二人の女は春を搗き傍には一人の若い女が房々とした黑髮を梳いてゐる背

景には子供が頭に物を運んで行く圖である。其の他西山翠嶂の『青田』などがある何れも天然と女子とが相親しみ然も生氣に充ちてゐる。

兎に角最近繪畫に表はれた女性觀としては田園的女子畫であるが最近の文展に於ては此の傾向も稍々減少して來た樣である。尙將來畫家は如何に女子を觀如何に描表はして行くかは將來の我が日本畫界に一つの面白問題であると思ふ。

自由と不規律

三宅　素

○吾々は自由と云ふものは何だかあり難いもので、不規律と云ふと一も二もなく惡い事だと直ぐに感ずる。即ち一方善一方は惡とキッパリ區別のある正反對の性質のものだと、かう感じてゐる。が是が問題です。

○答案を一枚書いても下に罫を入れて一字々々りの角の中へ入れるやうに注意して書くと出來上りは誠にキチンとしてゐるが、若し罫を敷かないで自由に書くと、兎角字の形が乱れ行が歪み、隨分見苦しいものになる。即ち不規律に流れる。

○して見ると、自由が過ると不規律乱雜になるので二つの者は例へば白と黑といふ反對關係でなく、桃色と紅色との如く濃淡の關係であると思はれる。さあ茲が問題だと云ふのです。

○自由は殊に西洋人が之を熱愛し、彼等は自由を得る爲めに屢々尊き血を流ました。近世の初、信仰の自由を得る爲めに殆ど全歐羅巴に亘つて悲慘な戰が戰はれました。その他佛蘭西の大革命や、アメリカ諸國の獨立や、希臘伊太利の獨立運動統一運動も皆自由を得んとての運動であります。

○彼等がなした自由を求むる戰爭は、途中幾多の迂餘曲折を經ましたが、結局、產業が發達し國運が進歩し、今日までの隆盛を來す基となりました。自由と云ふことは『國が他の國の束縛を受けないことであり、個人がその權利を束縛せられないことである』と云ふ所から、個人の權利を重ぜると云ふ考になり更に進んで『自分さへ好ければ好い』と云ふ變な個人主義になりました。

○何しろ自由運動は是迄の處は結果がよかつたから西洋人が自由を無上に尊ぶのは無理もないことで……其處が厄介な點である。吾々局外者は冷靜に觀

察して、彼等の自由運動は、『彼等が壓制的の信仰から切り拔けたのであつたから結果がよかつたのだ、壓制政治を破つのだから幸福な結果を得たのだ、外國に對する屈辱的關係から自由になつたのだから結果がよかつたのだ』と云ふことを忘れてはならない即ち彼等は横道から本道へ出たので。本道に居る吾々が更に他に道を求めるのは間違ひです。吾々は此道を完成すればよいのであります。

○或人が山波の海へはまつた。浮きつ沈みつ藻掻き苦んで居たが、漸く岩につかまつて道に這ひ上ることが出來た。着物も乾くし體力も恢復して來た。其人は海から拔け出たことと非常に嬉しく思つた。吻と大息をついて起ち上り、北へ北へと歩いて淨土寺山の茨の中へ這入らうとしてゐる。山波の道は東西に通うてゐるのに！けれども其人は北へ向つて海から出たので、矢張り北へ進めばよいと思ふてゐるのだ。氣の毒だ。『モシ々々貴君は此の道を東へ行くか西へ行くかしなさい。其處は山ですよ』。『イヤ々々人間は北へ行くに限る、南は恐しい海だ』

○露西亞の兵士は此頃上官に對して敬禮をしない。上官が咎めると『何んだい共和だぞ』又、切符なしで瀛車に乘らうとする。車掌が咎めると『何だい共和だぞ』政府はあつても勞働者の團体が勢力を振つてゐて勞働賃金を高くすると云ふより以外のことはトンと行はせない。同盟の國々に對する信義や、獨逸に對する戰爭は忘れてゐる樣である。自由が過ぎて不規律放埒になつてゐるのぢやないですか。海から出て淨土寺山の茨の中へ這入らうとしてゐるのぢやないですか。

○英吉利が今度の大戰爭の前に愛蘭の自治問題でアワヤ内亂が起らうとした事や、戰爭が始まつてからでも兵士を募集するのに、鉦や太鼓で廣告をして、サアといふ間に合はなかつたり、佛蘭西が政治の爭に夢中で軍備が出來てゐなかつたりしたのは皆民主思想個人主義の弊害のあらはれであります。

○男でも女でも自分の自由を得る爲に、若し他人の關係……即家族、社會、國家、進んでは世界の一般人類に對する……を忘れて自分さへ便利がよければよいといふことになつては、其人は既に自由を求めてゐるのでなく不規律に向つて進んでゐるのであります。

○是は國家でも同じであらうと思ひます。獨逸はカ

イゼルを中心として獨逸さへよければ他の國はどうでもよい。國際間には道德はいらぬ。かう云ふ考の下に、今日迄の處は無理に押し進んで來ましたが、其爲に世界を敵としました。是で押し通せようとは思へませぬ。否、押し通させてはなりませぬ。

○私は女がゑらくなつて、智惠くらべでも技倆比べでも男に負けないと云ふやうになれば甚だ結構だと思ひます。一家の經濟の上から云つても、國の强みから云つても。けれども女が家族との關係を忘れて結婚はいやだ、子供はいやだ、內を守るのはいやだと云ふては、女でなくては出來ないことを捨てるといふ事で、家や社會や國家が破壞するより外はない

○以上述べた處を味つて下さるならば、自由を通り越すと勝手我儘不規律になり、家や國家が成り立たないと云ふ事に判斷が付かうと思ひます。壓制の海から上つたら即自由平等の域に達したら其中に又人の踏むべき犧牲、差別、規律、道のあるとに注意せられる事と思ひます。

○最後に私の意見をミッスーリ州立大學社會學教授エルウード氏の言葉を引いて裏書をするのは隨分有力なことゝ思ひます。氏曰く我等の祖先は人間精神の開放《自由》といふことを、獻身的事業の內で最も高尙なものと信じて居つた。されば彼等は、人類の歷史は、一に人間解放の進行に外ならぬと解釋した。『開放』といふ考を進めて、個人を家族から開放し、婦人を母の務から開放し個人を固苦しき義理道德のうちから開放するといふ樣なことは、此等の祖先等は考へ及ばなかつた。故に一方に於ては、個人主義が少からぬ利益を歐州文明に與へたことは歷史上證明し得る事であると共に、それが又、同時に現代の最大の危險で社會の秩序や文明に、危險を及ぼしつゝあることも、之を確認しなければならぬ。と

○又、氏は『家族生活』の價値を見直すことが必要だとして曰く、社會生活に於ける忠誠、獻身等の德は、家族生活が兒童の自然的愛情を養成するから生ずるのであつて、家族に對する愛情は、遂に變じて社會國家に對する愛となるのである。其の證據として、家族的感情の强い國民は、必ず愛國的感情に富み、社會的同情心に富るものである。と

○私は舊習打破と云ふことによつて明治維新が成就した關係から、エルウード氏の理想に近い我が家族制度の打ち壞される傾向のあるのを憂ふるものであ

ります。私は我國現代の文明が西洋文物の採用によつて打ち建てられたる關係から、エルウード氏の所謂野良犬の喧嘩のやうに賤しい西洋の個人主義が我青年男女の腦裡に浸潤し行くことを深く憂ふるものであります。私は此の小さな論説によつて、皆さんが止まるべき所守るべき所を悟つて下さつたならば私の滿足此の上もない次第であります。

寄生動物の話

秋山　幹

寄生動物とは一体どんなものであるかと言ふに、考へやうによつてはむづかしくもなるだらうが、簡單に言へば、自分が生きて行くに必要な物を他の生物から横取りして居るものである。さうすると、蚊や蚤の樣なものも人の大切な生き血を吸つて生きて居るもの故、寄生動物と言ひ得る。人間の内の泥棒乞食のたぐひも、人の物を盗み、或はもらつて生きて居るもの故、これも寄生動物の一種と見て差支ない然し此所では寄生動物をさう廣い意味に取ることをやめて、一生他生物に食ひ付いて居て離れぬもののみを、寄生動物と言ふことにしよう。で、この樣な寄生動物には非常にたくさんの種類があつて、其れを一々擧げて行つたら、此雜誌一冊書いても到底書き切れぬことになるから、其の内吾々が常に知つて居らねばならぬ樣な物だけ擇んで、此所に擧げる事とする。

○さなだむし

人の小腸に寄生して居て、そこを通る滋養分を盗み取つて生きて居る惡い蟲である。

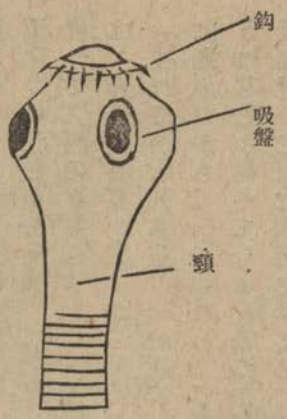
其形が、丁度眞田紐に似て居るので、こんな名が付いたのだらう。英語では Tape—worm と申しますが Tape はやはり眞田紐とか卷尺とか言ふ意味で、同じく其形から付いた名であらう。

さなだむしには、色々の種類があるけれども、大抵どれを取つても似寄つたものであるから、此所では其の一種かぎさなだに就いて、少しくはしく述べて見ようと思ふ。

かぎさなだ

かぎさなだは有鈎條蟲とも言はれる。同しく眞田紐の形をして居て長さは大凡六尺から一丈位、長いのになると二丈位にも達すると言ふ。幅は所によつて異ふけれども、廣い所で三分位で、蟲の一方の端を

人の小腸の内壁にシッカリと着け、體の他の部分は何所へも着けぬに腸の管の中にぶらさがつて居る。そして小腸に密着して居る方の端に近づくに從つて幅が次第に狹くなり、終には糸程の太さになつて、其の先に小さい球のやうなものが付いて居る。これを頭と名付ける。頭の他の部分は多數の節の連りである。所が、頭のすぐうしろにだけは節が無いこの部分を頸と名付ける。此所へ縊れが入つては後へ押しやられて、新しい節はあとからあとからとうしろへ向つて出來て行くそれ故、さなだむしの体は絶えず伸びて居るのである。扨この節は、節足動物の節とは全く異ふので、特に之を片節と言ふ。一匹のかぎさなだの片節の數は、八百から九百程もある



この様なものが、どうして人の小腸の内面に付いて居るのであらうかと言ふに、それは、頭にある鈎と吸盤との働に依るので、鈎を小腸の内壁に突き刺し頭の周圍にある四つの吸盤でシッカリと吸ひ付いて居るのである。

先外から見た形はこんなものであるが、次に體の内部を見ると、他の動物に見られない事を多く見付ける。其の一つとしては、各々の片節が別々に同様の器官を備へて居ることである。

それ故一つの片節を切り放しても、一人前、否一匹前の仕事は出來るわけである。片節には其位置によつて老若の別がある。即頭に近い程若く、頭から遠い程老いて居る。其理由は前に述べた片節の出來方から考へて見たら明瞭になるだらう。

今一つの片節を取つて見るのに、其の片節の恰全部は蕃殖の機開で充され、特に古い片節になると其中には卵が饅頭の餡の様にイッパイ塡まつて居るだけである。

運動のもとをなす筋肉もなければ、又消化の器官もない。即口もなければ從つて胃も腸も肛門もない。

然らばどうして食物を攝つて居るのであらうかと云

ふに、體の表面全体から之を吸ひ取つて居るのである。小腸の中にあるものゝ大部分は、既に人によつて咀嚼され消化された滋養分である故、これをさなだむしが再度口で嚙み、胃や腸で消化し直す必要は更にない。口や胃や腸の無いのも其爲であらう。之消化された滋養分を食べて殘滓の出やう筈はなく、從つて肛門の必要もない。又運動の機開の無いわけは、運動の必要が無いからである。

『生れてから死ぬ迄、一と所にばかり着いて居るのは退屈だから、一つ氣ばらしに散歩でもして來ませう』。などゝ考へて今までひつかけて居た鈎をはづし吸ひ付いて居た吸盤をゆるめて腸の内壁から離れ、フラリ〳〵と歩き出したと考へて御覽なさい。こんどは再腸に附着しようと思つても、さうたやすくは行かぬ。惡るくするとそれきり宿主との緣が切れて終ひ、散歩どころか、人の糞と一所に遠い〳〵國へ嶋流しになつて終ふ事になるかも知れぬ。

即運動と言ふ事は、生活上頗危險な事である故其筋肉は退化して無くなつて終ひ、宿主に嚙り付いて居る爲の機開だけが發達して居るのである。

次にその發生に付いて簡單に述べて見よう。發生とは、卵からおとなの體になるまでの順序である。後方の古い片節は、數へられぬ程たくさんの卵で滿されて居るのであつて、この片節は時々體からちぎれて糞と一所に人の体外に出されて終ふ。人の體から外に出た片節は、すぐ死んで終ひ、終には腐敗して壞れて終ふ。然し中にあつた無數の卵は死なずに殘り四方八方に散乱する事になるので、或者は肥料と共に畑の作物に懸けられるだらうし、或者は水中に入り、或者は塵芥に混し、或者はそこらの草の葉に付くだらう。この時に其卵を取つて見ると、既に卵の殼の中には六ッの丈夫な鈎の生へた幼蟲が出來て居る。然し石灰質の硬い卵殼を被つて居る爲、寒さ暑さの爲に害を受ける樣なことは更に無い。この儘長い間生きて居て、やがて豚に食はれるのを待つて居る。

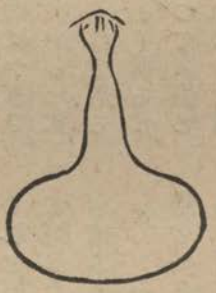
若しこれが飼料と一所になつて豚の口に入り、胃に送られると、卵殼は胃の中に有る消化液の爲に溶かされて無くなり、中から幼蟲が六つの鈎をうち振り〳〵大嬉びで出て來る。

出て來た幼蟲は、其鈎で豚の消化器に孔をあけて、其そとがはに出で、筋肉の中に入り込んで此所に長

い間住んで居る。此時にはよほど形が變つて來て居るのであつて、鈎は脱け落ち、體は前よりも大變大きく、嚢の形になつて中に水の様な液を澤山貯へて居る。其れでこれを特に嚢虫とも言ふ。嚢蟲はだん〳〵生長して、しまひには親と同じ形の頭を生ずるやうになる。然し片節はない。

幼蟲

嚢蟲縱斷



頭ヲ生ジタル嚢蟲

この様な有様で、長い間の豚肉の内に寄生して居てこんどは人に食べられるのを待つて居る。人が豚肉を食べる時に、よく煮さへすれば嚢蟲は死んで終ふから何でもないのであるが、煮方が不充分であると嚢蟲は死なずに人の體に入り、胃を經て小腸に至り頭をもたげて其の壁に固着させ、嚢を棄てゝ頸の所からだん〳〵と片節を增して行き、終に親の形となるのである。

かう述べて來ると、さなだむしが豚や人の體に入り込むのは、誠にたやすい事のやうに思はれるかも知らぬが、實際はさうではなく、生み出された子が再宿主の體内に入り込む事は、極稀な事であつて、何千或は何萬の中の一つか二つ位に過ぎぬ

タマサカ幼蟲が豚に食はれて其筋肉の中に入り込む事が出來たとしても、それが人に食はれなかつたら最後、いつまでたつても親の形となる事は出來ず、嚢蟲の姿で一生を送ることゝなり、卵を生んで子孫を後世に殘す事は到底出來ぬ。

前に片節は恰卵で充されて居ると言つたが、そんなに卵の數の多いと言ふ事は全く此理由によるものである。鷄の様に、生んだ卵が孵へつて皆親の形になるものならば安全であるが、ろうは行かぬ故、なるべく多くの卵を生んで、運の巡り合はせを持たねばならぬ。

も一つ一寸こゝで考へて見たい事は、さなだむしは一生の間に二種類の動物に寄生する事である。嚢蟲

の時には豚に寄生したのであつたが、後には人に寄生して親即成蟲となつたのである。この場合豚の様なのを中間宿主と言ひ、人を終局宿主とする。回々教の信者は、宗旨の上から豚肉を食べる事を禁ぜられて居るので、このさなだむしに付かれた者は一人もない。近來日本人は隨分豚肉を食ふから、之に付かれさうなものだが、不思議な事には、未だ之に寄生されたものは一人もないと言ふことである。

かぎなしさなだ

名の通り頭に鈎が無いだけで、其他の有様はかぎさなだによく似て居る。體の長さは大凡一丈から三丈位。幼蟲は牛の肉の中に囊蟲となつてかくれて居るのであつて、人が牛肉を食べる時それをよく煮るとかよく燒くとかしないと、人の小腸へ行つて成蟲となり吸盤で吸ひ付き、やはり此所で人の消化した滋養分を、横取りして生きて居る。即中間宿主は牛で終局宿主は人である。

回々教徒は豚肉こそ食べないが、その代り牛肉を多く食べる故、このさなだむしを宿して居る。日本人にも、之に寄生されたものが隨分ある、

この種類のさなだむしが多く居るのは、『アフリカ』の『アビシニア』であつて、其所の土人は人と世間談なぞをしながら、平氣で野外に排便をする。牛を飼ふのにも一定の牧場を設けずに、野外に放つて勝手に草を食はせて居る。それ故もし土人の體内にかぎさなだが寄生して居たとしたら、糞と共に出たる多數の卵は、そこらの草に付いて居て、やがて牛に食はれ、囊蟲となつて其の筋肉内に宿ることになるわけだ。實際この土人は牛の腥肉が大好きで、盛に食べる故之に寄生されない人間は一人もない程で、これを宿せば糞便が軟かになり、便秘するやうなことがなくなるので、かへつて之に付かれるのを喜ぶと言ふことである。

みぞさなだ

體の長さが三丈餘にもなる。然し片節が非常に短いので、其數はづゝと多く、三四千位連つて居る。頭には鈎も吸盤もなく、縱に深い溝があるだけである。この溝は吸盤と同じ働をするもので、これで人の小腸に吸ひ付く、

この中間宿主はますである事は確である。

今から三十年許前の事、飯島博士が利根川でとれた鱒の肉から其の囊蟲を見出し、自之を飲み下し、や

がて人の小腸の中で成蟲即親の體になると云ふ事を証明されたと云ふ事である。

然し鱒だけに限らず、鱒によく似た鮭、其他淡水産の魚の中にも囊蟲をもつて居るものがあるだらうと思はれる。それ故これ等の魚はよく煮るとか燒くとかして食べぬと危險である。

ますの刺身は非常にうまいさうで、危險を冒して迄之を食べるものがあるさうだけれども、咽喉三寸の樂の爲に、腹の中に三丈もあるやうな蟲を宿す事になるのであるから、餘程氣を付けて欲しい。

又それなら肉を塩漬にするとか、凍らすとかしたら生で食べてもよいだらうと思ふかも知れぬが、囊蟲はなか〳〵さう一寸には死ぬものでない故、塩鮭塩鱒の樣なものも、なま燒けはよくない。日本人に寄生するさなだむしの多くはこれである。

さなだむしには此他色々の種類があるけれども、人間と關係の最深いのは以上の三種である故、これで切り上げる事とする。

尙これ等さなだむしの驅除法として最手輕なのは、柘榴の根の皮を煎じて飲む事である。其他濠州『フイリツピン』東印度に産する『カマラ』と言ふ植物から取つた藥の『カマラ』、及『メンマエキス』などを飲むもよい。然しこの樣な事は、醫師と相談した上の事である。

○はらのむし

前に述べたさなだむしの體の出來具合は、如何にも寄生動物らしかつたのである。新らしい言葉で言へば、寄生動物としての理想的な體を持つて居たのである。所がはらのむしになると之と反對で、寄生動物らしくない所が多い。消化の働はしないけれども消化の管は確にある。運動をする爲の筋肉も備はつて居る。この蟲は人の小腸の中に棲み、あちこち歩きまはつては、腸内の食物を手當り次第に飲み込んで居る。さなだむしの樣に、一ヶ所に固着することはしない。それ故嘔流しになり易い。時には胃、食道を遡つて口或は鼻の孔などから出ることもある。

形は誰も知つて居る通りみゝづの樣であるが、両端が尖りみゝづの樣な節はなく、色は薄茶色である。

小供に多く寄生するけれども、さう許りとも限らず或は七十許になる老人は、二十匹も之を宿して居た事である。之に寄生されると、貧血となり、頭痛がしたり、御飯がおいしくなくなつたり、嘔氣を催し

たり、下腹が痛んだりする。一匹のはらのむしは、一日に一萬五千も卵を生むから、二十匹も居たとしたら、三十萬の卵が一日の內に生み出されるわけになる。卵は宿主即人の糞に交つて外に出るのであるが、卵殼の丈夫なのを被つて居る故、卵が孵つて幼蟲となつても、殼から外に出ないで四五年間も死なずに其儘で居る。野菜にも付いて居らうし、井戸の水の中にも流れ込んで居るだらう。この野菜を生で食べたり、この水を生で飲んだりすれば、人の胃で殼が溶かされ、幼蟲は腸に入つて、五週間の後には既に親となり、盛に卵を生む。中間宿主はない。驅除藥としては『サントニーネ』がよい。

○十二指腸蟲

日本全國に蔓つて大害を及ぼして居る。

長さは三分位の細い虫で、小腸特に十二指腸に寄生して居る。この蟲は腸の中にある所の、消化された滋養分を横取りして居るのでは無くて、腸から血を吸ひ取つて生きて居るのである。

この樣な小さい蟲だから、たとへどれ程血を吸はれた所で何でもなさうであるが、實際はそうでないこの蟲の口の周圍には、鋭い鈎が生えて居り、これを用ひて十二指腸に傷を付けて出血させ、其流れ出た血を吸つて生きて居るのであるが一度出た血は、さう直に止るものではなく、十二指腸蟲が腹一ぱい吸ひ込んで、もういやになつた後でも、猶餘分に長い間流れ出て居る故、人の血は益々減つて行き、虫の體に似合はぬ大害を、人に及ぼす事になるのである。

即貧血症となつて、顏の色は青くなり、體は痩せ、めまひがする樣になる。一人に五千匹も付いて居た事があるさうだ。

以前この虫が或る村に流行した事がある。さあ其の村では大さはぎ、何でも食べ物はよく煑なければいかぬ。大根おろしや漬物はもつての外だ。なぜ〻、用心に用心をしたけれども、一向病が衰へぬ。『扨これはどうした事であらうか』と、學者に相談したので、よく究べて見ると其筈だ。この幼虫は口から入つて來る許りでは無く、人の皮膚の何處からでも、所きらはずにもぐり込むのである。人の十二指腸の中で、親から生み出された無數の卵は、糞と共に排泄されるが、卵はすぐ孵つて幼虫となり、人の體にさはつたら早速もぐり込んでやらうと、身構へして

待つて居る。もし人に會はなければ、水の中なら一年以上も其儘で生きて居る。田の中等へは、肥料に混じて多くの幼蟲が入り込む故、これを耕やしに入つた農夫へは足から浸入する。そして體内を巡り歩き、終に十二指腸に達するのである。そしてこゝで親となつて、また卵を生む。これにも中間宿主はない。これが驅除劑としては『チモール』『フベタナフトール』等がある。

○肝臓ヂストマ

これもやはり日本に蔓つて居る寄生蟲である。體は篦形をして居り、大きさは色々で、大きいのでも六七分に過ぎぬ。人の肝臓に寄生して居るもの故、これを驅除する事はなか〳〵むづかしい。非常に多く寄生して居る事があつて、或人が解剖した一屍体の肝臓には、四千二百七十三匹付いて居たと言ふことである。

卵は糞と共に人の体外に出て幼蟲となり、二つの中間宿主を經て後、終局宿主である所の人間に入つて來るものである。第一の中間宿主は『にな』と言ふ介、第二のは『はや』『たなご』『もろこ』など言ふ淡水に棲んで居る魚である。この蟲は、幼蟲の形で中間宿主に寄生して居る間にも、絶えず多數の子を生む故、人の体から出た一つの卵が孵つて、幼虫から成虫となるまでには大した數になるわけである。これに付かれると滋養分の配布、貯藏、及消化の働をする肝臓に變化が起り、貧血となり、痩せて衰弱の末終には死ぬ樣なことになる。

岡山、滋賀、宮城の三縣に最多く流行して居る。この流行地では、前にあげた樣な魚には特に注意すべきである。

祈念に就而

高橋みゆき

乏しき者が物欲しがる樣に、跛が両の脚揃はれる者以上に歩きたがる樣に、もの言ふ事の眞に拙い私は心行くばかり話して見たいと、平素望むで止まないのである。決して立派な思想が豐かにあると云ふ譯では無いが、常に思ふのみで過して居る其の一節を記して見ようと思ふ。

現在の日本語の内に、言葉丈あつて、實の伴はぬものが少なく無い樣に思はれる。一方に、實丈存して其れを如實に云ひ表はし得る言葉が無い樣に。茲に私の取り揚げて申し上げたいのは、全々的に實が無

いと云ふのでは無いが、屢々無駄花的に裝飾的に用ひらるゝ、祈る念ずるといふ事に就而である。

手紙の終りに、『切に祈り入りゆ』『念じ上げゐ』など書く事や、送別の辞の内に健康を祈ると云ふ言語等、誠に人情に厚みを示した美しい而も力ある言葉である。が、其の手紙を書く人、さる挨拶をする人は、何時如何にして祈るのであらうか。恐らく、單に自分の心の的として居る者に對する希望を現はさんが爲めに、此の言葉を借りて用ふる場合が、多くあらうと思はれる。故に、偶々神佛を知らぬ者は愚か、其の存在を否定して居る者さへが、憚りも無く此の言を用ひて居るのを見る。然し實際を云ふと此の祈ると云ふ事は、にとをとが備はらねば、意味の完全しない言葉である。換言すれば、只に君の健康を祈るとか、某の幸福を念ずると云ふ丈では半分であつて、命の存する他の半分即ち、たれに向つてと云ふ事を缺いで居るのである。これでは、美しく花を咲かせた木や草が、人目に見へぬ地下にあつて力の基となつて居る根と、相離れたるに等しく、實を結ぶに至り得ぬのである。故に、筆先口先にて祈る念ずるの安賣りをするのみで、神前に額づかず、佛に手を合す事をせぬ者は、畢竟言行相伴はざる者との誹を受けても仕方が無い。

然し、今私はさる方々の言行不一致を責めるのでは無い。自分にこれ迄授かつたもの〻内で、最大の恵みと感謝して居る事が、此の祈念と云ふ事なので、若し未だにこの味を御存じ無きお方々もあらば、ともにお分けしたいばかりに、貴重な紙面を汚させて頂いたのである。

斯く申すと、『神は自ら助くる者を助く』『心だにまことの道にかなひなば……』であるから、祈る事は不必要であると思召すお方もあるであらうが、私は此の格言道歌を、前者は自助、後者は道を守る事の肝要を、教ふると同時に、各々其の實行者に對する神の有難き加護ある事を示して居るものと解して居るから、其所に些の撞着をも生じて居るとは思はぬ世の中には、總てあらゆる方面に渉つて望んで得られない失望、また得意であつても、其れを得る迄の不安を、一生經驗せないで濟む者は無い。剰さへ、道に從はむと欲して却而過ち、自ら助けんと欲して力及ばざる者もある。斯く思ひ及ぼす時、どうして心の限りに祈らずに居られようぞ。

祈りは他人と云はず自分と云はず、自他両者の身並びに心に服膺して、利目妙なる最良藥である。内に痛みを覺ゆる時、また、心の惱、腹立たしいとか、心配だとか、憂はしいとか、物足らぬとか、悲しいとか、常ならぬ感情に襲はれた時、心靜かに祈られよ。見ゆる世界と見へざる世界をしろしめし給ふ慈悲に富み給ふ神佛に、包み隱すは愚の至りである。ありのまゝを打ち明けて祈られよ。信じて祈られよ神佛は必ず〳〵最よき方法にて我等に答へて下さるのである。涙はぬぐはれ、波は靜まり、憂の雲は晴れて、豐かに安らけき身心を得るのである。

一体祈るとは、人間が絶對と信ぜる力即ち神佛に、自己の願望を心の底から陳述する事である。其の形式は、宗教の種類に依而一様で無いが、其の精神に於ては何れも大差ない様に思つて居る。『分け登る、麓の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな』であるから、手を合せようが、額づかうが、形に躓づかないで、登つてほしい。縮緬の着物だつて、錦の帶だつて、或は布子一枚だつて、かまはない。總てを與へて下さつたお方へ行くのだから、見へを張るのは無駄である。見すぼらしきを恥づるの要も無い。自分の持てるもの〻内で、最も當を得て居ると信ぜるかたちで行くのが一番だ。其れで、それが若し不適當であつたらば、必ずいつか何れかの方法で、よきかたちを示して下さるに違ひ無い。であるから、形を案ずる事を止めて、心を急ぐべし。一大問題で無くとも、日々夜々の事事を、御前に携へ出で〻、祈念し感謝すべくんば感謝すべし。

我々の力に對するは、子供の親に於けるが如しと見たら最も適切であらう。ちからの我等に對するも亦同様である。同じ人間に過ぎぬ親でさへ、あれ丈子供に盡し得るでは無いか。ちからの源なる神佛に對して、求めて得られざるものが、何あらうぞ。

たゞ、茲に一言して置きたい事は、眞心を以て、飽かぜ祈ると云ふ事である。明日と願ふその明日に、思ひのかなはざる事あるべし。そは大いなる御眼に明日ならざるが祈る者の爲めよしと思召さる〻が故なり。また晴天を望んで暴風雨をさへ授る事あるべし。之れ愛の鞭、これを以ていよ〳〵、弱き我等を鍛へさせんてふ、有難き思召のある所である。感謝して受け、彌々祈念を怠るべからぜ、われ〳〵の言行一々が、ある時は人間の感得し得ぬ程微かな事も

あらふが、兎に角、實際に於て、一々世の中に波紋を生じて居る樣に、祈つた其の祈りが、無意味に終ると云ふ事は、決して〳〵無いのである。

或る人は云つて居る、『祈はわが息なり』と。如何にもそうであらふ、薄信で、且つ、井中の蛙の樣な私ですら、息と出して猶足らざるを思ふ位である。ましてや、燃へる信仰を有し、世界宇宙を舞台として居らるゝ大人物であつたら、どうして祈る事無しに居られようぞ。佛が、一切衆生の爲め、キリストが總て世人の爲め、祈念したるが如きである。

如何なる親密の間柄にも、禮の缺ぐべからざる如くに、ちからとの交渉に於ても、少なくとも、一日に一度は形を重んじた祈りをしてほしい。心身を、全々的に御前に出して、專心祈つてほしい。非常な出來事に際した時は、如何なる暇を割いてでも、神佛に祈願を籠めるでは無いか。事無き時に暇無しと云ふは、申わけない次第である。まして況んや、祈は誰が爲にせようが、畢竟自らの爲となるのであるから、夢怠れる筈が無いのである。きよき晨、事始めの前或は一日のつとめを終つた靜かなる夕べ、勞れた身心を御前に額づかせて祈る其の間。此の世にて極樂を味い得るは、全く此の祈りの時である。純粹の安喜のうちにあり得るのである。實にまた無き惠みである。日頃の生活が、心得なければ得ない丈、この祈りの時は、彌々高く評價される。時間と空間の妨げを、毫も受ける事無しに、自分の望む誰とでも、思ふがまゝに會し得るは、此の時である。此の祈りの世界には、不可能と云ふ事は一つも無いのである。總てあらゆる事、また、人の上に就ても、萬を、各自の信ぜる御ちからの御手に任せて、賤しい自分がちからと對座し得るのである。あゝこの味を御存じないお方々に、どう致したら、其の幸福を分ける事が出來ようか。拙い言葉、廻らぬ筆がもどかしい。やはり〳〵、皆樣の御心を、神佛の御手に委ねまつるより外は無い。

私は始め祈ると云ふ事に就て、無駄花的とか、裝飾的とか申したが、此の祈りは咲いて美しい花、神秘を添へる飾りである。故に、決して摘み取る事無く爾後は、彌々つとめて、生る花に咲かせ、出來る丈多くの、實を結ばせたいものである。長々と云ひ來つたあとを顧ると、お恥しい程拙いが、讀んで下さる方々の、徒勞とならねば幸福である。

講演抄記

龜山僧正講演

（六月二十日）

人の心は形もなく色もなきものなれども種々に形容することあり。『赤い心』『腹が黑い』『心がキタない』など〻色にて表はし、又は『あの人は丸い人だ』とか『角のある人だ』とか心に形あるもの〻如くに言ひなすが如き是なり。

余思ふに心は寶珠（又は如意）の如くならざるべからぞ。夫れ寶珠は□と○との折衷なり（紙の型にて○の形になる事を示しつ〻）歌に曰く『丸くとも一角（ヒトカド）あれや人心余り丸きはころびやすきぞ』と。丸い許りでは節操が立たぬ。角い許りでは融通が利かぬ。本校講堂の額を拜見するに剛柔双全とあり。即ち此の意なり。而して余は更に思ふ。男子は表は角にして裏には丸き所あるべく、女子は外柔かなるが中に守つて動かざる角を藏するこそよけれと

余嘗て丸龜に遊び悲壯なる一佳話を聞けり。幕末の比かとよ。丸龜郊外のドギ川堤の小屋に女乞食の親子の果敢なき命をつなぎてありしが、或る夜一人の武士新刀の切味（キレアヂ）を試さんとて來りて母なる乞食を斬らんとす。子身を以て之に代らんと乞ふ。武士子を斬らんとす。母身を以て之を蔽ふ。至情惻々を人動かすものあり。武士は潸然涙を拂つて去りきと云ふ愛の爲に死を怖れざるの意氣は百練の新刀も之を斷つこと能はざるなり。

萬死を辞せざる一片の意氣は、磨きに磨かざるべからぞと雖ども、而も年若き時には往々にして方向を誤ること多きを記せざるべからぞ。近時平等思想個人主義とも云ふべき考が普及するにつけて、自已の野心又は慾望の爲に長者の戒を蔑視し、他に對する義理人情を沒却し、取り返しの付かざる不道德をなすこと多し。

余自身も客氣にはやりて恩義ある老師の慈悲にそむき佛道修業の爲に京都に出奔せしことありき。又一度は他人より譽められて茲に慢心を生じ、變じては憎むべき反抗心とさへなりて生涯を誤らんとし

たることもありき。

要は人の心は丸きが中に一角あるべし。而して其角とは血氣の勇に非らず、我慾を通さんとする意地にもあらず、將、又、己の力を恃む自負心にもあらず義の爲に死を怖れざる意氣即ち之なるのみ。而して此の意氣は誤り用ゐらるゝ事多ければ、よく〳〵識者先輩の指導に聽くべしとなり云々。

大和先生講演

《七月十八日》

現代の女子が古來の美風をすてゝ日に輕薄になり行くは誠に歎かはしき事なり。今通弊を述べて諸子を戒むるの機會を得たるは老人の滿足に思ふ所なり。況んや諸子の父兄の多くが直接間接に余を知り居らるべきを思ひ、或は余の教授を受けられし方もあるべきを思へば、諸子に對しても亦一脈の情誼を感ぜるに於てをや。

古來刀は武士の魂として一點の曇をも付けまじと心身の修養を怠らざりき。是と同樣の意味にて女は鏡を其の魂として精神的に愛護したるものなり。鏡とは鑑なり『がんがみる』なり。唯單に容姿をうつすのみならず、深く内に自ら省みるなり。心は顏に表はる。腹立ち氣なる顏、悲しげなる顏、皆人に不愉快を與ふるものなれば、昔の女子は鏡に向ひて梳る容作る外に心を落ち付け晴れやかなる氣分になることに努めたるなり。今日にては紅白粉の濃淡をのみ見る一箇の道具と心得居らるゝこそうたてけれ。爾今以後心にわずらひある時は直に鏡を見て内省するやうにせられたし。

次に著しく衰へたるは師道なり。昔の師弟の關係は頗る嚴重なるものにて、弟子は師を敬ふこと誠に厚く鄭重なりき。弟子成熟の後と雖ども寒暑に師を見舞ひ終身怠らず。現時は然らず。或は教師に對しヨコ名を付け或は途中にて故意に禮を欠ぐ如き事をなすものあり。又、西洋思想の中毒として孝といふ事を疎にするもの多く、女子の他に嫁して舅姑に事ふるに誠足らず。隨つて嫁姑の中不和なれば、新舊思想の衝突なりなど〻勝手なる理窟を並べ、他も亦多く嫁に同情する傾あり。然れども是亦誤れり。熱誠以て舅姑に事へ、事理のたがふ事あらば顏色を和げ諄々として漸次に改善を謀らば決して成功せざるなきなり。嫁たるものが長幼の序を思はず、心中對等

以上のつもりにて老人に對す。相扞格する所あるは自然の勢のみ。

孝と云ふ文字は老（親）を負ふ子の會意也。而して書法に孝と子と決して離るべからずとあり。念々親を離れざるべきを意味するなり味深し。

最後に述べたきは貞信堅固の度、昔時に及ばざるを思ひ女子道德の墮落として痛歎に堪へざるものあるの一事なり『一死以て操を守る』極端なるが如けれども變に處しては正に斯くありたきものなり。伊豫三津濱に一浪人あり。一人の娘と共に寺子屋の師匠として細き活計をなし居りしに、或日父なる人の不在に乘じ、若者等來りて其娘を辱しめんとす。父より敎へられたる長刀の一手。風にも堪えぬ美しの少女は忽ちにして熱烈火を吐く烈女と化して痴男數人斬つて捨て、遺書を作つて自ら死す。事藩主に聞え厚く之を賞し給ひきと云ふ。又曩日一新聞紙にて讀みし事なるが某銀行頭取の妻女が瀛車にて旅行したりしに、不幸にして其の列車には乘客減じて唯己一人となる。然るに一賊あり。妻女を弄ばんとす。防ぐに術もなき妻女は突然身を躍らして窓より飛び降る。賊亦隨つて飛ぶ。然るに命なるかな、天なるかな、賊は岩頭に頭を碎かれて死し、妻女は微傷だに負はざりきと。上述の二例話は事非常に屬すと雖ども而かも『一死以て操を守る』覺悟は女子平生忘るべからざるの事たり。今余は孝道貞道師道並に自省の四德を說けり。諸子之を體得せらるれば老人の滿悅之に過ぎざるなり。

大意を摘錄しましたので、御講演の意味を十分に盡くすことが出來ませんでした段は一に筆者の罪であります。茲に兩先生に御詫びを申上げます。

元日や神代の事も思はるゝ

元日の見るものにせん不二の山

文苑

女性に關する唐詩

磐洲

子夜吳歌

長安一片月　　万戸擣衣聲
秋風吹不盡　　總是玉關情
何日平胡虜　　良人罷遠征

長安の都に照る弓張月を見又、毎戸衣を擣つ音を聞き乃至は夜毎に秋風が吹いて、玉門關に居らるゝ夫の身上を思はれてならぬ嗚呼良人は何時賊を平げて凱旋せらるゝことだらう

烏夜啼

黃雲城邊烏欲棲　　歸飛啞々枝上啼
機中織錦秦川女　　碧沙如煙隔隴語
梭梭悵然憶遠人　　獨宿空房淚如雨

黃雲のかゝれる城の森に烏が塒を求めんとてカアカア鳴いてゐる之を聞くと夫の遠征の事が思はれてならぬ。昔錦の中に詩を織り込んで出征の夫に送りし竇滔の如く妾も青沙の窓から自分の意中を語る。梭を停めて長大息し空房に臥し涙が雨の如くである

秋思

燕支黃葉落　　妾望自登臺
海上碧雲斷　　單于秋色來
胡兵沙塞合　　漢使玉關回
征客無歸日　　空悲蕙草摧

夫の戰に行かれし燕支山あたりに落葉したのであらう妾はなづかしくて高台に登つて其方を見る海漫々として雲なく只單于の居る朔の方より哀しい風が吹いて來る。沙漠の邊では今合戰最中で都の使は玉門關から歸つた。夫は何時歸るやら知れぬが其中に妾がお婆さんになつてしまふ

怨情

美人捲珠簾　　深山顰蛾眉
但見淚痕濕　　不知心怨誰

美事な玉の簾を捲き上げて美人を見た其美人が

眉をひそめて居る。その中に涙をハラ〳〵と流した誰を恨んで泣くであらうか

長春草

長春宮中草　年々愁所生
時侵珠履跡　不使玉階行

太后の居らるゝ長春宮は人の訪はぬ所故草が澤山生えて居る。此草はだん〳〵蔓つて天子のお歩きになる道まで塞ぐだらう。意は天子は長春宮に行幸ならず又太后も行くことならぬは草が茂つたからであるといひなしたのである

思君恩

小苑鶯歌歇　長門蝶舞多
眼看春又去　翠輦不曾過

小苑を見ると鶯も啼かぬやうになり宮殿の邊には蝶が舞ふやうになつた。見る間に春過ぎ段々時候の變るにつれて君寵元にかへるかと思ひし甲斐なく更に臨御がない。さて〳〵我身は秋の僧都ぢや

清平調三首

（一）

雲想衣裳花想容　春風拂檻露華濃
若非群玉山頭見　會向瑤臺月下逢

麗しき雲や美しき花を見ると美人を聯想す。玄宗皇帝、傾國を想へるをいふ。間もなく楊貴妃を得。其姿春風吹いて露を帶びたる花の如し。こんな美人は群玉山の西王母か瑤臺に居る仙女の外にはあるまい。さて〳〵非常な別嬪ぢや

（二）

一枝濃艶露凝香　雲雨巫山枉斷腸
借問漢宮誰得似　可憐飛燕倚新粧

一枝の芙蓉の如き楊貴妃は美しく艶かで香しき句を放つ。これは丁度昔楚の襄王の夢に逢つたといふ神女のやうである。此樣な美人は現世には類ふべきものはない昔の趙飛燕でも素顏では比較にならぬ化粧したなら幾らか似るかも知れぬ

（三）

名花傾國兩相歡　常得君王帶笑看
解釋春風無限恨　沈香亭北倚闌干

牡丹といふ名花、貴妃といふ傾國、玄宗帝は此の二つを笑を含んで眺めて居る、花も春風が吹けば散り女も年を取ると寵衰ふるかと心配する

ものなれども貴妃は嘗て帝と『天に在つては比翼の鳥となり地に在つては連理の樹とならん』と誓言した位であるからそんな心配は更にない

春宮曲

昨夜風開露井桃　未央前殿月輪高
平陽歌舞新承寵　簾外春寒賜錦袍

昨夜の風で御庭の桃が開いた帝も未央殿に出御になつて夜更くるまで御遊興なされる、そして漢の平陽公主の召し使はれたやうな歌舞の女を寵愛のあまり錦袍を賜はつた。これは寵を失ひしもの寵を得しものを妬んだのである

西宮春怨

西宮夜靜百花香　欲捲珠簾春恨長
斜抱雲和深見月　朧々樹色隱昭陽

長春宮に班婕妤といふ官女が佗住居をして居てやるせなさに簾を揭げて花を見んとせしが春色を見れば却て愁が生ずる。如何かして愁を晴さんと琴をゆがみなりに抱いて月を見ると昭陽殿が微かに火影見ゆる定めし趙飛燕などが君寵を專らにして居るとだらう

西宮愁怨

芙蓉不及美人粧　水殿風來珠翠香
却恨含情掩秋扇　空懸明月待君王

化粧した處は芙蓉の花も及ばない美人が薫花の咲いた池の上の水殿にて眺むれば風が吹き來つて香しい。こんな美人も君寵がなければ秋扇のうれの如く顧みられない。しかし余が心は明月のやうであるから今夜の月明には或は臨御になるかも知れぬ

長春秋詞

眞成薄命久尋思　夢見君王覺後疑
火照西宮知夜飲　分明複道奉恩時

班婕妤は自ら思ふに自分はほんとうに不幸であるのか分らぬ不幸ならそれであきらめもつくが時々君の寵愛をうけた夢を見ることである。夢がさめて長春宮から見ると昭陽宮から長春宮に火がうつつて深夜の御遊興が分る先程廊下で寵愛を受けた時は酒宴に侍りしやう思はる夢か夢にもあらず現か現にもあらずさて〳〵不思議なことぢや

小袖曾我より

三宅　素

謡曲の小袖曾我は大そう名文だろうで御座います。私は之を通讀して、所々俳句に作つて見ました。ほんとうに一夜作りで句にも何にもなつてゐません。唯々所謂『枯木も山の賑ひ』にとて書き付けました

（○印は原文）

○東八ヶ國の兵ども、皆御供に參るなれば、定めて敵の祐經も、御供申さぬ事あらじ。たとひ撃つまでの事は夏野の鹿なりとも狙ひて見ばやとますらをの狩人に紛れ打ち出づる。

鞦々と四股踏んで見る夏野かな

よき人の帆かけ鳥帽子や風薫る

○伊豆箱根富士權現も御覽せよ。猶この後も勘當と御誓言に蔀遣戸をたてそへられて茫然と、やる方もなき此身かな。うたてやせめて今一目。……御簾凡帳もおりたり。あら、情なの御事や。《是は時致を母が叱つて御簾を下ろしてしまつた所》

さとおろす簾に牡丹くずれけり

○祐成はかくとも知らで時致が時移りたり事よきかと、中門を見やりつゝ、はや此方へと招けば、……打たれても親の杖。なつかしければ去りやらず〳〵《兄祐成は弟がお母さんに叱られたとは思はず。はや來いと手招きする。弟は叱られても親のなつかしさに中門のほとりに行んでゐる》

蚊柱や中門に立つ人悲し

○舞のかざしの其ひまに〳〵兄弟目を引き、これや限りの親子の契りと、思へば涙もつきせぬ名殘。《お母さんの御機嫌もなほつて、お別れの祝言をしてゐる》

謡ふ五郎舞ふ十郎にさみだるゝ

○富士野の御狩の折を得て、年來の敵、本望を遂げんと、互に思ふ。嗔恚の焰、胸の煙を富士風に、晴らして月を清見が關に、遂には其名をとめなば兄弟親孝行のためしにならん嬉しさよ。《母との暇乞ひを濟ませて、富士の裾野の卷狩に……敵を討たうと喜び勇んで、兄弟一所に勇しく出て行く》

陣々の旗差物や夏木立

五月雨の晴待ち得たる門出かな

小さき星

二年

一、可愛い星よ今晩は
我は臥戸につくぞかし
我の夢路をたどる時
なれは御空にかゞやかん

二、まどかな夢を結びつゝ
五更の空も杉の戸の
朝日に夢のさむる時
光を消して汝は眠る

三、我が身のいぬる夜半の間は
青き空にぞ汝は遊ぶ
我が身さめぬる朝には
光をさめて汝は眠る

四、照る月白をかけ橋に
もしも登れる身なりせば
遊ばんものをもろ共に
夏の最中の夜もすがら

五、我も汝も共々に
青空高き天の原
その樂しさを味はゞ
幸いと多き事ならん

六、小さき星よいざ我は
ふしどの内に寢につかん
我の夢路をたどる時
なれは御空にかゞやかん

我が影　三年

一、我の入る時出づる時
必ずともに添うて來る
影てふものを我は持つ
そもや如何なる爲ならん
頭よりして踵まで
似たとは愚か我が形
我身臥床に入る時は
一足先に飛んで入る

二、彼の最も可笑しきは
その生立ちの有様よ
遲き育ちの子供とは
其の趣を異にして
時には護謨の毬のごと
ポーンと伸る其の高さ
又或時は眼にさへも
とまらぬ程に小さうなる

三、子供の遊ぶ心をば
　彼は少しくも辨へず
彼はいろんな遣り方で
　嘲るをのみ知つて居る
彼は私にきつちりと
　かぢり付いてる臆病者
私は乳母を追ふを耻づ
　影が私にする樣に
四、或日朝日の出ぬ前に
　非常に早く起き出でゝ
玉の露置くキンポーゲ
　未明の庭に獨り出た
併し怠な我が影は
　堪へ性なき眠たさに
暖き臥床に引ついて
　内にぐつすり寐込でる

小さき事

一、さゝやかな水のしづくも
　いと小き土の一つも
はて知らぬ海とこそなれ
　限なき土地ともなるよ
同じ理の同じ働き
　分秒の暫しとだにも
永久に續き〳〵て
　時の鎖の一ト節を作る

盲の子供

四

一、日の光とは何物ぞ
　教へてたべや世の人よ
世の人々の見るといふ
　視力といふは何物か
　語りてたべや諸人よ
二、世の人々は日輪を
　見るといふなりかつは又
光るといへど我はたゞ
　その熱さのみ何時は夜
　または晝とも知らぬなり
三、めしひの身には遊ぶ時
　晝と知るのみいぬる時
夜と知るのみされは吾

起き續け得は何時までも
只晝とのみ思ふべし

四、幸なき我を世の人の
憐のものやと囁くを
聞くは悲しきものなれど
宿世の罪のうつし身の
徒に歎きて何かせん

五、あゝ思はじよなき幸を
あゝなげくまじめしひ身の
貴き心亡びなん
かく悟りなは吾は王

たとへめしひの子供なりとも

《以上の英詩の譯は『小さき星』は二年、『我が影』及び『小さき事』は三年『盲の子供』は四年の有志者の譯したものを國語の先生方のお手を入れていたゞいたもので御座ゐます》

子供時代

四甲　貝沼歌

（ロング、フエロー）

一、幼ない時の私は
その身の丈は一ヤール
其思出はなつかしく
深い涙にしとゞです
それで私は喜んで
記憶の糸を辿ります

二、私は優しい母さんの
み腕の中で遊んだり
私のすきな父さんの
お膝はいつもお馬の脊
いやみや情や驚きや
こがねや愛や悲しみは
皆私にはおんなしで
何であるかも知りません

三、此世の中の大きさは
遙かに小さく思はれた
惡に於ても世の中は
遙かに小さく思はれた
月に遙かなる大空に
星の昇るを見た時に
自分の力であの星を
得られる羽をほしがつた

四、島のうしろに月影の
沈むを見たる我が心
小島の上にゐたならば
月は何から逃られて
どんなに圓く大きくて
美しいかを知らるでせう

五、たそがれ頃となりますと
大海原をかゞやかし
神のみ光西空に
沈むもわたしはいぶかしい
また明くる朝早くから
眞赤な色で彩つて
東の空に昇るのを
見るも私はいぶかしい

六、ガッドは惠の天の父
あの美しいみ光の
眞球の如き星は皆
天で合せてつながらせ
すべての天をこえ〳〵て
彼(カレ)のみ手から落ちました

七、信心深い母様に
教へられたるお祈りを
わたしの幼ない唇は
げにあどけない尊敬で
『オウ優しい神様よ
私をあなたに從はせ
いつもかしこく善良に
なるまで我に努力をば
與へて下さい神様よ』

八、父母様やはらからや
町の皆んなの人の爲
又は知らない王様や
町の巷を喘ぎゆく
腰のまがつた乞食(コツジキ)の
その兄弟の爲にまで
神に祈りをなしました

九、子供時代の樂しみも
其折知れる喜びも
さてはすべての平和をも
彼等は死してなくなつた
然しそれらの記憶だけ
私の胸をはなれずに

留めて下さい神様よ
未來永久何時の世までも。

競點作文

姉と妹

二乙　岸田道惠

風なく、雲なく、ポカ〳〵と暖い梅日和。

今しも咲誇つて居る梅の木の下へ筵を敷いて澤山の道具を出して、飯事に餘念もなう遊んで居る小さい姉妹。そこらに生へ居てる水仙や白兎の目の樣な眞紅な南天の實などを採つて御料理を拵へて居ます。やがて其れが出來ると小さい姉さんは妹に『之を大きいお姉樣に配つてあげて頂戴』と云ひますと、妹は素直にそれを小さい提箱の中へ入れて今讀書して居る私の所へ持つて來ました。『之を上げませう。』丁度そこに昨日の蜜柑が有つたのでお移りに入れて返しますと、少時くして『文姉さん蜜柑が有つた。』と妹の方が申しますと『そう又配つてあげませうネ』喜んで居る聲が聞えました。こんな事が二三度續きました。暫く何の音もなく靜かに〳〵、時々南天の實がポトリ。

ほんとに長閑な梅日和。

ピシヤリッ。音の消えるか消えぬかに妹の泣聲、汚い口喧嘩の聲が聞えました。私の飛出した時は最う母が出て『どうしたの』となだめる樣に二人の顏を見合して居ました。小さい姉は先刻私のやつた蜜柑のむぎかけを片手に蕭然立つて居ます。隅の方にはつぶれた蜜柑が落ちて居ました。

事の起りは斯うであつた。

私のやつた蜜柑を二人が丁度よいやうに分けて妹はそれを筵の上に置いて何か爲て居た。それを小さい姉が知らずに踏んだのを負嫌ひな妹は姉を責めた。それで肝癪持な姉は腹を立てゝ打つたのだ。

喧嘩の原因は斯うであつた。

母がお座敷から蜜柑を持つて來て『最う喧嘩をするんでは有りませんよ』と云ひ聞かせると、『もう仲直りしませうネ』と小さい小指を交へて何か言ひ合つて居ます。

又南天の實がポトリ。風なく。雲なく。ポカ〳〵と暖い梅日和である。

女の嗜み

三甲　高橋楠子

昔一條天皇の御代に雪見の御會が開かれた事がございました。其の時中宮上東門院が『香爐峰の雪は如何に』と仰せられました。するとお側に持つて居りました清少納言は、つと立ちて簾を上き御げて御覽に入れたと申じます。是は唐の白樂天の『香爐峯の雪は簾を揭けて看る』と云ふ詩の句を形にて直ぐに御返事申上げたものであります。

又其の當時にて前者と肩を竝べる程の文學者である紫式部は常に文字一つ知らぬ顏をして居たと申します。

この二人の方は共に嗜みのある人として私共の尊敬致さねばならぬ方です。私共は何程よく望月の樣に缺けた處が無くても又幾ら形の上にて美しく飾つても何れ程御話が上手でも、若し嗜みといふものが無かつたら、何うして女と申されませう。どんよりと曇つた灰色の空より綿の樣な雪がさら〳〵と降來つて万象を美化する如く如何に自分の身の周圍が清くなくとも嗜み一つで美しく見えるものです。

丁度春の野に霜や雪に犯されつゝ何時誰に摘み採られるとも知れない淡い哀愁を持ち乍ら唯々春といふ前途の夢の樣な光をたよりにして嗜み深く待つて居る可憐な小草こそ立派な物といふべきではありませんか。

いでや我等も清少納言紫式部さては春の小草のそれのごと嗜み深く心姿の美しき女とならうと思ひます

女のたしなみ

四甲　兒玉千賀子

眞赤な椿の花の飜れ咲く丘の上のあばら屋に貧しい母娘の者が住んでゐました。老いた母が亡なる時、たつた一人の娘に框の金蒔繪は擦れ剝げて寒らしい物になつては居たけれど、其の面は宛然秋の水の樣に清らかに澄み切つた、世にも稀なる一つの鏡を與へて、靜かに〳〵永遠の眠に入りました。

『お前の心が曇る時は、この鏡の面も曇るだらう。お前はいつも『女』であるといふ事を忘れてはならぬ。』

娘は一生この母の遺言を忘れなかつたやうに大切な鏡も手離しませんでした。そして如何にも女らしい優しい淨い一生を送りました。

あゝ。女と鏡。何といふ意味の深い事ではございませんか。

娘は勿論『心の嗜み』のみに心掛けて『身だしなみ』を忘れたのでもなければ、又唯々髪貌にのみ浮身をやつして、心の嗜みを疎かにしたのでもありますまい。何故ならばこの娘は心をも形をも照らす、世にも稀なる形身の鏡を身につけておりましたから。

女は我が世に匂ふ紅の花、み空に輝く碧き星だと讃美されております。

花は美しく優しいのが生命である。それ故女も亦美しく優しくなければならない。

けれども、その美しさ優しさが、姿形のみでは丁度香のない艶花。刺を隠した花茨と同様でございます

其の心と姿とがぴつたりと一致しなければ、美しさ優しさも何等の價値も無いといふもの。『内容と形式とは車の両輪の如し』と古人は申しませんでしたけど、私には何につけても斯う叫びたいのであります

其の姿許りが美しくても、心に鋭い針を含めば何處に女の生命がありませうぞ。

其の心掛は優しうても、餘りに容姿が女らしくなかつたならば、之も亦『女』といふ點に於て缺けて居ると思ひます。

特に私達少女は詩に歌はれ繪に描れて、淋しい冬野の紅の花と讃美せられて居ります。ですから紅に箸に身の嗜みを忘れないと同様に心の鏡も朗かに且つ淨らかに磨いて、そして尊く美しく、此の世の花と咲き匂はうではありますんか。

姉と妹

二甲　今井小園

西の空千光寺の眞上なる彼方に、薄墨を流した様な雲が出て來た。道行く人は襟卷に顔を埋めつゝ『あゝ又惡い雲が出た。雪にならねばよいが』と言つて過去つた。間もなく節でふるつた様な奇麗な雪が霏々として降り出した。

其れは舊暦お正月の元日であつた。

私は友達を訪問する爲に歩みを海岸通に運ばせた。四五軒先きの家から小さい女の子の『春駒』を歌ふ聲が聞えて來る。思はず其方へ顔を向けると姉妹と見える二人の少女が物淋し氣な顔で出て來た。姉と思はれるのは十五六歳で妹と見えるは十一二歳である。

二人は次へ〳〵と町並を門付けて行くけれど大方は

『お斷り』を喰ふ。とう〳〵仕舞には張合も抜けたと見えて、果ては互に手を携へて行き始めた。往來の稀な海岸通、道行く人としては二人の少女と私だけである。

高見山は雪の奥に其の雄姿を表はして居る。

海には舟一艘も見えない。雪は益々降りしきる。

二人の後姿の憐れさよ。じみな縞の袷の裾を端折り赤い襦袢を短く着て草鞋を穿いて雪の中をスタ〳〵と行く其の有樣。何か小聲で話合ふ樣だが確とは聞えぬ。

やがて二人は横手に曲つた。

私は名殘惜しく思はれた。噫々彼等二人は可愛相なものである。多分家には病める父でもあるだらう。此の寒空を物ともせず今日お正月の祝日を遊びもせずに働いてる。私は感心せずには居られなかつた。噫々私は私の幸福を喜ばずには居られなかつた。不幸な事には私には姉妹が無い。私も一人の妹が欲しいとは年來の望みであつた。『私も妹があつたらお母樣よりも、もつと〳〵可愛がつて上げやうもの』と、よく言つては笑はれたものだ。

けれど私には、まだ〳〵此の果敢ない望を小さな胸に深く〳〵持つて居る。

修學旅行記

大阪より奈良へ

私は不圖眠から覺めた。此所は奈良の大文字屋である。私等は一昨夜の九時の汽車で尾道を立つたのである。昨日一日の疲勞はすつかり抜けて居る。今日はお伊勢樣へ參詣するのである。嬉しい。お伊勢樣つて一体如何な所だらう二見ヶ浦も見られるし私の何時か〳〵と思つて居た伊勢參宮の目的も之で達するのである。それにしても皆樣のよくお眠つて居らつしやる事。未だ起きるには早過ぎる。て最う眠る譯にも行きはしない。おゝうつだ昨日の道中記でも心に描いて見やうかしら。

梅田の停車場へ着いた時の愉快さに引換へて朝御飯の不味さつたらありやしなかつた。私は思ふても見た大阪城が益々落城といふので城の一角に火の手が熖々と揚るのを彼の城門から見た時の精忠片桐且元の心中はまあどんなであつたらう。折角家康と妥協して城中へ使者となつて入込まうとして片桐が老驅

の上に病み毛けた身を提げて彼の城門から覗いた時の心の内、あゝ私は預て先生から豫備智識を授けられて居たゞけに感慨極めて無量であつた。それから心齋橋通の漫歩に十合呉服店の陳列場見物、私は序に高島屋も見たかつた。道頓堀や千日前の見る物聞く物私等は責めて活動寫眞の一齣でも見たかつたが……高津樣へ參るのも見合はせて……電車道を彼方此方と歩いたときの苦しさ……四天王寺へは遠いのに何て電車には乘らなかつたらう。天王寺の公園でお辨を食べて一時の汽車で大阪に別れを告げて奈良に向つた。關西鉄道の早い事〳〵彼が金剛山で彼が信貴だとか生駒だとか、ヤレ大和川がどうの龍田がどうのつて更に興味は起らなかつた、でも法隆寺の五重の塔が見えて汽車の行手にこんもりと森が見えて森の中から奈良の市街や東大寺の屋根が姿を表はした時は嬉しかつた。昨日此所へ着いたのが二時幾分かで師範學校の先生に連れられて八重櫻や大佛や三月堂手向山八幡宮春日神社興福寺所有名所古蹟は見物した。一行の中の足達者な者は歟草山の頂上まで登つて國見とやらをしたといつて大恐悦大方畝傍香具山扨は昔の飛島地方でも遠望したでせう。斯う昨日一日を追憶して見ると……おやお隣の方も最うお目覺め、どれ私も起きませう。起き上つてやをら洗面所に足を運んだ。輝かしいお日樣は未だ地にはさして居ないが、でも微かに白い光を含んだ色が冷たく澄んだ空へ〳〵と流れて居た。一段高くなつて居る目の前の興福寺の東金堂の屋根や五重塔は薄く墨繪の樣である。山田行の瀛車には一時間餘もあるので奈良八景月の名所と聞えた猿澤の池畔を徘徊した。貴い姿を水に浸せる五重塔を見て私は思はず薄田泣菫の『塔影』を口ずさんだ。《毛利》

散りし櫻の花ふけて　登りて古き大寺の
崩れし壁に身を持せ　古き匂を嗅いで居る。
昔男や宮人が　長閑なる歌歌ひつゝ
櫻かざして舞してふ　大路小路に跡もなく
七堂伽藍只荒れて　夕日は塔に榮ゆる哉。

小さく歌ひ乍ら友の三人は興福寺の土塀に添つて白い路を此方猿澤の池へ歩んで來た。池の邊りは今し朝霧がかゝつて有るかなきかの朝風に柳の落葉がバラ〳〵と波に舞ふ。『お早う』三人の友は斯ういつて私の前を通つて柳の根元に腰を下した。それはあの麗はしく悲しい物語りに聞く衣掛柳の近くである。

私は靜に瞳を閉ぢて奈良朝時代の典雅な麗はしい人々の面影を思浮べた。佛法のために膿をすゝつた光明皇后薄すらと匂ふ樣な朧月夜に輝く五色の衣を柳にかけて深碧の水底から永久に反らぬ黄泉の路へ辿つた可憐な采女。此等の人々が歴史を飾つた繪卷物の中から夢の如く浮いて來る。

《千賀子》

奈良より神宮へ

奈良に惜しき別れをした私等一行を乘せた午前八時の列車は奈良山の櫓の木林をくぐづて木津川の左岸に沿ひつゝ徐行して伊賀に向つた。唯見る山岳重疊して矮屋小家が彼所の山の狹間や此所の川端に散見するのみであつた。

流石に秋の末つ方とて樹々の梢は紅葉して眺望更に無いでもなかつたが錦織なす楓葉の如きは少しも無く大方は櫨柏槻の枯葉ばかりであつた。笠置の行在所を車窓から瞥見して皇室の式微を嘆いたのも暫しの間、汽車は山々の間を曲りくねつて上野に出た。今日の晝御飯は松阪か田丸にしやうと先頭の幹部から電話が掛つたのも此時であつた。即がて列車は柘植驛に着いた。山間の一小驛では有るが俳句の祖神芭蕉翁も此所で生れゝば近江鉄道も此所から分岐する。萬更馬鹿にもならぬ所だ。龜山乘換といふ驛夫の聲に驚かされても此は山田行の直行列車だ。私等に乘換の必要はない。さあ之からが參宮鐵道だ記念になる何物かを印象したいと鷄の目を張つて車窓から首を出した。一身田の專修寺長い〳〵津の町の外目に着くものは更に無い。山と近く土地は瘠せ伊勢乞丐の起りも無理は無いと思つた。誰さんかゞ其れでも先哲本居宣長が出たではありませんかと仰るに降參し即がて其の松阪で晝飯を認めたがお茶の不足なので閉口した。二時二十分瀛車は無事山田に着いた。蒲洒な停車場清潔な道路。私は外宮樣に參拜した。敬虔の念は全身に滿盈して些の陋醜を許さぬ。詣で終つて電車に乘つた之は徵古館を訪問する爲である。

徵古館つて何？古の武器やら衣裳やら器具やら調度やら上は奈良朝より下は明治の近代に至る迄の生きたる歴史風俗である。眞に徵古の名に負かずといふべしである。

徵古館より出た私等七人衆は團体と宇治橋で落合ふ約束でM先生に連れられて奇麗な〳〵新道を唱歌を

歌ひ乍ら一直線に宇治橋についた。伊勢名物の赤福餅をお土産に買つて橋の袂に腰打掛けて五十鈴川の水の流に目を注いだ。《仙田》

内宮に參拜すべく私共の一人は大きな鳥居をくぐつて水清き宇治橋を渡る先づ驚かされたのは神苑の清かにして塵一つ落ちて居ないのである。それに松の緑の色深く枝振りの千代に繁りて皇室の繁榮を壽ぐかの樣なのには敬意を表せずには居られない。やがて第二の鳥居をくぐると幾千年立つたかと思はれる杉の立並ひて高く天に沖するあたり一行の誰もが咳一つする者もなく小砂利を踏む靴音さへ恐れ多い樣な氣がする。御札所の前を通り抜け大きな御社の何か知ら崇嚴な數々を通り抜けると又杉木立の生ひ茂るがあつて時々田舍出の參拜人らしいのが五六人歸り來るのに出會ふ許り外には人の子一人居もしなければ鳥雀の聲さへ聞えぬ。又少し進むと彼方杉木立の内から四五人の愛らしい神子が出て來た。すると其の横合から美しい白や黑の鷄が餌をあさりつゝ出て來た。私は此時斯う思ふた。今は昔天照太神が天の岩戸にお隱れになつた時丁度斯んなんでは無かつたらうか。眞に恐多い事だけれ共私等は今太神をお迎へに行くのである。あの美しい神子達のお供してあの美しい鷄が天岩戸の前で之から舞樂を奏するのでは有るまいかと。斯う思ひつゝ進むにつれ神秘の呀は胸に滿ちて何とも犯し難い心地になる。其内に森々とした老杉の内に建つて居る質素な本殿が見え初めた。私達は五人づゝに別れて流れも清き五十鈴川の水に嗽ぎ手を洗つて心身を清め襟を正して本殿の前に進む。心の汚れは散り失せて唯々難有いといふ感じのみが溢れ少時は頭も得擧げなかつた。《敢子》

二見の一夜

二見驛に着いてからは母の大好きな黑繻子の衿を掛けて銀杏返しに結つた女中に案内せられて波の音や其の景色に驚きながら二見館についた。奈良の旅寵に引換へて今夜の幸な事には座敷から女中の風まで私等には全然氣に入つて樂しく夕食を濟して買物に出た。彼方此方の店々では五錢十錢の貝細工を賣る妹や弟に二つ三つの土産を買つて松並木を通り抜けると廣々とした海岸に出た。磯打つ浪の荒き事。思はずぞつとして宿へ歸つた。

『ごろ〳〵つてあれば何？
『涙の音で御座います。
『いつでもあんなの
『ヱ、何時でもあゝいふ風なので御坐います
私は下女と此樣な問答をし乍ら買ふて來た二三の品物を見せて批評を求めた。下女の言葉のそして態度の高尚な事。誰かゞ此宿へは終中宮樣方がお宿りになられるりうだと言はれたが左もあらうと思はれた其内にお寢衣が運ばれる。夜の物にも言ひ知れぬ床しさが籠つて居つた。此所の印象は生涯忘れる事はあるまい。《山本、和田》

私も何とも言へぬ此夜の愉快さを生涯忘れる事の出來ない一人だ。私は此夜何物かの引力にでもかゝつた樣に友の一人を誘つて宿を出た。松原續きの海岸を靴音靜かに半月の光を浴びつゝ散歩した。仄に見える宿の明りに誰彼の花やかな笑聲。障子に映る影が如何にも旅行の樂しさを訴へる樣である。濱に沿ふて歩く無言の二人は互に何かの感に沈んだ。涙は相變らず凄じい音を續ける。私は思はず『最後』と叫んだ。而して思ふても見た、この月この濱は永久に變るまいが私達は如何しても變らなければならない。卒業も厭だ。懷かしい友と斯うして樂しい日を送るのも清い夜の空氣を吸ふのも嗚呼一時今に蜘蛛の子を散らす如く東西に別れなければならぬ。思へば最後の旅行である『女夫岩まで居つて見ませうゞ』友は突然に斯ういつたが荒れまさる浪の音に明朝を契りて歸途に就いた。《上月》

二見ヶ浦より京都へ

二見ヶ浦の涙の音に後髮引かるゝ思ひをあとに殘して車中の人となつた一行は元と來た道を龜山驛まで引還すのであつた。女夫岩の朝霧にお日樣を拜む事の出來なかつた恨や松阪驛で遙に宣長先生の奥津城所山室山を眺めた感想やらを話しつゝある間に汽車は龜山で乘換る事となつた。『關の地藏に振袖着せて奈良の大佛婿に取る』といふ俗謠の主人地藏菩薩も驛から左迄遠くは無いと聞いては居たが時間の都合で見る事出來ぬ昔の龜山仇討などの話などに花を咲かせて居る内に再び車中の人となつて拓植に向ふ。『阪は照る〳〵鈴鹿は曇る』の馬子唄も此頃續く秋日和にすつかり晴れて曇り所か鈴鹿の山は手に取る樣に見えるのである。

柘植で再び乘換てお辨當を食べる內に列車は動き出した。南近江の瘠地を一世紀前のガタ列車で野洲川の沿岸を直走に草津に向つて走る。俵藤太の蜈蚣山は思つたより小さく草津の姥ヶ餅も赤福に比べてはお話にならぬ。一行は馬場で瀛車を捨てゝ大津電車で三井寺を指した。比良の高嶺は遠く〳〵逃げ去るのに比叡山は近く〳〵迎へてくれる。初めて見た琵琶湖上の風光には一人として喜びの嘆聲を漏らさない者は無い。見よや周回七十里腥洋たる煙波天空を涵すを春は融蕩にして秋は淸澄何の時か淸からざる何の所か奇ならざる古來詩人の繡腸を動かせし事幾何んて柄にもない事を言つて見たくなる《廣川》

音に名高い三井寺に辨慶が比叡山まで引ずつて行つたといふ大釣鐘に驚きては其の說明者のアクセントの可笑しさに腹の皮を撚り瀨戸內海よりもまだ〳〵靜かな優しい景色の湖水を眺めては小學讀本で習つた近江八景、三井晩鐘、矢走歸帆、比良暮雪、などを思ひつゝ黃葉紅葉の散り布く道を私達一行は疏水の入口まで來た。

何所へ行つてもお定りの繪葉書に翌日のお小遣に欠乏を告げる程散財して卽がて疏水を京都に下るべく舟中の人となつた。先づ第一に驚かされたのは舟の豫想外に小さい事である。一葉の扁舟とは正に此等を言ふのであらう立てば頭のつかへる屋形舟とは名のみにて舷頭には古い〳〵幕が垂れてる。之に二十人も乘つた姿は丸でお鮮の箱詰だ。此樣な舟が三艘で私等の乘つたのが殿である。おまけに年の頃廿二三の船頭醉うて覺束なく不安恐怖閑森憤怒此等の念々が胸に滿ちて前途が更に迷濛であつた。仄かに聞ゆる唱歌の聲に急度心を取直して我等同舟の人も歌ひ出した、舟はやがて永のトンネルに入つた。進むに從つて暗黑漆の如く後を顧ると穴の入口が針の穴ほどに見える。不安は益して來る肝魂は寒くなる。思切つて唱歌を合唱する。歌の切目〳〵に櫓の音が聞える。キチコン〳〵。又歌ひ出す。今時点けた蠟燭の火が微かにゆらめく。凄慘な風が頰を撫でたかと思ふと火が消えた。歌はハタと止む。マッチを取つてつける船頭の顏が鬼の樣に見える。時々トンネルの天井から漏れるのか點滴の音が心に泌み泌る樣に響く。行手に當つて螢ばかりの火が見える。舟だ戻り舟だ。摺違ひ樣に船頭と互に何かいふ。水の流れは急で敢て櫓を押さなくても矢を射る樣に早い。

其内に出口が見えた。やれ〳〵嬉しや神の御惠を感謝せずには居られなかつた。

振返つて見ると長かつたも道理、此所は名にし逢阪山だつたものを昔は山の巓に關所があつて旅行く人を調べたとか開け行く世の難有さは瀛車もあれば電車もあるのに私達一行は物好にも斯うして疏水を潛るのである。併し之も一生の思出。下つて見るも面白いと無難に通過したので虛元氣を吐く内に又もや隧道中の人となつた。今度は短かつたので間も無く出た。此時夕日は全く西に落ちて暮色蒼然、東山科の邊から襲つて來た。京都へ着いたのは午后六時で三條通りは電燈煌々として白晝を欺き彼方此方に往來する電車の響しさ。（福永）

桃山御陵參拜

『木曾さん〳〵。』二三度大きな聲で誰かゞお喚びする樣にもあるが眠くつて起きられはしない。と今迄氣がつかなかつた庭の木の葉が何物かの爲に一トしきり又一トしきり。ばさ〳〵と音を立てる『雨かしら』と私は思つた。けれども昨日まであんな好いお天氣だつたのに今となつて降るなんて事もあるまい斯う思つて居ると誰やらのお聲で『雨降り』。氣のなささうに言ふ。今日は最終の日だ。折角人か京都見物を樂しみにして來たのに何てまあ天も無情な事をするだらう。夫れに今朝は桃山御陵參拜から私の好きな〳〵文展を見るんだものを。不性無性に起きて支度をした。

袴を引くゝつて宿屋を出る。雨は容赦なく降りしきる。一本の傘に二人の姿。三條烏丸から伏見行の電車に乘つた。電車は買切で遠慮は無いが濡れた傘の置場も無い程詰込んで身動もなりはしない。御陵道を眞直に御香宮の鳥居前を東へ〳〵と歩むのである小石交りの美しい、そして塵一つない幅廣の道路を左側厠行で進行した。御陵の境内へは入ると道の両側の杉森は先年植ゑられた斗りであらうに早生ひ茂りて森々と物凄い。最う私の心は平生とは打つて變つた美しい者になつて居る。

間もなく御陵に着いた。一行は手洗ひ口嗽ぎなどして御垣の下に跪きて禮拜した。二十人又二十人一行は數回に分列して禮拜した。降る雨にそぼぬれて額づけは得もしらぬ心が腹の底まで泌み渡る。嗚呼先帝陛下はこの御陵の内に永久の眠につき給ふたの

である。陛下四十五年の御治績は今有り〳〵として萬邦を照らすのである。陛下の御稜威は萬歳である微臣何の幸あつて此の盛世に生れ合ひ今月又一行と共に君の御墓に詣でる事が出來たらうかと感極まつて御垣の下を去り得なかつた。

促されたまゝに更に道を轉じて照憲皇太后の御陵に詣でた。此時雨は益々降り出した。悲の涙。喜びの涙。滿身の熱血を一時に灑ぐ血の涙の雨と雨と降る

《淺子》

京都見物

一行は湊川神社に型つたと云ふ乃木神社に參拜し桃山驛から瀛車に乘つて京都に戻る。西本願寺の今の御堂は寶曆十年の創造に係るとか稍々古びたる感はあれども唐門は豐國神社の舊構を移したものとか稱せられて精妙なる彫刻には一驚を喫した。此所で晝飯を濟して東本願寺の華美なる堂宇を瞥見しつゝ七條通りの電車道を一直線に三十三間堂に向ふ。一千一体の佛体よくも拜まず博物館から豐國神社の社前に出て大佛堂を掠めて西大谷から鳥邊野に添つて本法寺妙見宮の前を新高雄の稱ある清水寺に着いた。

舞台の上から楓葉を賞し音羽の瀧を瞰下し地主權現と西郷月照の石碑の間を靈山の裏道に係る。『有かたや地主權現の花の色……音羽の瀧の白絲の繰かへしても面白や』後の方で田村を謠ふ。三宅先生らしく思はれた。道は高台寺の樹林を縫ひ東大谷の松林を横貫して紆餘曲折圓山公園に出た。所謂洛陽第一の遊筵地である《平岡》

誰やらがお話なされるには昔寶永年中梶女といふ歌讀みがあつて娘の百合と茶店を出して居たとかいふ事で其れが大層評判になつて其角の句に『七夕やよき歌きゝに梶が茶屋』とか又蕪村の句にも『祇園會や僧の訪ひよる梶が許』といふのがあると先生に教はつた事がある。と云ふと『細谷さん京の四季に『祇園豆腐の二軒茶屋』といつてあるのが此所ですよと中村さんが後をつける『花の時篝火を焚くといふ夜櫻が見たいですねイ』と言ふものがある。『顯はくは花の本にて我れ死なんの双林寺も此の近くでせう』と本森さんが尋ねられると『最う過ぎて仕舞つてよ』と知つたか振りにお答するものがある。折しも雨は小止みになつたので園池の間を徘徊して後れたお友達の二三を待合せる。待遠しいので思切つて智

恩院の山門をくぐる。寺は淨土宗の總本山法然　人の開基で布團着て寐たる姿の東山第一の巨剎である流鶯の囀するが如しといふ鶯張も見たかつたが皆樣が文展文展と仰有るのでそこ〳〵にして山を下ると丁度落伍の人も來合せた。それから粟田口から應天門に出て左折して文展に入つた。（細谷）

文展には入つたのは三時頃でもあつたらうか最う今日限りといふのに土曜日の事とて觀覽人は場の内外に溢れて立錐の地も無い。私等は構内の繪葉書屋に傘を預けM先生を先頭に入場した。先づ目に入るは諸種の日本畫である。立派な大作が列を正して掲げられてある。

何れも八拾圓百圓五百圓の定價表さへ付してある。中には既に賣約濟の物も數あつた。見もて行くに線の曲折墨の濃淡さては色彩の絢爛目もあやに美しい初の内こそ熟視もし玩味もしたが行けども行けどもはてしなき陳列品には一々應接の遑あらず況して後より流れ寄せる人波に心少しも落居ずして前へ〳〵と進むばかりである。凡そ五六十品も目に入つたかと思ふ項に稍々廣き場所へと出た。特選の列に入つたといふ中でも『室君』『花合せ』等は頗る新味ある樣に思はれた。『管絃』といふのも印象の深い作である。洋畫趣味の交じつたと思はれる『三人の舞妓』といふのが私達婦人だけに特に目をひく『羨え切らぬ作だなァ』と云ふ者の有るに振返ると大學生らしい一二の者が批評して居た。一行の眼を引いたのは矢張池田蕉園さんのお作で『去年の今日』を見ては思はず『ェ、がなァ』とお國言葉が發せられる。蕉園さん輝方さんの作は何一つ惡いものはない。私等は魂を引付けられて身動きもしないで見て居ると『人氣を引くのは之だらうよ通俗的だから』ッと嘲る者がある。大河内先生がいらしつたらと異口同音に言ふとM先生が『眼に美しい斗りで其が繪なら敢て勸商場の飾窓と變りは無い此等の繪には美術の本旨たる内部生命の意義が缺けて居る』と仰有る。即がて洋畫も見た。長原先生の『初夏』は和洋折衷だと矢張M先生のお言葉。南薰造さんの『五境』は不明で過し、『夏の内海』といふのが自然で好いとは一同の評であつた。彫刻もあつたが皆目解らず呆々の体で場内を出ると雨は降つて居ないが夕靄が吉田の山の方から襲つて來て歸去來を叫びたくなつて來た。未だ何所へか廻はられるのか知らん　（三谷芳子）

鳴瀧山に登る記

三甲　藤井喜代子

ピリ〳〵〳〵。集合の笛が廣い築地の四方へ響き渡ると待搆へて居た私達は笛の下に二列をなして集りました。遙に望む西方鉢ヶ峯の雄姿に鄰つてしとやかに控へたる鳴瀧山。私達は今それへ登らうとして居るのです。やがて先登は歩き出しました。小屋に飼はれた小羊が初めて自由に群をなして明るい野邊を行くかの樣に。白いパラソルを肩にした三百有餘の小羊はうよ吹く春風に送られて或は話し或は歌ひつゝ樂しく野邊を行くのでした。

低くても山は山、中途から段々弱る人もありましたが春の山を彩る赤い躑躅やあはれにも散殘る山櫻に慰められつゝ目的地の鳴瀧の宮地家に着きました。私の豫想通り古風な門搆に大きな古木の山を背景にした如何にも靜かな所です。奇麗な離座敷の裏の古木の下に布かれた筵の一つに私は休息して靜に側の古木の盧を眺めて居るとまざ〳〵き鳴瀧山の歴史が浮んで來ました。

世は戰國時代の項群雄各地に割據して天下麻の如く乱れた時この麻の一葉は此所靜かなる鳴瀧へも飛んで來ました。そして見る〳〵内に立派な堅固な城を造り上げました。之が即ち宮地某兄弟の立籠つた城であります。すると又此の東村に何某といふ豪族が居ましたがこれが或年の十二月下旬鳴瀧山を攻撃しました。宮地方でも一生懸命に防戰は致しましたが如何にせん衆寡敵せず遂に散々に敗北して大晦日の夜こつそりと城を落のび麓の久山田村の民家に隱れ夜の更けるを待つてゐました。久山田村の民家では大に同情して燈火を細くして隱まつてやりました。戰は遂に東村の勝利に歸しましたがゆかしい事には久山田村では今も大晦日の夜には早く寢るか或は燈火を薄めてありし昔を偲ぶといふ事でございます。

涼風一陣後の古木を搖する音に私は初めて我にかへり不圖附近を見渡すと家が十軒許ございまして皆宮地を名のるといふ事です。之が大晦日に逃げ落ちた宮地の子孫でございます。浮世離れた此の閑靜な山中に先祖の靈を慰めつゝ樂しく其日〳〵を暮して行く此の人達は幸福でせうか不幸でせうか。雞犬の聲相和して彼此侵す事なき淳撲の風に桃源の故事も思ひ浮べられます。

やがて私達はお美味しいお茶を御馳走になり暫く休息の後愈々頂上へ登りました。頂上は稍々廣く平坦

になつて居て中央にある大石の上に小さな祠がございます。北を見渡すと中國山脈が悠然と搆へ目下には久山田村の民家が點々と見えます。南方は所謂世界海上の公園たる瀬戸内海の絶景。實に繪にも書かまほしうございます。私達は此等の景色を眺めながら携へて來た御辨當を頂いて居ますと青々として底知れぬ水の中から搖ぎ出た樣な綠の島々、其の間を辷る樣に行く白帆の影、嗚呼この美しい景色の見える所にも昔は血生臭い風が吹いた事があつたかと思へば實に世の中は無常な者でございます。

暫く休息した後今度は隣の山へ登りました。山上には大きな池があつて側にみすぼらしい民家があります。こんな山奥にも住めば住まれるものかと感ぜられました。私達は草原の上でお菓子を頂いたり躑躅を折つたりして遊ぶ中愈々歸る事になりました。宮地家へも鳴瀧山へも名殘を惜しみつゝ元來た道を駈下りました。下りついた時は大分足も疲れましたがあの高い山へ登つて來たかと思ふと實てに愉快でございました。

斯くて私達小羊は又元の小屋否樂しい我家へ急ぎました。

福山市に飛行機を見る

三甲　今井小園

明日の天氣を氣遣ひつゝ眠に就いた私は枕下の目覺時計の音に驚いて飛び起きました。機械的に窓を押すと心配した雨は歇んで今日一日はぞうやら持ちさうな春日和でした。あゝよかつた昨日釣した日和坊主の甲斐あつてと仕度もそこ〳〵に八時頃に友を誘つて驛に入つた。空は少々怪しくなつて來たが降りもすまいと度胸を落ち付けて九時二分といふに滊車に乘つた。臨時列車といふに我校生徒の外普通乘客の幾百人車中は丸で立錐の餘地も無い。以て如何にアートスミス氏の評判の高いかゞ知られる。進み行く列車の窓から眺めると線路に並んだ國道を行くとも〳〵自轉車の數々徒歩の人々。私等は、今日の人出を豫想しつゝ飛行機の歷史やら功用やらをお話する内に『お城が見えますよ』と誰やらの叫ぶ中に滊車は着いた。お隣の博覽會は後にして直に練兵場に向つた。道行く人の騷々しさ私共の心を波立せます練兵場近くになると場は素より麥畠にも庭園にも人の山。私は此處の招魂祭に來た事があつたが其時のに比べると雲泥の差。

私共は預て定めの場所があるので無難に入場する事が出來た。お隣には縣立福山高等女學校が座を占めて居る。縣立福山中學校尾道商業校福山尾道を初めとして付近一圓の各種學校小學校りれに各方面の公私團体一般觀覽を以て滑走場の範圍外さしもに廣き練兵場は此等數万の人を以て埋められた。此の光景に打たれた私は氣も心も轉倒して立つても居ても居られなかつた。

突如東の隅にブゥ〳〵〳〵と大きな音がするかと思ふと飛行機は僅の滑走を了して空高く舞上つた。群集の瞳は一齊に機上の人に注いだ。機は高空を四週して白く濁く見えた。プロペラーの音は少しも聞ゑぬ。と遂に雲間に姿を沒した。人々は驚愕と不安とを持して一心に見つめた。間も無く天の一方に其の雄々しい姿を表はした。俄然『萬歳』の聲は場の四周より起つた。私はホット胸を撫下した。

福山の先生であらう『宙返りをする時には両翼の所から煙を出しますよ。よーく注意して御覽なさい』と言はれた。間もなく両翼から二條の白煙を出したスワやと見る間に機はひつくり返つた。人々の「あれよ〳〵」と叫んで居る内に四回の宙返りは續けられ預て聞いて居た枯葉落し、綠門潛り等美事に續けた。幸い今日は曇つて居るので極めて鮮かに見る事が出來た。誠に飛行には絶好の日和ともいふべきであらう。斯くて種々の妙技は演せられ喝采聲裡に無事着陸した。やがてスミス氏は評判の豆自動車に乘つて場の四周を一巡した。弓手に帽子を高く振りつゝ更に疲れたる樣子も無く終中其の顏は西洋人の特長とも言ふべき愛嬌の笑みを湛へて居た。群集は又も万歳を高唱した。私は何の意味もなく唯涙がにじんだ。「何故かしら私涙が出ましたの」と隣席の方も言はれた。おゝ彼の目に宿る露の玉。りも何の爲の露だらう。

午前の飛行はこれで終りを告げたので私共は親しく氏の乘られた機を見せて頂き、りれから福山女學校に行つた。道々先生から飛行機に就てのお話を聞いた「あの樣な飛行振を見ては我が所澤のは憐むべきである。」といはれた。

私は一番この言葉が肝に染みた。此の戰爭の世の中に未熟な飛行では駄目である。我が立派な大和魂を持つて勇敢に熟心に飛行機の研究が必要だと思はれた。私共は女學校でお辨當を食べた。少時休息を

與へられたので先生方はテニス我達は遊動圓木廻旋塔などに集まつた。此所を辞して縣立工業試驗所を視察して博覽會へ入つた。何分規模が小さい上に通路が狹いので閉口した。場内の庭園に出て伸々した心地になつて松葉牡丹アネモネ菫等の美しい草花を眺めて居ると、「飛行機だ〳〵」と人々の叫び聲に驚かされて駈けて行くと遙か南の空でクル〳〵〳〵と妙技を振つて居る。午後の飛行が始まつたのだ、私等は場内を一週して久松城に上つた。阿部侯の昔の樣が窺はれる、今は公園となつて居る。五十分の自由を與へられて私は四五の友達と園内を散歩しだ、白や紫の藤の花が行く春を節つて居る、とある小池の土橋を渡つて中島の亭に腰を下し

春のうらゝの隅田川
上り下りの舟人が……
ソプラノとアルトの調子よく歌ひ初めた一刹那、ビリ〳〵〳〵、私は夢から覺めて遂に再び滊車中の人となつた、一日の清遊を全うさせて呉れた福山よ去らば、博覽會よ去らば、久松城よ去らば、特に鳥人スミス氏よ去らば去らば〳〵、健かに幸くあれ

作文の中より

坂本先生を送る

一乙　森　喜　子

お針の、手傳ひをして居る所へお友達がおいでになつて、坂本先生が今日の午後七時でお歸りになります、と知らせて下さつた其の時には『まあ今晩』と驚きました

ＡＢＣのＡも知らなかつた私共をていねいに導いて下さつたその先生と今日はお別れしなければならないのかと思ふと夢の樣でなりません

夕方停車場に參りました、昨日は此處で嬉しいお迎へしたのに一日經つた今日はこんな悲しいお見送りをしなければならないのかと思ふと此の長い休み中には又どんな日が來るかと氣づかはれました、ふと見ればあそこでも二人此處でも三人とまるくなつて何かさゝやいて居られます、其の中に先生は私達の方へ御いでになつて御挨拶をなさいましたけれ共先生のお目には奥深く露の玉が宿つてゐるやうでしたしばらくすると他の先生のお指圖によつてプラットホームに出ました間もなく車中の人になられた先生はさよなら〳〵と皆に名殘りを惜まれました其の時

は胸が、はりさけるやうでしたポッポッ〳〵と煙を吐いて東へ東へと進んで參ります、私はこれから三年と云ふ水い年月を過さなければなつかしい先生にお會ひすることが出來ないのかと思つた時には思はず涙がこぼれましたそして先生のお顏を穴のあくほど見て居りましたが瀛車の進行につれてとう〳〵お姿が見えなくなつてしまいました

奈良見物　一乙　西原キヌ

京都に次ぎて名所古蹟佛閣の多いのは奈良である、私は奈良に行くのが今日始めてゞある。

まづ京都より瀛車にて奈良に行くには奈良線、大阪より奈良に行くには關西線による私は大阪から電車に乘つて行つた、電車が生駒トンネルを通過するさいに溫度が二十度も下る故非常に冷氣を感じた。

奈良に着くと第一に見物したのは奈良縣廳ゐれより少し北にある師範學校門内の八重櫻である、

古の奈良の都の八重櫻
今日九重ににほひぬるかな

と伊勢大輔のよみし奈良櫻今なほ生々として昔を語る。

それより東大寺に行き名高き大佛を見た、寺は聖武天皇の建立にして大佛の大きさは讀本に書いてあつた今實物を見て其の大きさに驚いた、老木生ひ繁り左右に立並ぶ多數の燈籠の間を通つて官幣大社春日神社に參拜した、神鹿三々五々群をなして人に近づき食を求むるも愛らし。

三笠山は此の神社の後方に聳え恰も笠を倒にしたるが如き美しき山にて昔安倍仲麿が唐土にて、

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

と詠みし歌等思ひ出した。

ゐれより二月堂興福寺猿澤の池等見物した、奈良は昔都のありし跡なれば、大なる寺多く、人をしてうぶろに佛敎の盛なりし奈良時代を思はしむ。

此處の見物を終り、十二時頃奈良停車場に向つた、關西線によつて龜山に行き、參宮鐵道に乘り換へて二見浦に行つた、其の時は丁度夕方であつたのですぐ宿に着いた、此の宿の後の方は海岸で松林になつてゐるから眞によい眺で、海水浴場としては最も適當な地であると思つた、今日はあまり體がつかれたので早く床についた。

なつかしい洋服

一乙　吉原久代

開け放した部屋八疊二間にしげり合ふ青葉の間から朝の美しい日光が流れ込んで居る、千すかす〳〵の着物は色こそ違へ七彩の虹にもまさる程綺麗である涼しい朝風にナフタリンの香りは空中に漂ふて居る傍に居た妹はあまりの美しさに見とれて居たがふと『これは誰れの』とさけぶ、自分はそれどころでない汗にまみれて干しもし又仕舞もして居るのであるそれも知らぬ妹はたゞわけもなく喜びまはつて居た今度は私の少さい時の洋服を出し自分で着て『姉ちやんや母ちやんはこんなのがないでせう』といかにもうれしさうにさはぎたてゝ居る、思へば今妹が着てよろこんで居る洋服は私にとつてはなつかしい思ひでの種である。

今から幾年か前母の手にすがりつゝ大坂の街をこれよアメリカ土産であると子供心にも誇り顔で歩いたりの折その時が眼の前にちらづくやうである。

ふと我れに歸つて妹はとみると相變らず今の服を着たまゝで自分の顔を不思議さうに見まもつて居た。

◆　◆　◆　◆　◆

冬の一日

一乙　三浦千代

日はもうとつぷりと暮れました、木枯は思ひ出した様に散り殘つて居る木々の葉を吹きまくり其の度に乾いた落葉がガサ〳〵と地上を走ります。

私は障子を明けて縁へ出て見ましたすると何時の間に出たのか清い月が森の上に冴え渡つて荒れ果てて居る庭を淋しく冷たく照し、千光寺の鐘はごうんごうんとゆるやかになり渡つて居ます。

仕事歸りの人でもありませう『あゝ寒い明日は雪だ』と云ひながらヒュー〳〵と吹く寒い路を通つて行きました、ふと向ふの方から『お月様なんぼ』とかすかに聞えて來ました。

もう何處の家も戸を入れてしんと靜まつて人通りも今は絶え今までないて居た犬もあまり寒いのかなきやみました、外ではヒュウッと又一しきり風が起つて雨戸がものすごい音を立てて居ります。

私は眠らうと思つて床に着いたものの風の音が氣になる、其の内には今日一日の中にした事がそれからそれへと走馬燈の様に頭の中にわき出てようにに眠られませんでしたがいつの間にかうつら〳〵として來ました時に玄關の時計は十時をつげて居りました

筆　箱

一乙　木曾靜子

私は筆箱であります、私の體は立方體でありまして表面には海上を二羽の雁が樂しく飛び廻つて居る愛らしい繪が書いてあります、私が靜子さんに何時も變らぬ愛していたゞく幸福の參りました所以を少しお話しして見ませう。

先づ私は西洋紙に生れましたが新聞社にいつて活字にうたれて新聞紙となりなつかしいたくさんの友と別れををしみつゝ或一軒の家に投げ込まれましたがやがて皆さんは私を手から手へとかはしかはして讀まれた後大阪の筆箱製造所へ賣られました、それから小さく切られて貼つてはかはかし、かはかしては貼られとうとう細長い紙箱に作りあげられました、それからからだ全體にいきもできぬほど眞黑いものをぬられ其の上には繪を書かれました。

その時外で何かいつて居るやうなので耳をすませてきいて居るとやつと出來上つたと喜んで居りました此んな聲を聞いて居る所へ製造元の御主人がこられ『お前等は今筆箱になつたのであるこれから後は產れた家のことを氣にかけずそれぞれ自分の本分を全うせよ』と、いはれました、それから澤山の友達と一緒に本店へ參りましたが澤山の小僧等は私等を一つの箱の中につみ重ね釘を打ち綱でかたくくりました、其の時には眞黑になつて同じ部屋に居るのにお友達の顏さへ見えなくなりました、それでどうなることかと心配して居りますと車にのせて走り出しましたが着いたところは何んでも船の乘場らしかつたのですそれから何でも私を手あらく廣い〳〵所へころがし出しました其の時には目がまはつて何んにもわかりませんでしたがしきりに音をたてゝ走るやうな氣がしてきました其内氣がつきましたのはこれが船であることでした、船はだん〳〵進んで瀨戸内海に參りましたが美しい風景も見られぬ暗の中で心配ばかりして居りましたがしばらくたつと自分の乘つて居る船がとまりました大せいの人はばた〳〵と上ります其の時私も陸に上げられ見知らぬ店へ配達されました、してすこしたつとしめきつた綱もほどかれ釘も拔いて我々を暗い箱から出して下さいました、その時には皆んなそろつて大きなため息を幾度も〳〵はきました、そしてあたりをぐる〳〵と見まはして見れば文具屋の店で文海堂と書いた額が掛けてありました、それで初めて自分は大阪の方から遠

い尾道の文具屋に來たのだといふことを知りました
そんなにして居る間に私のお友達は日に日に五打十
打とへつて參ります私はどこに行くのかしらと心配
して居りますと私は唯一人ふろしきにつゝまれて大
へん大きな家に參りました、來て見れば隨分お友達
も澤山來て居られます私は不思議でたまりませんつ
い靜子さんに『何處ですか』とおたづねいたします
と『此處は私が毎日學んで居る學校である』と申さ
れましたのであゝこゝで私等はあの主人のいつた本
分をつくすのだなと合点がゆき毎日靜子さんの本と
御一緒に學校に來てはその道をつくし居ります。

柴　　餅　　一乙　秦　コトヨ

ふと目が覺めたあたりはまだ薄暗い人の聲もしない
車の音もない早く起きたので心持がよい薄暗い中を
むざ〳〵と朝飯をすませた、うして昨日お賴みした
柴餅の仕度に掛つたけれど肝心なしばがない、早速
手籠をさげて山道を辿つた坂道ではあるし其の上足
にぬすびとはぎが立ち露がかかつたりして困つたが
ぢきに一ぱいになつたので歸つた。うして葉を叮嚀
に洗つた中には大分穢いのもあつたうの內間もなく
十二十とそろ〳〵出來上つたが春ちやんは人の顏や
天狗の顏を幾つもこしらへて喜んで居るやつと能の
面のやうな柴餅も蒸し終つたので後は家の誰れかれ
と寄つてさわいでたのしくいただいた。
此の日は一日中暑いめをしたが太變たのしかつた。

祈　　一乙　田頭堅子

今日は誰よりも早く起き出でて神社に參拜した、
ゆく〳〵商船學校を右手に望み須磨も明石もここと
やいはん松原を過ぎやがて七里ヶ濱にも勝る砂白き
濱邊に出づ。
澄み渡れる月は老松にかゝる露を照し小波寄する海
原は青疊敷きつめたるが如し。
遙に見ゆる水平面よりは明け方の空に日輪の麗しく
輝きそめ、月は白く淡く地上に光をなゞ。
暫し此處に佇みて此の美しき天地の樣に見惚れたが
ふと我れにかへりて見れば早太陽は海上をはなれ今
や我が頭上に昇らんとす。急ぎ足を早めて拜殿にと
つきぬ。
然して神に祈を捧げた、外國にある兄上のために。

寄宿舍より妹へ　一甲　片上不二子

三千枝さん。此間はお手紙を難有う寄宿舍生活の私には手紙が何よりも樂しみですの。

お母様は其後お丈夫でお出でになりますか又梅雨の頃になりますから持病の心臟がお惡くならなければよいがと御案じ申して居ります。

寄宿舍へ入つてから未だ二月にしかなりませんけれど最早大方樣子も解りお友達も出來ましたので喜んで居りますの。

御慈しき垂乳根のお膝下を離れる時にはさすがに樂しみにして待つて居つた寄宿舍生活も何だか悲しみの所へ行く樣な心持がして人知れず袂を濡しました。入舍してからもほんとうに朝日を見ても夕日を見ても故郷が思出れさて一人袖絞つた事も日に幾度か今は最う親に代つて慈しまれる先生や眞實の姉樣のやうな上級生の御親切やで樂しく日を送る事が出來る樣になりました。それでも時々は死んだ百合子の事が思出されて悲しくもなりますのよ。今朝も校長先生から此間の手紙に書いた校僕の娘が死んだ事を聞いてつひ百合子の事を思出して仕舞ひました。けれ共今はもう百合子も校僕さんの娘も等しく神樣の御手にとられてパラダイスの天國で樂しく永への世の初歩を歩みつゝ居る事でありませうよ。

三千枝さんも來年は此學校へ入學される事でせうが今から能く〳〵注意して他人の中へ入つても人に侮を受けない樣にならなければいけませんよ女は女らしく第一番に親切で物和かく隔りなく人によく親しまれて其上に犯し難い品位を保たねばなりません今考へて見ますのに三千枝さんは隨分氣儘でありましたッけネどうかして氣を付けて直す樣にしなければいけません

家へ出入をして居つた婆やのお曾根は失張丈夫で孫の世話をして居りますの。

母校の柴田先生にお目に懸つたら宜しくとお傳へ下さい又近況もお知らせ下さい。

家の鷄はどんなになりましたの最う徐々可愛ひ雛が生えたでせうッどうか私に代つて能く世話をしてやつて夏休暇迄に太つた可愛い鷄にして置いて下さい三千枝さん。お互に勵み合つてよい成績を取りませうそしてお母様のお心をお慰め致しませう。

段々暑くなりますから生水や未熟な果實を食べない樣に氣をつけて病氣にならない樣にお互に注意しま

せうネ

尙本年は大邊天然痘が流行するさうですから必ず種痘して頂きなさい

仝　一甲　兒玉光子

逝くを惜しめど長閑な春の月は西の山に沈み東の森陰から夏を知らする太陽が閃き初めて參りました。暖い春の惠を浴びて居た者共は佐保姫樣の御歸還と共に遠く旅立つてしまひました『來なよ〳〵』と呼んでも暑い〳〵夏がどう〳〵來たのであります。此の暑い今日此頃を可愛いゝ美いちやんは何んなに暮して居りますか御祖母樣、お父樣、母樣、兄さん、姉さん皆樣お目出たですか雛樣の時分にお別れしてから早三月にもなりますね姉さんも此頃は大分舍の樣子にも馴れて情深い上級の姉さん等や親切なお友達の爲に毎日樂しく暮して居ますけれど矢張あの冷いお寢間の中には入つては家の事を思出し色々な事を考へ乍ら何とはなしに涙ぐましくなつて來ます二人がお床の中へは入つては私の所が狹いの廣いのと譯も無いのに喧嘩を起し短氣な私がすぐにお前を追出して『獨り寢る方がずつと暖かだ』とか氣持がよいとか大きな聲で呼ひ乍ら恨めしさう座つて居るお前を見流しては默つて眠つた事もありました私はいつもお床の中へは入るとこの事が胸に浮んで濟まない樣な氣がしてなりません美ちやんどうぞ許して頂戴ねお詫びします今度の夏休みにはきつと〳〵二人で仲善く寢みませうね二階の窓から首を擡げて千賀子姉さんのオルガンに合せて二人が聲を揃へて『夏も近づく八十八夜野にも山にも若葉が繁る』茶摘の歌を唄つて居たのも丁度此頃この間理科の時間に桑のお話を聞いて不圖仲のよかつた照子さんの事を思ひ出したの矢張姉樣被りに赤襷桑摘みに御熱心ですか私に代つてどうぞ仲善くして上げて下さい兄さんと私と蒔いたあの朝顏どうぞ大切に育てゝ夏休みに歸るまでには美しい花を咲かせてやつて頂戴ねだん〳〵螢が出て來る頃と成りましたね又あの小川を傳つて螢狩に行くのでせう今年は誰と行きますの先日の手紙で見るとポチが赤さんを產んだつてねどうぞ可愛がつて下さいお母樣からの御手紙によるとお淸書はいつも二重丸ださうですね私も蔭ながら喜んで居ます先日のお前の手紙は文もよく文字も上手に出來ましたも少しすると姉さんを追越しますよしつか

り〳〵勉強なさい姉さんも試驗がだん〳〵近づいて來ました美ちやんに負けないで勉強する積りですお前も姉さんに負けないで勉強なさい御褒美には大好な眞紅のリボンと目をつぶる人形を買つて歸ります段々と暑くなつて來ました入梅の季節に近づきます身体を大切になさい御祖母樣父樣母樣兄さん姉さん皆樣に宜しく。

下女に代つて下女の妹へ

一甲　高橋　敬子

懷かしい光ちやん段々と暑い時候になつたがお内の父ちやん母ちやんは御變りは有りませんか武坊も日に〳〵に大きくなつたでせう姉さんは前と同し樣に健で御主人大事と一所懸命に立働いて居ますよ姉ちやんの奉公先の御主人はまことに私達を可愛がつて下さつて又其上にお嬢さんまでが御ひゐきに成さつて下さつて姉さんは嬉しく思つて居ますよ夜は十時限りに雨戸をしめて皆な休んで朝は五時に起きるのですよ實に罰の當る程大切にして下さるのですよ私は御奉公と言ふものは大變苦しい者と思ひの外皆樣が可愛がつて下さるせいか人の仰有る程の者で無い樣に思はれます光ちやんも姉ちやの居ない内は母ちやんの手助をして能くお内のお使をなさい他人とは違つてよく内の事は御承知であらうから我儘な事を言はないで學校に行つて人樣に後れを取らぬやうになさいよ又八幡裏の田は氣候が不順であるから水が少ない爲作物が枯れる樣事はないか矢張父ちやんは老人でありながら耕作をして居らつしやるか私も一所懸命に働いて御父さんの御恩の万分一も盡くさうと思つて居るのよ光ちやんも此事を思つて働きなさい又樂しむ折もあるでせうそしてお隣の澤枝さんは今頃何をして居るの彼方はほんとに御幸福の方ねイ姉ちやん達と一緒に學校に行きながらあの御方は女學校御卒業なさつて實に幸福な事ねけれど光ちやん御前も習つたでせう菅原道眞が『花咲く春あれば葉落つる秋あり』と實に其通りだよ光ちやんも姉ちやが一所懸命に働いて成功させてあげるよそれを樂しみに孝養をなさい次に氏神樣のお祭も段々近づいて來たが今年は姉ちやんも居ないしほんとに淋しからうね私がお嬢樣に戴いたリボンを送つてあげるから其をかけて御參詣なさいよ最早書く事も終りましたこれで筆をとめます母樣のお墓へも時々お詣りして

ね父ちやんを大事にお前も武坊も達者にさよなら

全母親に　　一乙　渡邊三七子

お松のお母さんお松に代つて私が筆を執ります先日こちらへ來た斗りだから此といふて申送る事もないが我家なつかしさに手紙をやりたいといふのですお母さん別に變つた事は無いでせうね只今もお松が言ふには私方はほんとに淋しい所です山と畑ばかりで私は生れて一度も汽車を見た事が有りませんから此の大都會の尾道へ來て別の世界としか思はれませんと珍らしい事を言つたので家内一同大笑しました

お松は大層正直で極く大人しく能く働きます父上のお氣に入りで『お松〳〵』と可愛がられてゐます父上は大方其の質樸な所を愛してゐらつしやるのでせう

今も今とて私がお習字をして居る所へやつて來て私は學校も中途で廢めたから思ふ事がよう書けませんと手紙を一本母親へ書いて下さいと言ふでは有りませんか第一にどんな事を書くのかへといふと此樣な賑かな都會に奉公して見る物聞く者が皆珍らしく樂しく暮らして居る事第二に御主人樣がよく可愛がつて下さる事次には母がいつも夏になると持病の胃の腑を煩ふから飲食に注意する事又妹や弟にも一度尾道へ遊びに來る樣に書いて下さい又姉が二三年したらお土産をどつさり買つて歸るから樂しみにして待つてお出でと書添へて下さいと言ひます私が一々承知すると大層喜んで臺所へ去りました臺所の務めも母樣の命令を守つて何一つ手落ち無く又不平を言ふのでは無し近所の評判もよい樣です私とさして年齢は違ひはせぬが萬事抜目なく働く事には感心します作法禮儀も母樣の躾で追々に出來て行きますお母さん安心なさる樣に

單物はこちらで早速整へます御心配なさらぬ樣に

又臨時の収入は私が世話して貯金させます御身御大切に

或る夜　　二甲　村上季子

さつき十時が打つた。裏町を流す按摩の笛の音も暗い町の隅に消えて港の町は淋しく更けて行く。今夜は大分寒い。猫のは入れるだけ明けた障子の切り目が風にブル〳〵震へて絶えず落ちる枯葉がカサコソと微な音を立てゝ居る。淋しい。妹も最う寢て仕舞

つた。『母様が居らしつたらー』今年も最う暮れる。母様のない春を迎へようとは夢にも思はなかつたのに……

『ねん〳〵ようおころりよう』さつきまで、むづかつて居た姪も眠つたらしく添乳して居らしつた姉様の子守唄が眠さうに途切れる。

後に母と子の寝息が微かにひゞく。

若い母様を持つて居る姪達は幸福だ。私達にあゝした昔があつたのだ。けれども小さい時一番好きだつたあの甘いお乳を持つていらした母様はもう逝つてお仕舞に成つたのだ。

何處かで母様はじつと私を見つめてゐて下さる様な氣がしたので私は顔を上げてガランとした部屋の中を見廻はした。

何處にも母様はゐらつしやらない。

悲しくなつたので表紙の美しい『三味線草』をぬき出して無意識にパラ〳〵と頁を繰ると押花にした母子草が出た。

松茸飯　二甲　稲田トミ

秋もいつしか深くなつて毎朝早々から松茸賣が澤山に來る。『内でも松茸飯炊て見ようじやないか』といふ兄様の動議に滿場一致で賛成した。炊事當番はいつもの氣のいらついた德爺さんである。出來上つたといふのでお釜の蓋をとつて見るとさあ大變。出來たと思つた御飯は半分生で誠に食べて見るとガリガリと音がする。羔さうか炊き直さうかの評定に秋の日も暮れ急ぐ。『今から炊直すとした處で四十人からの御飯が出來る頃には九時にも十時にもなる』と言ふものがある。皆どうしたらよいかわからないので臺所には八人も十人も寄つてたかつて御飯をじいつと眺めて居る。『早くしないか遲くなる』と兄様のお小言にとう〳〵半分蒸して半分炊直しと決議になつた。松茸飯を炊くによく馴れたお松婆やが今日欠席なので或者が『どうも技師が居らないから、こんな事になつちやつたゞ』と笑ふと『炊事軍曹が居つたら大叱られよ』と言ふものもあつて爺やの面目玉は丸つぶれ。そんなこんなで皆んなが台所を歩きまはつてお櫃も庖刀も目を廻しさうである。蒸した松茸飯が非常に成績佳良なので皆謙遜して炊直した新らしい御飯は賣口が惡かつた。兄さんが言つた『過の功名とは此事だ。將來稲田の家法として松茸飯は蒸

すことにしよう』つて。

坂本先生を送る夕

四甲　福永千代子

夏の夕暮に相應しい夕暗があたりを襲うて薄暗くなつた停車場に電灯が淋しさうにポーと點いた。何だか物悲しい思切り泣いて見たい樣なこの黄昏。私達は悲しみの思を心に秘めて喜んで坂本先生を送らねばならぬのでした。在校生卒業生其他の方々大勢に見送られ波路遥けき外國さして御出發になる先生の前途は希望に滿ち〳〵て居ります。けれども後へ取殘される私達は一年生の時分から一番長くお世話になつてゐるのですもの悲しむのも最です。今私の心は唯別れの悲みのみで他に何にも考へる餘地がございません。うれのに惡らしい瀛車は少しの同情もなく惡魔の聲の樣な瀛笛を鳴らして早もう動き出しました。瀛車が私等の前に來た時『先生、成功を……』と叫んだ其の聲は眞に誠の肺腑から迸り出た叫びでした。こんなに悲しんでゐるのに瀛車は何の遠慮も無くひた走りに走つて最う影も形も見えません。唯幾條かのレールが冷たく横たはつて居るばかり。じつと見送つた眼には言ひ知れぬ熱い涙が溢れました

あゝ離別の悲哀！

『あゝとう〳〵先生は行つておしまいなすつた。』

『ネー千代子さん何故私達あの瀛車を行かしたのでせう。皆んなでつかまつて居れば行かなかつたのに』

『純子さん、もう會はれないんですわねー。』

『えゝ三年、時によつたら一生濯、もう私堪らなくなつて。私いつ迄も此所にゐたいの。』

純子さんはプラットホームの階段に腰掛けて仕舞れました。あれだけ澤山であつた見送人もみんな歸つてしまつて邊を見た時は二人ばかりになつて居ました。

『ネー純子さん、歸りませうよ。最う誰も居ませんよ、私だつて何れ丈悲しいか口に云はれない程この胸の中は。でも之も皆神樣から與へられたプログラムなんですからね。』

漸くの事で一番最後に純子さんと私はプラットホームを出ました。

熱し切つた感情を靜めやうと、先程から待つてゐて下すつた二三の友と共に直ぐそこの海邊の石段に腰打ち掛けた。向ふの島は彼方より次第に暗くなつて賤が伏家より夕餉の煙が細く立昇つて居ます。靜か

な海面。小さい漁舟がスウと辷つて居ます。
『あんな小さい舟でもいゝから之だけの者が乘つて太平洋へと漕ぎ出したら』
『この水も亞米利加の岸を洗ふ水も同じ事でせうね』
えゝさう思へば何だか水にでも懐しいやうな氣がします』
『今別れてしまへば再びクラス全体揃つて先生よりお話を聞く事は無いんですね三年の後先生を横濱埠頭へお迎へする其の日はこんなに揃つては最う二度と再び、あゝ私達は皆んな離れ離れになつて何處を彷徨うやら』
答へる者は一人も無く唯すゝり泣く聲ばかり。斯くいふ友の眼には涙が一杯。心知つてか海鳥一羽悲しげに羽ばたしきながら東の空へ。

夕顔の君

四甲　廣川いと

やれ〳〵。籐椅子を矢倉へ持出してドカリと座つて休んだ時、其の時位心からの安息はない。
おや團扇を忘れて來た。もう取りに下りる氣にはなれない。でも涼しい夕風が袂の中からスーッと入つて、冷や〳〵する。損れた髪を直さうと、突と手を差伸べてクルリと小さく卷き卷き今何うしても思ひ出せないあの曲の續きを口ずさんで見た。
　嵯峨のあたりの秋の暮……月も隈なき……柴の戸
　にテッ、チン、チテンッン……
りれから先はどう？
此頃三ケ月からちつともお温習しないんだもの。お琴彈き疲れた右手の指がホト〳〵燃える。何んなに激しく血が流れてゐるかと、ソッと食指を額にあてゝ見ると生温い。でもいゝ疲れだ。胸に痞へて居事をスッカリ無くして仕舞つた樣に只他愛もなく嬉しい。夏休暇中又お琴を復活させやうか知ら。折角十年もかゝつて習つたものを奇麗に忘れて仕舞つても勿体ない。
よく道を歩いてゐても床しい琴の音がしてゐるのは好いもんだ。平安朝時代の姫樣が淡いボンボリの下にコロンカランと悲びかやに漏す小琴の音——夕顔の君つて何んなお姫樣だらう？、有るやうな無いやうなお話では有るけれど此の君が何だか懐かしくつて堪らない。
大抵細面な美しい而かも少し淋しい人で有つた樣に思はれる。りして藤紫か薄い空色の重ね色なんぞの

小袿のよく似合ふ細いなよ〳〵したお姫様。華やかな京の都を去つた草深い田舎で約しう古い老女逸と淋しい朝夕を送つていらした夕顔の君。此お方は。急度涙弱い可憐な人であつたに相違ない。こんな人に限つて彼様な源氏物語にあるやうな不道徳な行が有つた様にはどうしても思はれない。今若しも京都の山奥の人里離れた深山に夕顔の君が其の儘住んでゐるとしたら？嗚呼思つて見ただけでも胸が躍る。若しさうだつたら何處よりも其所へ自分一人訪ねて見たい。薪を背負つて杣人の風して、さうつと紛れ込だやうに道を行暮れたやうに……丁度白い夕顔が破垣に咲き乱れてゐやう。八百年前其の儘の夕顔の君、あゝ其人はどんなに驚異の眼を見張るだらう、否え、其時代の氣になつてこそあんめれを連發して怪我にも夕顔の君を驚かしちやいけない。白い花の咲き續く破垣を窃と潜つて懐かしい其のお姫様に逢ふ時にはまあどんなだらう？平安朝のお姫様！古い〳〵小琴も聽かせて戴けよう。寧そ夕顔の君の腰元にでもなりたい。そして白き花咲く緑深い其所に住みたい。安らかに殆ど感情にのみ生きる其の頃の人の日毎の生活は何んなだらう？緑小暗い木々の間に清爽しい夕風が渡る時几帳の陰から恐やかに小琴の小かな音がもれるであらう。笛を吹くよすがも無い妾は君の小琴にき〻とれつ〻逍遙うであらう。ホツト休んだ時見上げた夕顔の白い〳〵花に堪らなく嗟られるであらう。其時其時　丹波の山奥から出て來た時鳥が一聲鳴くであらう。ハタと小琴が途切れて君も端近う出でまして時鳥の音を追はれるであらう。色褪せた檜扇が眞白いみ手に痛々しう。御首を傾げて斜にそらせたお目の微かなうるみが、其の眼差か。あゝどんなにお美しいであらう！ホゾンカケタカ!!!血を、吐くやうな初めの一聲は大きく後は小さく、だん〳〵微かになつて小暗き彼方へ消えて行く。

お姫様。ようお聞きなされましたか？

夕顔の君に斯う伺ふ時檜扇に包んだお奇麗な微笑……何と思召すであらう？あゝ其の時夕顔の君のみ聲。

◆　◆　◆　◆

飛んだ空想ばかりして居た。八百年の昔の夕顔の君が何で今迄生きてゐられよう。又どうしてそんな事が出來よう。けれど嗚呼けれど懐かしい夕顔の君だ

けはどうか此のまんま偲んで居たい。うつと此儘何者にも妨けられないで何時でも思出せば奇麗な〳〵うれこそ少しの不快も不安もない美しい脆い夢を續けて居たい。妾の思つてゐる夕顔の君其人は人の言ふ其の君とは異ふかも知れないんだから。

あゝ最うすつかり暗くなつた。思へば今日からが夏休暇なんでした。長い〳〵お休み。どう過さうかしら。見上げる空は暗かつた。風も冷たかつた。

亞米利加の少女より　池田マサコ

夏休暇の或日の事、外國から手紙が來たと母上の仰るので半ば疑を抱きつゝ封を切つて讀下す。一行又一行　疑團は氷解した。之は阪本先生御在校の折節クラスの三四人外國の少女に御紹介下さつた事があつた。其の初便りである。

ジョセフイン　ペターソンより

七月廿日　一九一六年

親愛なる池田敬子さん

私は貴女を知りません。貴女も私を知らないでせう私は亞米利加の少女です。うして私はローサス、ポレスンバーグの友達で阪本花代さんに數人の日本の少女の宿所を書いてもらいましたが貴女の宿所が一番に書いて有りました私は十六歳の時迄女學校に通ひました。私はオースティン　ソーリッシュ、メッヂストユッピスオピル敎會に行つて居ります。私は一番姉で三人の弟妹弟があつて十二歳で妹が七才です。私は瓜哇の叔母の所に行つて居ります。今此所に四週間居りますが別段變つた事もなかつたら最う四週間居る積りです。過ぐる五月に七週間程病氣になりましたが此頃は大變よくなりました。併し痔せましたので両親に勸められて養生の爲叔母の家に參りました。私は貴女が誰で有るか別りません。それで其他に就て申上げます。私が貴女からのお手紙は宅で受取る筈ですから次に私の所書をお知らせします。

イリノイス州　シカゴ

オースティン　エベニュー

ソークス　一〇三三

ペターソン、ジョセフイン

貴女は學校に行つて居りますか英語の手紙を書く事が出來ますか私は書かれるであらうと思ひます。貴女は私に書いて下さい。うれは日本語を書く事が出

來ないからです。日本がどんなにあるか知りたくて堪りませんので他日日本を訪問しますが誰を日本で知つて居りますか若し機會があつたら宣教師となつてデーサスクリストの福音を廣める爲に行きます。貴女は日曜學校に行つて居りますか多分日本日本人は無教育者ばかりでせう。若し違つて居れば許して下さい。私の事やらシカゴの事が聞きたければ何時でも喜んで私の知つて居る限りの事はお知らせ致します。私は日曜日の午後に此手紙を書いて居りますけれど心配です。夫は私が如何に書いたら貴女が面白く滿足せられるか私は所有ベストを盡くし書きます。私は日曜學校や教會に馬車に乘つて行きます。時にはあの優しい馬に打跨つて行く事も有ります。田舍は都の樣では有りませんけれど都の人より親切です。叔母さんの家には十二匹以上の馬や四十匹の豚や四匹のギネマーや四百匹の雞やらして二匹の猫と二匹の犬が居ります。貴女は此等の獸を御存知でせう。當地は大變暑くて天氣は快晴で雨は降りません若しも雨が降らなかつたら、大麥は立派に成長して收獲せられません。畑に栽培して居るものは砂糖黍、麥、蕃薯、豆類甜菜、西洋林檎イチゴ和蘭イチゴ其他種々の果實です。

私の叔母や叔父や凡二百町からの大きな田畑を持つて居る農夫です。自動車を持つて居るので何時も其に乘て往來します。日本には自動車がありますかシカゴの家から約五百理離れて居ります。私はカメラを持つて居りますので彼方此方の景色を寫して居りますから何ぞ日本の事や貴女の事を書いて下さい。貴女は學校に行つて居りますか花代さんは貴女の先生ですか貴女は本を澤山讀みますか私は貴女が亞米利加の物語を讀んで居らつしやらないと思ひますが貴女は讀みますか私は讀む事を好みます。二三の紹介を致します。中畧貴女はバイブルをお持ですか私は本の中で一番バイブルが好きです貴女は此のレターを御覽になりますと直ぐ御返事を。グットバイ。

故郷を離るゝ記　四甲　檜垣保世

床を離れて裏に行くと篠代樣のお母樣がお出になつて祖母樣と一緒に御馳走を拵えて居られた。

私は起き立てのぼんやり顏で皆樣のお顏を見ながら立つて今に來らんとする悲しい別離を胸に繰返して一人涙ぐんで居た。やがて皆樣のお心籠つた御馳走

を戴いて旅の支度をして居ると篠代様の弟が「おばあさん、もう船が川端に着いたよ、あれ彼所のあれで〳〵」と頻りに叫ぶので双眼鏡を出して見るとそれは正しく富さんの船であつたので私は家族の者に見送られて新田の濱に出た。最早荷物はちやんと積み込まれて居るので私は直ぐ船に乘らなければならなかつた。早お父さんは船の上から皆様に別れを告げていらつしやるのに私はどうしても乘られない。皆さんから押されて始めて船に乘つた。お情深い祖父母様や叔母様のいろ〳〵と下さる御注意も耳に入らず帆柱に靠れたまゝ頭が上らなかつた。船頭さんが出帆の用意を掛けられたので堪らなくなつて繰返して今一度皆様に物を言はうとしたがどうしたのか聲が枯れて出ない。見るとお祖母様も叔母様も皆泣いて眼を赤くして居られる。『保世さん冬休には急度行きますよ』と言つたのは篠代さんの聲。それも淀んで波打際に下駄を浮かせていらつしやるのが左も今の別れをまざらすものゝ如く見えた。船はずんずんと動き出す。懐しい人々にはだん〳〵と小さくなつて遂には濱の小石同様に見えて、もういくら躁いても駄目。最早我が戀しい村さへ見えなくなつて仕舞つた。涙を拂つて船の内に入ると他にお客様が澤山面白さうに高笑ひをしていろ〳〵の話をして居られる。何氣なしに窓うと奥を覗いて見ると西瓜が山程積重ねてあつたのでびつくりした。暫くたつ内皆様の面白いお話に釣込まれて先程の悲しさは何處へやら行つてしまつた。折から風はよし潮もよし船はつる〳〵と海の面を辷つて通ふ漁船の數々を乘越してお晝までには海航者の最も困難とする鼻繰の崎も難なく通り越しやがて瀬戸田町に來かゝつた。すると今迄の風が俄に靜まつて帆がぶらり〳〵と左右に振れて居る。間も無く瀬戸田を離るゝ事約一里の所で潮の流れが逆になり向風が吹出して船は少時の間千島掛に進行した。『おぢさん彼處の小さな島は何島ですか』『あれですかあれは鷲島です潮のまんが悪いと彼所は越し悪い今日はどうも不安なのです運が悪かつたら潮待ちするより外仕方がない』と言ふ。船の進むにつれて逆に流れる潮の勢は増して來る。間も無く鷲島に近づいた。すると楽の通り船は無惨にも一町程後へ押流されてしまつた。皆さんなはどうする事も出來ず「あれ〳〵」と叫んで居る内に益々後へ流されるのでお客様は一緒になつて船頭を助けて

可笑しな身振をしながら一所懸命に櫓を漕ぐのでした。私共女客は思はずどつと吹出した、漸くの事で元の所まで漕ぎつけると今度は水の流れと漕く力とが平均して後へも前へも動かなくなつてしまつた。船の中の者は一所懸命に骨を折つて居る。それだのに動ともすると一間位は知らぬ間に突戻されるので今が地獄極楽の界目。漸く岸近く漕き寄せて少し息をつくと大きな〳〵岩にぶつかつて動かなくなつて今にも顚覆しさうになつた。流石の船頭さんも商賣道具の船が破れたら大變といふので汗水滴して齒を喰ひしばり逆流と戰つて居る内ひよいと岩から船が離れたので一同安心して『あゝよかつた』と喜んで居ると又流れ出した『そら又流れるぞ流すな流すな』船の中でがや〳〵言つて居ると『ぎり〳〵』船は渦の中に卷き込まれて三四回も激しく廻された。『あゝ最う駄目だ今日はとても歸れない。人々は口々に斯う言つて萎れかへつて居るとお客の中から最う一度骨を折つて見やうぢやないかゐれで行けねば仕方が無いと言ふ者があるので外の人も、さうぢや最う一辛棒だやれ〳〵とシャツ一枚になつて三四人陸に飛上り船に長い〳〵繩をつけて岩から岩へと傳ひ乍ら額に赤筋を浮べて船を引き出した。船の中では船頭さんが一心に櫓を押しながら梶を取つて居る。乘客は『そらモー梶』『ヨーソロ』『そら何やら梶。等と叫び乍ら陸の人々を見ながら号令して居る。陸の人々は船に引張られて今にも海に轉げ込みさう。私は握り拳をして「あゝ落ちる〳〵あれいけない〳〵」自分を忘れて手には一抔汗を握つて叫んだ。神様のお助けでもあらうか。暫くする内船は一寸二寸と動き出して遂には一間二間といざり出してどう〳〵元の通り潮の流れがなをり大分船の足も早まつたので人々大恐悅。陸の人も船に歸つた。するとこの人々の身体から汗が瀧の様に湧き出して流れるので私共は之をふきとつてあげた。其の内に皆様の顏には嬉しさが滿々して今までの困難を語つて大笑ひ。暫くして船頭さんが奥の方から大きな西瓜を二つ抱へてきて私共に下さつた。其のおいしさといつたら又格別なものであつた。斯うして居る内風は追風に變り船の勢はゴー〳〵と鳴つて恐しい樣。最早日は暮れて百貫の燈臺には火がともつてちらり〳〵と遠くに見える。間もなく尾道の美しい夜景が眼に入る。私共は樂しく夕飯を終へて皆んな屋形の上に昇つて涼ん

で居ると肌心地のよい涼しい風が吹いて來て何とも言へないよい氣持。山南にかゝると遠波の上に半月が表はれて汀の方では鈴虫がリン〳〵と美しい聲で鳴き出した。私はたまらなく何ともたとへ樣のない感に打たれた。皆樣も『あゝいゝなあ〳〵』といはれて今までの話の間をぴつたり絶つた。波の音がバシャン〳〵と響いて船は月の光に照されて靜かに進む。いつの間にか私はお父樣の腕を枕にして眠つてよい氣持になつよき夢を結ばうとしている折から『保世さんさあ歸つたよ起きなさいよ早く』と輕く起されて眠を覺して見ると船は早野島の濱に着いていた』あたりを見ると何時の間に歸られたのか澤山いた筈のお客樣は一人もお見えにならない。船に別れて月光を浴びつゝ父と二人で淋しく野道を辿つて我が家につくと丁度時計が三時を報じて庭の夕顔が萎みかけていた。

眞晝の渚にて

四甲　兒玉千賀子

懷しい潮の響を心行くばかり聞かうとして私は磯の芝草の上に座つた。青玻璃を張つた樣な紺青の海は際限もなう展がつて明るい輝かしい眞夏の光を碧い胸一杯に吸つてるぢやありませんか。

あれ、白い帆が潮風を孕んだ樺色に輝く心地よさ!!!軟い濱風が頰を掠めて快くあたつて行く。バラ〳〵と膝に伏せた詩集の眞白いページがさゝやかな音を立てゝ輕く躍る。ひよろ〳〵生えた磯馴男松は海のま晝の歌を唄ひ出した。か弱い女松の花は散る、ハラ〳〵と粉雪のごと。磯邊に投げたま白いパラソルの上に微ななつかしい音を立てゝ。新潮の藻の香にこぼるゝ眞砂にまぢつて、紅貝や櫻貝が落花の樣に散ばつてゐる。

明るい强烈な光線に反射してギラ〳〵とまぶしい位黄に紅に麗しう五彩バッと榮えてゐる派手な貝殼としつとりと波に潤ふた眞白い小石との調合を私は大變美しいと見た。華車な貝と冷たい石!!

花か磯邊の櫻貝、拾ふ——

小さく口ずさみながら私は其の奇麗な砂を掌に乘せてはサラと無意識に播きこぼした。

——拾ふ旅人のほゝ笑みに、燃ゆる血汐のおどりては、波に希望のさゝやきや、

おゝ波に希望のさゝやきや！歌ひ乍らも私の胸は高鳴ります。

ひたすや緑内海の深き心を誰か知る。

砂をいぢつて居た指先がチク〳〵痛み出したので靜かに老松の根元に横はつた。

濃緑りの細い葉の隙間からコバルトの空が覗いた樣にチラ〳〵と明るい姿を見せて、白い句やかな雲がスイ〳〵と北に流れる。

「何て碧い空の色だらう」目を細くして艶やかな緑の葉越しにヂット輝かしい大空を見つめて居ると、いつか瞳が痛くなつた。

「あゝまぶしい」そつと目を閉ぢて、クッキリと紅緒の染まつた雙の足をツーと汀に伸べて見た。

ひやり！と冷たい水が下から〳〵泌み込んで知らぬ〳〵微笑みたくなる。

おや、コロン〳〵と眠むさうなピアノが響く。眠たい、ほんとに眠くなつた。

うぐひす花咲く——

あら「晝の夢」だ。「蔭に臥して歌を枕に——」ピアノに伴れて低く唄ふ。

ピアノの音がパタと止むと、ハッと驚いてパッと瞳を見張つた。と、スル〳〵スル、卵色の洋館のレースのカーテンは音もなく引かれて、白い服が二ツの影の樣に窓邊に立つた。

まだ耳に殘る歌の響のなつかしいに細い指先に力をこめては「笑みて〳〵花となーるーよ」砂の上に書流す。小さな波がツッと寄つては美しい歌詞を青い海の底に引いて行く。引いてゆく。

ポーッポーッ、突然晴れやかな汽笛を明るい桔梗色の空にふるはせて小蒸汽船がスル〳〵と辷る樣に沖を過ぎた。シュッシュッと白泡の波の裾捌きも輕げに一。鷗が一羽ゆつたりと白い翼をひろげて一條殘した淡煙の行衛を追ふ樣にツイと岬を曲つた。

と今迄廣々と擬された樣に小皺一つ寄らなかつた海面が急にザワ〳〵と騒き出して、水の上に低く頭を擡げた岩岩には、早速徒ら者の小波が嬉しさうに戲れ躍る。それがツーと忍んで來る樣に渚まで這い上ると、今迄堪へた堪へて居た可笑〳〵が最う〳〵こらへ切れなくなつて一時にどつと笑ひ崩れる樣に白い泡となつて碎ける。碎けた勢に波はハッと驚いて又ヂッと笑を忍び乍らツーと忍足に引いて行く。

その何か高い空洞な聲を立てゝ一時にどうと笑ひ崩れる樣な響が、力强い美妙な旋律を立てゝ空に流るゝ。

ヂッと唆られる様なバスで奏づる潮の音樂にき〻とれ乍ら、私はふと、そこら一杯咲いて居た茅花を二ツ三ツスーと扳いて柔しいふうはりと手觸の快い乳色の其の花を唇にあて〻甘い甘い香をなつかしい氣分で心行くまで吸ふて見た。あ〻何て心地よい事だらう!!

崎から崎へ續く明るい藍青の波の輝き!!句やかな碧空の雲のたゆたひ!!

お〻どつちを見ても碧い海と青い空とが廣い限りない大きな胸に靜かに自分を抱擁してくれる。スーと胸一杯に私は息を吸ふて見た。一時にスク〳〵と身体が伸ひる様な太る様な何とも言はれない力强さと嬉しいが私の胸にこみ上つた。《糸崎宮の濱にて》

私の生ひ立ち

四乙　平田スガ

紺地に白く米標を染めぬいた暖簾の懸つた店に續て格子の間、其の母家に添うて庭一つ隔て〻裏に隱居、それに續いて白い壁の倉が見えて居る。其の家こそ私が初聲を揚げた家です。家内は祖父母父に母兄一人姉二人、それに店の者四五人下女一人、其の中に生れた私は全で祖母の手によつて大きくなりました。私が丁度三才の誕生日に撮つた寫眞が有りますが短いお河童の目の丸い頰の垂れた善く太つた兒引摺りさうな袂の着物をきて馬鹿に濟して居る顏が我乍ら吹出しさう。あ〻其の頃よくお人形さんの代りに枕を背負つて歩いたものでした。その枕は萌黄木綿で出來て居たので『貴君所の赤ン坊はどうしてそんなに色が青いの。』なんてからかはれて居ました早くから下のある私は、普通の子の樣に母の乳房をまさぐりつ〻眠る樣は知りませんけれど、暖いお炬燵の中でお祖母さんに色々な昔話を聞くのが一日中で一番樂しい時なのでした。

或晩不圖目を覺しますと私は毛布に包まれて抱へ上げられ戸口から火事を見せられました。眞暗な空に燃え上る火焰、渦卷く火の粉、それに物凄い半鐘の音。火事の夜といふものに深い印象を與へられたのはこの時が最初でした。

お〻其の頃には毎晩枕許には翌朝のお目覺を並べて……或時金花糖の兎が餘り可愛いので抱いて寢て翌朝べた〳〵に溶けてゐた事もありましたつけ。

こんな罪の無い時代も過ぎて六才になつた私は、髮をまだ長河童にして居りました。『まあお嬢さんのよ

いお毛』と出入の婆や等が云ふのが祖母に取つては自慢の一つであつたらしい。友の誰彼が奇麗にお下髪に結つて紅リボン等掛けて居られるのが羨しくて私もあの樣な髪結つてゞ散々祖母を困らした揚句漸くの事で雀の尾位のお下げを結つて貰つて滿足したとか聞くのです我儘だつた過ぎし昔の小さき我影よ其年の秋も漸く深らんとする龍田姫の得意時代の事花に嵐、榮枯盛衰は世の習ひとか遂に我が住馴れた家も二つに仕切られてしまひました。

其頃私等は『幾度お母樣、〳〵と呼んでも中々聞えなかつたが今度の家は母樣と一度呼べば聞える』と喜んだものでした。其後間も無く祖父母は隱居してしまひましたので私は毎日隱居に遊びに行くのを何よりの樂しみとして居りました。又年を拾つた祖父母に取つても小さな私の訪づれるのが餘程嬉しいものであつたらしい。

『お祖母さん雛子さんを』と云ふと何時も黑塗の紙箱の中から半紙を出して桃割なんぞ結つた雛子を拵へて下さいました。そしていつも私に大きくなつたら優しい女になるんぞよと云つて居られた。其の樣子が今も目の前に見える樣であります。

斯うして育つたヤンチャの私は七ッの春の彌生の三月待ちに待つた樂しい學庭に日を送る學生生活に入りました。

夢

四乙　村上貞子

今日はよい天氣だ去年の今日もこんなよい天氣であつたか知ら急度こんなによい理想的の夕ではなかつたらう。斯う思ひ乍ら宅の裏手の海岸を弟の友吉と二人で散歩した。向島はいつになく遠く見える。あゝあの大きな繁つて居る森は松かそれとも杉かこんもりと氣高く繁茂して居る其中に何やら道路の樣な者が見える大方宮か寺でゞもあらう。若しお寺としたら若しや我が亡き姉が僧となつてあの森の中に居てこの私を守つて居て下さるのではなからうか。斯う考へて見て居ると向ふの畔路を黑衣を纏うて胸に十字架を掛け片手に小さな女の童を引連れて他の片手には何かしら籠樣の物を提此方へ向つて歩いて來ました。何だか其の人のスタイルが亡き姉樣に似て居る。あゝ急度姉樣ぢ姉樣に違ひない。斯う思つて「姉樣」と呼ぶと彼方には通じなかつたと見えて默つて居らつしやる。今一度呼ばうとすると思ひ掛け

ない後の方から「お前は姉様だけは見別ける事が出來たがあの小さな女の童を見別ける力は有るまい。現在お前には姉様と同じ様な關係で而もまだ〳〵血の廻りの深いあの女の童を知らないか。』と嘲る樣なそして又教訓めいた事を言ふ私は考へた何うしてもあの童女は知らない。さうだ女の子なんか知るものか私がそんなに知るものか何で私が不人情であらう姉樣は知つてらつしやると言はれるが私には考へられない。自問自答してあゝ今のは誰かの惡さであらうと獨言をいつてゐると又斯んな聲が頭の中に聞えて來た。『知らない事が有るものか不人情者め自分の妹を知らずと言ふか憫れた女だ』……あゝ何うしたらよいだらう。そうそう今のは慥に御佛の聲だ。私には一番末の妹があつたけれど月不足に生れて直ぐ死んだ。魂にあの世へ行つて只殼だけ此の世に出たのではあるまいか。彼は私等が學校へ行つてゐる間に石の下に安らけく眠つたつけ。さうだそれが今ではあんなによく肥えて白いエプロン掛けてちよこ〳〵と歩いてゐたではなからうか。あゝ今のは夢か幻かそれにしてもあの妹は今はどういふ名になつて居るかしら聞いて見たい、問うて見たい。そして思ふ存分に握手もして見たい。又姉樣にもお目に懸つて久し振に否へ六年振に負ぶして貰つて見やう。それにしても不思議な事には今の姉の姿は亡くなつた當座の時は少しも變らない。髪も廂に結つて身長も餘り大きくは無かつた。嗚呼急度六年前の照し合はされた鏡の魂であらう？おゝさうだ今は六年前だ。おやッそれではお可笑しいこの私はあの時は未だ小さくて髪もお下げにしてゐたのにと髪をまさぐるとちやんと卷髪に結つて居る。おや〳〵益々可笑しい。そしてあの妹はまだ六年前には生れては居なかつたそれだのに今現に歩いて居る。どうも可笑しいと疑ひつゝ居ると姉樣と妹に此方へ段々と近よつて來る此處は夢の世か現の世かと思ふ内に姉は最早目前に表はれた。私は我を忘れて『おゝ懐かしの姉上樣、』『おゝ貞ちやん久し振ねイ。さあ貞ちやん此の子を御覽』と言はるゝまゝに氣がついて『おゝ神の子よ天使よ妹よ』と抱き付いたかと思ふと私の目はパッチリと開かれた。嗚呼今のは夢か扨も不思議な夢を見たものよと邊りを見廻はすと私は二階の南向の海に面した窓の下に机を持出して書物を見ながら轉寐の夢を見て居たのである。

兎糞錄

石岡瞰溪

拉女生到八田水源原地

曉乘殘月發校庭。　行盡長亭又短亭。
一步自深於一步。　始知斯道甚玄冥。

登八尾城趾

八尾城邊碧一泓。　寒林倒影細萍縈。
樵翁頸話當時事。　遠寺鐘聲最動情。

大典恭賦

盛矣聖皇登極儀。　彩雲銀礫紫雲垂。
人無朝野等懽悅。　皇化日新韶運熙。

丙辰元日偶感

西邦聞道戰雲蒙。　日出之邦旭一曈。
吾起向東先默禮。　祖靈願使萬邦融。

臨同窓會

春風吹袂青鬟青。　到此一望心眠醒。
借問盞籌爲底事。　盡言溫故識新經。

晴天鶴

碧なす雲井に翅さしのべて八千代壽ぐ田鶴が音ぞする

大宮の千代田の松に巢立ちける鶴も舞ひけり今日を祝ひて

あし田鶴も晴れたる千代田の大空に聲ふり立てゝ御世祝ひけり

農事講習所卒業式に臨みて

大御國子等に待つことゝと多し骨身をしまず立てよいさをし。

雪螢きりひあつめしみ光りは隈なく世をば輝してん

朝夕に分けし山路の田畦ありて手折りし桂のかをり高くも

手折り得し桂栞りにいや深く辿りて見ませ白雲の峰

世の中はいさをし立つべき庭と聞く心な振りうほかのつとめに

彌山高女を參觀して

五月雨のいぶせき中をひねもすに心のくもり晴れてうれしき。

徒然は昨日今日ぞこ聞きつるに導かるゝまゝ時も覺えず

玉稿を後からまわしましたので過つて變なところへ組入れましたことを石岡先生にお詫び致します

夏季休暇日誌の中より

休みの第一日　一乙　葛西　壽香

指おり數へて待つてゐた長い長い夏休みは愈々今日からである思へば四ヶ月の間は全で夢の中に過ぎ去つてしまつた。私は此の休み中を如何に暮すであらう。

午前中は二三のお友達と懐しい母校を訪問した、そして三年以上の女生徒の學藝を見た、私も四ヶ月前迄はあのやうに敎壇に上つて眞赤になつて談話讀方唱歌をしたものだつた、今に考へて見ればをかしいやうな感じがする。校長先生に面會して應接室で親しくお話をした、その時私はかう考へた、先生は私等を心から愛して下さる、誠に勿體ないことである自分等も是に對してせめて萬分の一も報いなければならぬ。と思つた、其の内に他の先生も後から四五人來られて、笑いながら色々な話が出たので思はぞ時を過して正午頃家にかへつた、

午後は柏原へ叔母樣のお見舞に行つた、客間の襖の上には叔母樣がすや〳〵と眠つて居られた、やはり今日も今迄と變りはないらしい、あゝ叔母樣は何時よくなつてお家に歸られることかと思はぞほろりとした

七月二十一日　金曜日　大久保　季子

いつも學校から歸へると勉强の後すぐお姉さんの入院して居られる所へ妹と二人で遊びに行くのであつたそのつかれが出たのか今朝は七時頃まで夜中のゆめであつたふと誰の聲であつたか『手術はまだすまないのかね』と云ふびつくり聲に『はつ』と目がさめた私はすぐ頭に浮んだそれは今朝五時頃からお姉さんの手術をなさるのだからお姉樣と互にむつまじいお話は一口も出來ず又病院にも行かれず家にじつとして居らなければならないかと思ふと何となく今日一日が早く過ぎてしまへばいゝのにと思つたやがて下男が『手術はすんだそうで御ぢやんす』と云つて歸へつて來た私は『上手に出來たのならいゝが』と晝までは心配ばかりして居たがやがて氣を取りなほし『明日は病院に行つてお母樣やばあやのお手傳ひをしやう』明日をたのしみにして居たいつも私等が學校から歸へつて遊びに行くのを何よりのたのしみとしられ又少勉强が長くておそくなつた時に早は

『季ちやんや民ちやんはどうして居るか知らん』等と心配なさる今日はますいにかゝられお姉さんの頭には何の考へも無いのであらふが常の愛の心はますいにかゝつてもきえうせぬ手術の場合にでも先生をさして季ちやん民ちやんとやさしい聲でよんで居られるさうである

間も無く晩食が來た皆お姉さんのうわさをしながら食べて居たそこへ病院から下男が歸へりお姉さんの樣子を知らしたそれはますいがさめてお姉さんは大變くるしまれたので先生は動かさない爲にお姉さんのお腹の上に重い物を四ッおもしにおいてあつたのを仕方なく二つのけられた爲に今は大分らくになられたとの事私はそれを聞いて胸がさけるばかり苦しくなつた唯々明日を待つて明日が來たなら妹と二人して一生懸命うちわを持つてあをいで上げ樣と思つたそれから八時頃床に就く前神樣に『お姉さんの病氣を早くなほして上げて下さい』と深く〳〵ねがつてをいた愛の神樣は私の心の底から出たこのお祈りをお聞き下さつて是非〳〵早くなほして下さるでせう

七月二十一日　母校を尋ねて

一甲　松本　榮

今日からいよ〳〵夏休みになつた私は女學校に入學して初めての樂しい休みを迎へるのである朝少しの間英語を練習してから永く通らなかつた長江の道を踏んでなつかしい出身學校に成績を持つて行つた校門を入ると六年間遊びなれた運動場が何となくなつかしく思はれる青々とした柳は涼しい風に吹かれてたなびいて居る細長い花園に植えられた草木は皆大きくなつて居るが中でも御大典記念樹がことに大きくなつて居る目につくものが皆なつかしく思はれる色々話をして居る所へしたしい先生が出てこられて『まあよく來ましたこの暑いのにさあこちらにおいでなさい今日は丁度女子の小學藝會ですから御覽なさい』と言つて講堂に案内して下さつたのでしばらく見せていたゞいた。生徒は皆熱心にやつて居る朗讀の中には私の妹も加つて居たやうやく終つて校長先生のお話があつたそして『天長節は何日ですか』とお問ひになつた時中には隨分面白い事を言つたもので先生から名前を呼ばれた時の返事ははつきりとしていかにもかつぱつにあつたが『はい二月十日で

す』と言つた時は其のかつぱつもなくなつて皆に大笑ひされた。講堂を出ると校長先生の後について應接室に行つた先づ暑中見舞を言つてゐれから皆でテーブルを取り圍んで話をし初めた校長先生から母校の事を聞き私等は我が校の樣子がこんなに變つて居ると言ふことを話した話は後から〳〵つぶいてなか〳〵きれないやがて小使がお茶を持つて來た先生は『今日はあなた方はお客樣だから私がお茶をくみませうどうぞ御遠りよなくおあがんなさい』と親切に香りのよいのを皆にくんで下さつたので『ゐれではいたゞきませう』とかはいたのゞにすら〳〵とのみほしたしばらくすると多くの先生がこられたがあの少しの間に四五人の先生が變つて居られたのには驚いたあまり話に身をよせて居たので十二時が打つのも知らなかつた『もうおそいやうですから歸りませう』と言はれてふと氣がついて見ればもう十二時であつたので職員室に入つて校長先生を初め多くの先生方にあいさつをしてなつかしい學校を後に石段を一歩二歩と歩み出した。

七月二十二日　　阪本先生を送る

一甲　原田ヒサノ

昨日お友達から明日の午後七時十分の列車で阪本先生がこの地をお立ちになるといふことを聞いた。先生が亞米利加へ留學なさるといふ事はかねてより承知してゐたが餘り突然なので驚いた。

夕方二人の友達と停車場へ行つた卒業生の方も上級生の人も大勢來て居られた、同級の人と色々さざめいてゐる折からかけ聲勇ましく車が走つて來た皆一樣に彼方を振り向くと阪本先生であつた、先生は色々と御挨拶をすませ私等の前へ來て

『一年生のお方もよくお揃ひで』といひつゝ丁寧に挨拶される私等ははつと胸塞つてろく〳〵に言葉も出ずず唯先生に着いて頭を下げるばかり、ゐの中に時間が來たのでプラットホームへぞろ〳〵行く、そこで整列して汽車の來るのを今か〳〵と待ち構へてゐた、ゐの中に先生を乘せて行く汽車は黑煙を出して勢よく走つて來た、先生は内藤先生と一緒に列車に乘られたそして窓からお顏を出してニコ〳〵して居られた汽笛の合圖と共に車輪は轉じ出す、先生は再びこの地を蹈れるのであらうかあゝ心なき汽車は

煙を殘してづん〳〵東の方へ去つてしまつた私は影の見えなくなるまで見送つた、

七月廿五日　第四學年甲組　岩崎照子

大阪にて

早目に夕飯を濟ませ乘合舟で天神祭の渡御を拜しに行つた。淺い大きな川舟に箱詰にされた樣に一杯乘つたのが次から〳〵と川を埋める、太陽は漸く瓦の波に姿を沈め電燈のちら〳〵する頃渡邊橋の手前に舟を繫いだ

山の樣に見物人を乘せた舟は河の両岸に鈴なりに着いて陸の方には橋にも岸にも何町といふ間只眞黑に人の垣がきづかれて居る

『あんたはん初めてぶつか』と急に隣の人に話かけられ唯はいといつて笑つて居た、篝火焚いて居る舟が賑かに噪ぎ出すと間もなく一番舟が橋の下から現れた。篝火の前まで來ると雙方から鐘と太鼓の調子につれて三度手をたゝくとわいと騷ぎ出す。向ふの舟からは篝火の舟に向つて何やら頻りに投げる。丁度舟に投げ込まれるものもあるが河に落ちると巧に長い柄のついた柄杓で汲み取る。舟が一艘づゝ來る度に柄杓に一杯の石油を注ぐのでパットと大きくなつた火は紅の焰をはいて居る。側の舟に乘つてる人は熱いのでたら〳〵汗を流し乍ら一生懸命扇を使つて居る。世話方であらう紋付の羽織袴に畏つた人々の乘つた舟が來た。數艘の後に來る舟に金具の閃々と美しい八角の御輿は安置されて居た。御輿の後では神樂を舞つて居る。來る舟は次から〳〵と篝火の前に來て同じ樣な事を繰り返す。御輿をかつぐ人が揃ひの白のシャツで威勢よく來ると『丸なしやあかんあかん』と言つて折角鐘をたゝいて居るのを止めさせてしまつた。言つた通り其舟からは何も投げなかつた。けれ共私は其の現金なのに驚いた。こんな時にでもさもしい人の心は見えるのです。來る舟も來る舟も見物人を乘せた舟も両岸も橋上もごろごろと人許りなのを見乍ら何處からこんなに澤山の人が集つたのであらうかと山出しの私は考へずには居られなかつた。

御渡りが濟むと陸の方では大騷ぎをして居る。電車に乘る爲である。私達は西横堀から東横堀へ涼しい河の流れに舟をまかせた。舟を捨て滿員なのをやつと電車に乘り込んで切符を切つて貰へば午後十一時

三十分に鍵が入れてある。ひどく遲くなつたと思ひながら窓から外を覗けば町は晝より一層人の行き來多く赤や青の電燈のついた夜の街は美しかつた。

七月二十九日　　一甲　岡田カツヨ

田草取り

長い間の田草取りも今日で大体すむので出來だけ力を入れて働いた。稻の水も今は殆んど干んとして居る一昨年も昨年も續いて大變な不作であつたが今年はどうぞ天氣も續き雨も降り、此の青々として居る稻が重さうに頭を下げるやうになればよいと、天に賴んで置いて歸つた。彼方の畦道も急しさうに農夫が歸つて居る。北風凉しく面を拂ひ、月は光々と我等を照してゐる。げに農業をなす人達はこんなに朝は早くから晩はおそくまで働かねばならぬかと思へば熱い涙がほろりとこぼれる。漸く重い足を引きずりながら家に歸り、一日の苦熱を汗と共に行水に流して寢についたのは十時過ぎであつた。

猫がいつも〳〵近所歩きするので紐を以つて柱へ縛りつけてやつたが餘り鳴くので八釜敷くなつたから又こそ〳〵と起きて解いてやつた。

七月二十五日　　第一學年甲組

兄の音信　　高橋止志

『郵便』と云ふ聲に私は『はい』とすばやく立つて出て見れば豐橋の兄樣から姉樣へ來て居るのでした私はすぐ姉樣の處へ持つて行きました。そして姉樣の手へ渡しました。私も其處へ坐つて讀んで居らつしやる姉樣の顏をじつと見つめて居ました。姉樣は一心に讀んで居らつしやいましたが少したつと思はず吹出されたやうに『おほゝ』と御笑ひになるので私はどうしたのかと思つて『どうしたんですか』と聞きますと『此處を讀んで御覽なさい』とおつしやたので讀んで見ると『今年はたくさん柿がなりましたか僕が歸れば一人ほうばつてたべられますが、今年は歸られませんからくやしくてなりません、姉樣僕はいつも柿の事ばかり云うては上級の人に笑はれます。僕いやしんぼうの樣ですけれど姉樣こんな目にあつて御覽なさいほしいものですあゝ柿がほしいとはは、、、』まあなんていやしんぼうでせう私も姉樣も思はず『ほ、、、』と笑ひました。

第三學年乙組　渡里常子

露　八月二日

よく晴れた空に朝日が昇つて來た松の木の梢にダイヤモンドの樣に光るものがある私は何かと思つて考へたらあゝ露だなぜ多くの露は光らないのにあれ一つだけ光るのだらうと近よつたすると光るものはないもとの所に歸つて見たがつひに見えなくなつたあゝをしい事をしたと二度光つた所に行つた松の針の樣な細い葉の眞先きにたゞ露が玉をなして居るばかりである露は無分別なものだこの短い命にもかゝはらぜ今にも落ちさうな葉末に玉を結んで居て短命をなほも縮めやうとしてゐる實際無分別なものだ美しい玉を結ぶのだから今少しよい所もありさうなものをその中に二つ三つところぶ樣に落ちた下を見たが何もないもう光らないかと再びふり返つて見たどうしても再びダイヤモンドの玉を見る事が出來なかつた。

第三學年乙　高垣當子

八月三日　今日は日光の方を見物致さうと思ひ、朝早くより仕度を整へ、午前七時の汽車で上野驛を立つので、私は定刻より、十分程前に停車場へ行つた旅立つ時の氣持といふ物は、いゝ物だ、滊車が動き出すと、私はすつかり好い氣持になつてしまつた。見る物〳〵總て新しい感じがする見渡す限り續いた青い水田の色も好ければ、空には渦を卷いた夏雲が姿も何となく夏の旅といふ感じを越させた。滊車の日光驛に到着したのは、十時頃だつた停車場から神橋まで電車で行き、其處より下り東照宮の靈廟を拜觀した。『日光を見ぬ中は結構といふな』とは能く云ふ言葉であるが、然し靈廟見物はりんなに大騒ぎする程、結構な物でない、奇麗だといへば奇麗、立派だといへば立派だが、然しそれだけの事である。唯鬱蒼たる老杉が山、一面に生え茂り其の背景をなしてゐるのが、金碧燦爛たる殿堂に相映じて一寸面白い配合であると思つた、靈廟を見てから私達は日光ホテルの前をてゝ、其處から又電車に乘つた赤薩山女峰出山大眞名小眞名子といふやうな連山が、眉に迫つて聳えてゐる。麓の高原を段々山深く電車は、山分けて進んで行く、道路には夏草が青々と茂り、灌木の並木が電車道へ枝差し延してゐる。馬返しに着いたのは、三時過ぎであつた。これから私達は愈

々徒歩で山へかゝらなければならないので、荷物は皆人足に預けなるだけ、身輕くなつて此處を出た。道は大谷川に添ひて、溪を奥へ〳〵と入つてゐた深澤の木橋を渡つて數町行くと道は、劍ヶ峰の舊道に懸つた此處は日光で名に負ふ難所である、胸を突くやうな嶮しいがけ道で此處を登るのは、中々容易の事ではない尤も新道を行けば、樂であるしそれに此の方は二人曳の車が通のだが、道程からいへば馬返しから中禪寺まで。舊道は一里新道は一里半といふ大した差である。私達は舊道を取つた此の山道には大分皆弱らされた『この位の道にへこたれてどうなるんだ』なんて中には、附け景氣を云つてゐる物もあつたが、りの實心は少からず弱てゐるやうであつた蒼くなつた者もあれば、赤くなつた者もある、山の途中には所々幾軒も休み茶屋があつて、私達の一行は殆んど茶屋のある毎に休んだ、そして飲食をした實際山を登るとお腹がすくので、その美味さは言ひやうもない流れるやうなあせを拭ひ、冷たい山の氣を肌に入れながら凉んでをる、氣持實に何ともいへない好い氣持だ、下から來た一番取附きの劍ヶ峰の茶屋では方等の瀧を眺めた、山を登りきつた所は太平といつて色々な木が、生えた森林帶である明るい、葉陰木の幹の間を歩るいて行くと邊りがしんとして、物さびしい氣候も別世界へ來たやうに冷々する、私は日光では此處が一番好きである、太平を數町行くと華嚴の瀧がある、何時見ても物すごひやうな瀧である、崖の中段から眺めると、水煙の間に飛び交ふ岩燕が、小さくとんぼのやうに見えた華嚴の瀧見茶屋から中禪寺湖までは、僅か三四丁である青葉の陰からをとめの樣な美しい湖の姿が、現はれた時には私の胸は思はずおどつた、私達は歌ヶ濱の米屋旅館と云ふのに宿を取つた、湖を隔て直ぐ目の前の對岸に美しい圓維形をなした、男體山が大きく湖をおそふやうにそびえてゐて實に、景色の好い所である。夕暮になると何處ともなく湖の面に夕霧がわいて來て、男體山の腰のあたりをかくした、そしてそれが夜になるとすつかり晴れて、十日頃の月が湖上を照した、靜かな湖の上に耳をすますと河鹿が美しい、聲で鳴いてゐる、翌日朝五時に起床した朝の湖は、又更に氣持いゝ空氣が靜かに例の男體山が相變らず、物言ひたげな顏をしてゐる、私等は御飯前にどてら着のまゝ湖畔にそひて、立木の觀音へ散歩

に行つて見た、この道が又好い緑の陰深い所に西洋人の別荘などがあつて、道には熊笹やしだ等生えてゐる暫く遊んで歸つて來てから、九時に宿を立つた歸へりは、舊道より新道の方を遠くても下りだからと思ひ、新道を通り電車に乘り日光驛に着すなつかしい、我家に歸る上りの滊車を待てりやがて、氣笛の音かまびすしく鳴れり、勇み〳〵て滊車に乘り、車中は、夢うつゝ眠りたり無事上野驛に、着きしは太陽ははや西にかたむけり。

七月卅一日　月、晴、　二甲　越智コウ

夢

東京に居られる叔父様が歸るといつて手紙を下されたので、昨晩私は嬉しくつてそればかり思ひつめて眠に就いた

ピーと滊車が滊笛を吹いて停車場に着いた。其の滊車といふのは人力車の樣で、それに叔父様は大河内先生と二人で乘つて居らつしやる。他の客は一人も居ない。と見ると先生は一丈もあらうといふ長い〳〵お琴を縱に抱き叔父様は大きな風呂敷包を抱へてお下りになつた。私は最う驚いて仕舞つて何とも物が言へなかつた。やがて先生は又歸ると仰つて滊車に乘込まれた。私は贈物をしようと思つて阿部さんのお宅に預けて置いたお菓子箱を急いで取りに行くと皆食べて仕舞つて箱だけ歸されたのを知らずに『なんて輕い事』とは思つたがまあ心ばかりの品をと言つて先生にあげた、と見ると滊車は『さよなら』とも何とも言はないで呆と消えて仕舞つた。私は叔父様と二人連で宅に歸るのに山を越え川を渡りなどして着いたがうれは藁屋の見すぼらしい一軒家でしたこれは私の内では無いので叔父様はサア行かうと仰るので後について行くと高い〳〵崖の上から眞逆樣に轉げ落ちました。『あつ』と思ふと眼が覺めた時は額に冷汗がにじんでゐた。ア、夢でよかつたりれにしても私は何を思つて居て斯んな夢を見たのでせう。さつぱりつゞまりがつかない。

私は今朝になつて昨晩の夢を思ひ出しては一人ほく〳〵笑つて居ると母や妹が『どうしたの』と言ふので私は昨夜の夢を物語つたら母は『朝の御飯のよいお肴が出來た』と仰つて笑つて居られた

八月一日　　四甲　兒玉千賀子

何やら妹の話すのを聞き流して私は白い霧の樣な湯氣のぼか〳〵とたつて居る、透き通る樣な湯槽へそつと身を沈めた。

靜かな〳〵晝のお湯。

硝子窓越に見える明るい匂やかな碧空の白雲のたゆたひ!!艶々しい青葉の戰ぎの心地よさ。濛々と上る湯氣が凝つては窓の水色硝子に美しい露の玉となつて、ホロリ〳〵と飜れ落ちる。浮き立つ樣に賑かに鳴つて居た隣の蓄音機の樂隊がハタと歇むと――月に村雲、花に――風――ゆつたりと琵琶歌が始まり出した。低い慄ひを帶んだ底力のあるバスの響。

ヂットお湯に浸つて悲しい樣な靜な節廻しを聞いてゐた私の心は、フウハリと絹綿にでも包まれた樣に恍惚となつてツーと瞳を落す。澄んだ湯の中にズンナリと透いて見える兩脚の細い爪先が、この世のものとも思はれない程玉の樣に白く麗しい。

オヤこれは私の足かしら、今更の樣にソッと指先を動かして見る。

『ちよいと御免なさいよ』ブンと快く鼻を掠める香油の甘つたるい薫りと若々しい聲とに驚かされて、ハッと瞳を見張つた。一緒だつた從姉の純白な上体が素絹の樣な湯氣の中にクッキリと浮出た。と其の拍子にピカ〳〵と磨かれた眞鍮の框をスル〳〵と溢れたお湯はスーと湯氣を立てゝ淡藍色に煙り乍ら流しを流れて行く。

チョロ〳〵チョロと、かすかに可愛い音色が又眠氣を誘ふ樣な。

水淺黄と薄紫と紅色が三巴に彩色を分けた可愛らしい摘みの簪がふつくらとした髷の横に重さうに挿されてる頭を、心持ち傾げて、澄して香氣の高い洗粉をセッセと掌に溶いて居る乙女らしい姉の容姿をつく〴〵と見た。

結立らしい桃割れが甘い油の香りに匂ふて、ポーと薄桃色に上氣した雙頰に滴れる樣な美しい鬢の毛がハッと膨らんでゐる。

まあ何といふ立派な奇麗な身体だらう。

のび〳〵とした手足、程よく盛られた白い艶やかな脂肪、櫻貝を並べた樣な十指の爪先からふつくらとした腕、肩、腰、踵との丸味に至るまで日本の女にでも斯んな美しい、立派に發達した身体が有るだらうかしら。着物を着せるのが惜しい位。私はヂッと

美術品でも眺める樣にいつまでも〳〵夢心地になつて、窃に姿を愛で〻居た。姉は相變らずせつせと香りの高い石鹸を福よかな乳房のあたりに塗つてゐるあゝ、輝く樣な眞白い皮膚の下から若々しい血汐の轟が其の儘華かな紅色に透いて見える。

ま白い丁度カステーラを造る時に泡立てる百味の樣にふわ〳〵した、輕く小さいシャボン玉の集り。それに包まれる左の手を、しゆつ〳〵としごくと血の色も匂ふ許りの肌の艶めかしさ!!『あら何を呆然してゐるの、之を上げませう、ホホーあの顏』ボイと何か白いものを湯の中へ投げた。と同時にあてやかな聲が銀盤の上へ滑らかな水晶の露をころぼす樣に奇麗に高く湯殿へひゞく。

昨夜摘んだまんま洗粉の鐘の中へ入れといた夕顏の萎んだ花が、ポーと櫻色になつた私の胸のあたりをゆら〳〵と夢の樣に仄白うゆらめく。

『――住む――や――あ誰、問ひ――てや見んと、たそがれに』

おや又角の三味線屋へお稽古に行くらしい女の子の可愛らしい聲が表を過ぎる。

ミルク色の霧の玉の連つた窓ガラスへ『夕顏』『源氏』などゝなつかしい言の葉を桃色になつた指先で奇麗にサラ〳〵と細く書いて見る。

書かれた部分はポトリ〳〵と露が靜かにおとなし相な音を立てゝ、木の香も新らしい立戸にこぼれる。ガラリと誰かゞ戸口を開けると、サと涼しい風が流込んで肉の底まで透して呉れる樣に濡れた暑い身体にりよ〳〵と清々しい青葉の風が薫る。靜かな〳〵晝のお湯。

八月二日　　二甲　廣角　サキ

唐津海水浴場に遊ぶ

鉄を溶すといふ今日此頃の暑さも打忘れて厭かる叔父を透ひ出して唐津旅行の途に上つた。氣笛一聲山本驛を大蛇の如く搖ぎ出す午後三時の普通列車。窓から顏を出して四方山を見渡すと音に名高き松浦佐用媛の古跡なる領巾振山が古を語るかの如くに遙に見える。松浦川を渡つて鬼塚驛に着した頃は最う太陽が西の山の端に沒しかけて居た。

唐津に着いたのは点燈頃であつた。町には浴客を喚ぶ爲に種々の美しい裝飾などをして居た。長い〳〵軌道を横切り今に知られた豐臣氏の築城趾を眺めな

どして昔物語に花を咲かせつゝ叔父と二人で目的地に着いた。最う日はとつぷりと暮れて玄海の岸を洗ふ小波の音のみ聞える。博多屋といふ旅館に投じて草臥足を伸して明日の樂しみを夢みつゝ寢についた明くれは八月二日の朝未起太陽の出ぬ内に素足のまゝで砂濱を歩む心地よさ。延長二里ももあらうといふ砂原に青々とした松林が一町餘も續いて居る。青松の間からは唐津高等女學校と唐津中學校とが並んで見える。玄海より押寄せる大浪小涙を押分けて水泳して居る浴客の勇ましさ私等は砂原を横切つて昔の城趾なる舞鶴公園に登つた。公園の小高い所から四方を眺めると遙か向ふから帆前船が幾艘となく大島鷹島の間を掠めて東に向ふ。數多の漁船は凄じい漁笛を鳴らして東に又西に行き交ふ姿得もいはれぬ眺めである。さうかうする内夜はしら〳〵と明渡り海水浴の人々も次第に增して來る。眼下の松浦川に架けてある九州第一の長橋なる松浦橋が長蛇の横はつて居るかの如く見える。今し何所からともなく凄じい音響を發して自轉車が來た。三百八十間もあるといふ長橋を瞬く間に通過した。橋には綸を垂れて魚を釣る者もあれば何か事有りげに忙しけに走り行く人もある。西には松樹枝を交へて緣したゝる樣をなせる虹の松原がある。一見虹に似て居るから此の名稱がある。可笑しい事には此所の松原に棲む蟬は無聲である。之は昔豐太閤が朝鮮征伐の時この松原で蟬が鳴いて居るのをお聞きになつて一喝『喧ましい』と言はれたから啞になつたといふ事である。私はまだ朝飯前だつたので名殘惜しくも此處を去つた博多屋の二階の欄干に凭つて浦の景色を眺めるも茲幾日の事だらう。

八月十二日

盆の一夜　一甲　大淵三枝

銀の皿の樣な月が淸く冴え渡り眺める人々の顏を美しく照して居るかなり長かつたお說敎がすむと村の若者は待ち兼ねた樣になだれを打つて境内に出た。今日は孟蘭盆である。村中でも聲自慢の某が、人々に勸めらるゝまゝに一聲高く音頭を上げると、並み居る數多の若者は早くも闖く輪を作り手に〳〵扇子を持ち白い頰被りをして面白く踊る。だん〳〵踊る者の數が多くなるにつれて若い女も中に加つた。見ると全體の三分の一ばかりを占めて居る程で、今は

廣いと思つた境内も踊る人と見物人とで滿たされそれこうきりを立てる餘地もない有樣である。私共の村では三通りの踊りをする初めよりも二番目が面白く二番目よりも三番目と言ふ樣に段々と面白くなつて行くのである。私は第三の踊りを待つには餘りに眠かつた。時計は午前一時を報じた。村の若者はまだ踊つて居る。私は踊りの歌を子守歌の樣に思つて何時の間にか夢路に入つた。

八月十九日　　四甲　東　一枝

今日はお約束があつて岩子島へ行くのでりこ〳〵に仕度をして家を出た。四人切り、廣川さんも上月さんも行らつしやらないので行かない先から淋しいやうな氣がした。渡場の所で切符を買つて舟に乘る。暑い上に石炭の匂いが何かしら變で頭が痛くなつて來る。暑いから中へも這入れず船べりに立往生。早く船が出ればよいのに何して居るんだらう。『こんなに臭くては仕方が無い』なんか言つて皆んなで愚痴を飜して顏をしかめてゐるが仲々出ない。漸つとの事で碇が上げられて。船が動き出すォ、涼しい。船は靜かな海をガタ〳〵大きな音を立てゝ進んで行く。例へば隅田川の一錢蒸氣のような氣持がする。海が靜かだから餘計にそんな氣がして懷しかつた。私が斯んな事を思つて居る間に船は白い波を立てゝ進んで行く。冷い風が吹いて來て樂しい。あゝ最う尾道が見えなくなつてしまつた。夕方には歸るんだけど何だか名殘惜しい。私はジーと尾道の方を見つめた。四人で唱歌を唄つたりお話をしてゐる内船はだん〳〵岩子島に近づいて行く。私は岩子島つてどんな所か知らない。名前だけ聞いて知つて居るどんな所だらう海水浴で賑かゝしら等と思つたりした。ボー〳〵とラッパの音に船は止つた私共は小舟に移された。此處が岩子島だらうと思つて邊りを見はすと人子一人ゐない。杭が立てゝある所が海水浴場らしい。私の思つた岩子島とは丸で違ふ。羽田の樣な所かと思つた、

田舍の海水浴場つてこんな淋しいのかと意外の感にうたれて呆然として見てゐた。舟が汀に着いたのでびつくりして飛下りた。そして柔い砂の上をザク〳〵と踏んで岸へ上つた。何所かに家はないかしらと四人でキョロ〳〵見廻はして漸つと見つけたのは藁葺の一軒屋であつた。芝生の上を通つて家には入

つて先づ一と休みと思ひ〳〵縁側に腰をかけると直ぐ横道を通る人がある。よく似た方だと思つて見るとそれはm先生だつた矢ッ張さうだと思つて思はず私共は立上つた。之も意外の一つであつた。岩子島へ來ていらつしやる事は聞いては居たが。まさか此所にとは思はなかつた。もつと山の手に居らつしやるんだとばかり思つて居た。意外々々。今日はほんとに意外な事ばかり。坐敷へ上つて袴を脱いで庭の方を散歩した。之は又意外によく整うた庭園である月夜に獨り靜かなこの庭をさまよつたらと思つた。ほんとに月夜に相應しい庭だと思つた。向ふ遙に海を隔てゝ糸崎港が見える。それに續いて藝州の山々が蜿蜒連亘し其の麓に方つて大小の島々が牛の背の様な峯巒を見せて居る。大阪下關通の氣船や尾道から出る島々巡りの小蒸氣やポッポ船が東西に交通する。海は靜かで浪は無い。ほんとに月夜に相應しい庭である。餘り暑いので家の中へは入つて四方山のお話に耽る。私が意外に思つた事をお話すると木梨さんも兒玉さんも同感であつた。

お話も飽きて折角來たんだから海へ行きませうと手拭持つて出掛ける。裾からげで下駄をぬいで水の中へはいつた時の心地よさ。潮がみちて來るのと見えて女波男波がサラ〳〵とさゝやく。きれいな水の中から足が透きとほつて見える。ジャブ〳〵と面白さ當てもなく歩き出した。兒玉さんは松原まで行くんだといはれてドン〳〵先へいらつしやる。白い傘がドン〳〵先へ行く。福永さんが其の次へ木梨さんと私は後からポッ〳〵あれ〳〵お魚が小さい可愛らしい〳〵お魚が五ッ六ッおや二十も三十も奇麗な水の中を泳いで行く。私は可愛くて又よく小さいのにあんなに早く泳げる事よと思つて見つめながらお魚の行く方へついて行く。兒玉さんは最う燈籠の所までいらしつた。あの松原には嚴島神社が祭つてあるとの事海中の燈籠も宮島さんのお鳥居を眞似たのでせう。松原は壹町も續いて居て所謂白砂青松の様に見えて如何にも涼しさう。行つて見ようか知らと思つたが足の裏が痛くて……痛い足を踏みしめてジャブ〳〵と砂の柔かさうな所をそつと歩く。大分潮が來たようだやつと元の所へ辿りついて足を拭いて上らうとすると後の方から『福永さーん』と呼ぶ聲木梨さんだ、きつと足が痛いんだ。上つて潮風に吹れながらブランコに乘つて前の家へ歸つて足を洗つ

て坐敷へ通ると足の痛い事。

間も無く二人もお歸りになつて色々な事を話し合つた豐御飯をすませて木梨さんと兒玉さんと三人近くの森の中へ涼みに行く。波の寄せる音を聞き乍ら砂をザク〳〵ふんで松の陰へはいる。涼しい。草原へ坐つて涼んでゐるのもいゝが蟻が足へはい上つてくるのに閉口して立上る。福氷さんがカルタをするんだといつて迎ひにいらした。カルタも面白いけど下手だから耻かしい。福永さんと私、兒玉さんと木梨さん先生と奥樣、一回は私の組が一番負け、二度目は一番で嬉しかつた。今日はホントに淋しい。この家のお婆さんも今日は人が少いといつてゐた。貳時の船で一組來たゞけ。日中はどこも暑い。尾道よりは少し涼しいけど風がない。汗がダラ〳〵流れて來る。お婆さんと色々なお話をした。私はジーと沖の方を眺めて居ると繪のやうだ。白い帆が遠くに白く浮んで海の色は刻々と變る。今日始めて海をよく見た。ほんとにm先生の仰る通りでなか〳〵同じ色でゐない。空も變る。海も變る。面白い樣に色々と變る。私は先生が仰るまでは少しも氣がつかなかつた矢張觀察が必要だと思つて熟々感じた。五時半に船が出るといふ事だ。まだ大分時間がある。早いけども顔を洗つたり着物を着なほしたりして仕度を始めた。木梨さんはブランコへ後三人はまた芝生の方を散歩する。其内に時間が來たのでm先生の所へお別れに行く。先生は舟へ送つて來て下すつた。蒸汽へ乘移つて動き出すと何だか知らないけれども去り難い氣がしてならなかつた。あの七里が濱のやうな美しい海岸が深く〳〵頭の中へ殘つて居る。淋しかつたけれ共たまに出たので嬉しかつた。少しは体のためにもなつたらう。船は前の樣にガタ〳〵と大きな音を立てゝ尾道さして進つて行く。なつかしい尾道さして

八月廿日　　四乙　原田シヅコ

日記の中より悲しき思ひ出

いや蒸暑かつた今日も暮れては涼しい風を我が部屋に送つて來る私は庭の植木に水をやり緣端に腰打ち掛け葉から葉へと滴るゝ千顆万顆のしづくを眺めて日中の塵想を一掃したふと顧みると母はお座敷で佛壇のお掃除に餘念がない。あゝさうだ忘れもせぬ明日は私の四つ年上の兄樣のお命日である兄樣は父が

病死して間もなく風邪にかゝり足がだるい〳〵といつて今日の様な蒸暑い十五年前の明日歸らぬ旅路に赴いたのであつた。それで私の家からは一週間經つか經たぬに二つの棺が出たわけですその時の母の心はどんなでしたらう私はまだ二歳でどちらの顏も知りませんが時々父の愛とは、どんなものか兄上の親切とはどんなものであらうかと私と同年輩の人々が父につれられて旅行したとか兄上からこんなものを貰うたといふやうなことを聞くたびに何時も十五年前の悲劇に想ひ到つて人知れぬ袖を絞るのであつた今しも母は佛壇を掃除してをらるゝが定めし亡き父の事やら兄の事など想起して千万無量の悲みを繰返して居られるのであらうと聲張上げて泣きもしたいやうであつた。

漸く我に返つて頭を擡げると前栽の水滴も大方止んで所々の葉末に水晶を碎いたやうな玉がキラ〳〵と光つて居つた。

八月廿四日　一甲　岡崎和子

旅行日誌の一節

夜の須磨明石の海岸の景色を見ようと務めて起きてゐたが神戸を少し過ぎると眠りについて惜しいことには夜景を見ることが出來なかつた五ッ六ッの電氣を取卷いてゐた二三百匹の蚊は御馳走さまといはんばかりにお客の血を吸ひ出した私は足の血を吸はれて大きなコブが出來た長い道は夢の間に過ぎ岡山で夜が明けた此處から一時間で鵜方へ着いた各々手荷物を提げて下車し車にて伯母さんの家へ八時頃着いた一同に御挨拶をし色々變つたお話をしてゐたすると十一時過ぎお父様と妹がお迎に來て下さつたので池のそばにある大きな松の下で紀念としてお父様に寫眞を寫して戴いた。六時五臺の車に乘り一同のお方にお別をし停車場へと急いだ間も無くして來る下りの滊車に乘り懷しい我が家に歸つた門口へ車が着く時からお土産お土産と呼ぶ妹や弟にお土産を渡して共に喜こんだ緣先でお母様と見物話をしてゐたら千光寺の鐘が十一時を知らせたのでそれを合圖に床を敷き兄弟枕を並べて寢た

八月三十一日　二乙　岩井清子

妹と共に樂しく迎へた此の四十日間の長い樣な短い樣なお休みも早夢の間に過ぎ去つて今日が愈々最終

の日となりました。私は熟々と考へて見て『お休みもう今日限り』と思つた時は何となく悲しくなつて來ました。

母樣や妹など〻お日樣の未だ上らない頃に起きて、そよ吹く風に袂をなぶらせ乍ら巡航船で岩子島へ渡つて鏡の樣に澄み切つた海水を浴びたり、又は炎熱燬くが如き眞晝頃を妹と二人麥稈帽を被つて素足のまんま暑さもかまはぢ白砂の上を走りまはつた時の愉快さは思ふても胸の血が湧き立ちます。あるは朝顏のために早起して母樣と共に朝露踏んで山波の端までぶら〳〵歩きをした時、あるは風鈴の音がチリン〳〵と鳴り出す頃涼しい浴衣に着換へて涼臺に腰打掛けて知らず識らず音樂を口ずさんだりした時、あゝ此等の樂しさ愉快さは夢と消えた四十日けれども又一方には長い間懷しい師の君や親しい友垣にお別れしてから少しもお目に掛らなかつたのが明日になれば皆樣の嬉しき頬笑のお顏を拜する事が出來ると思ふと却て嬉しくもなつて來ます、

まづ午前中はお休の間一度も出さなかつた靴を磨き上げました。おゝ嬉しや此の靴は學びの庭でゆつたりとした軟い風の音づれる秋日和に爽快な面白いツットボールをけるのです。

午后は休暇中の宿題の檢べや明日の仕度などに費しました。あゝ明日を待つ時刻は刻一刻と迫つて來ました。折しも喧しい蟬の鳴聲はぴつたり歇んで軒の柳に夕　の影が浮びました。何處の家でも打水をして居らつしやいます。チ……といふ雀の塒へ急ぐ聲も聞えます。私の今夜の夢見はどんなでありませう

冬季休業日誌の中より

十二月二十五日　　三乙　國近ヒデノ

墓詣り

心づくしの水仙を手向けんものと、朝餉の後いそぎ墓詣りの支度に取りかゝりぬ。

あへぎあへぎ、坂道を一丁余も上れば、尙うら新しき、なつかしき祖母の墳墓あり。香煙すでに絶えて空しく花筒のみぞ獨り、いと淋し氣に立てられける生前いたく好まれし花なれば、うや〳〵しく捧げさて、靈前にぬかづけば、ありし過去の事ども轉た思ひ偲ばれ、萬感胸に追り追憶の情しきりにて無限の暗涙にむせび入りぬ。生者必滅作用あれば反動ある

を知らざるにはよも非ざるなれど。あはれ人生は夢か、現か幻か。彼の非情の草木だにも天地消長の氣運をまぬがる能はざるをや、然もあるべき。

我常に祖母の身まかりしは昨日の如く覺ゆるに數ふれば早七十有余日を過ごせるかな、花は散り月は欠ぐとも又來ん春もあるべきを、たらちねの祖母は、梧葉と共に無情の風に誘れ、終に六十二の歷史を後に、永久にと歸らぬ黃泉の山を辿りき、あゝ蒼天無情。かくてこの地下そ幾千万年も眠り給ふか、覺め給はざるか。

温かき身を一邊の冷土にゆだねし我が祖母よ聞召せ我の現在は暗々たり、尙世に在せし古の幸福は夢見る事すらおぼつかなし、母は病床にあり、何を便りに生を欲せんや。

おゝ祖母よ、靈あらばこのまゝにて御許に我を導きて給へかし。

とやかくの思ひになやみ居る折しも木枯の風刃よりも强く身を刺しければ驚きて、名殘はつきねど再度の禮拜を終り、母故に家路を辿らんものと、踵をかへせど、何とやらん。後髮引かるゝ心地してなつかしくやさしき祖母の御聲するやう覺えたり。

十二月二十五日　　一甲　松本　榮

あはれな母校

お友達と連だつてなつかしい母校に成績を持つて行つた一學期に來た時とはまるで違つて教室等は影も形も見えないあはれな燒野となつて居る樣は言ふにも言はれぬ感じがした私はりれをじつと眺めて居たが先立つものは熱い涙であつた私等が卒業した時は何の事もなかつたに今の六年生の生徒はどんなに悲しいことであらう全体の生徒は皆自分の家を失つたと同樣であらう今まで大切にして居た草木はかはいさうに赤くなつて枯れて居る見れば見る程悲しくなつて胸がはりさけるやうであつた諸先生はくすぶり殘つて居るせまい小使室で生徒の通知簿をせいりして居られたが私等が行くと『まあよく來ましたねこんなあはれな姿になりましたけれども力をおとさないでしつかり勉强して三學期にはうんとよい成績を取り第三の學校の名譽をお上げなさい私等ばそれを一番たのしんで居ります』と私等に元氣をつけて下さつたものゝ先生はどんなに殘念がつて居られることであらうと思ふと私はきのどくでならなかつた先生は又言葉をつゞけられて『折角こられてもお茶を

差し上げる所もございませんまあ講堂で授業する所を見て下さいほんとにあはれなものですよ』と言つて連れて行つて下さつた見れば松の木でせまい講堂を四つにしきり一組の居る所は今までの教室の半分位しかない又隣りに一言物を言へばりれが他の組に聞えるのであるから生徒ば授業するのにどんなにげいて居るであらう又方々の學校へちらばつて勉強して居る生徒はどんなにかたみがせまがらうと私は色々頭にうかんだ一學期に來た時は學藝會を見せていたぶいたり種々面白いお話をしたりして居たが今は何となく悲しくなるばかりであつた『余り久しく居ては先生方がおせわしいのですから早く歸りませう』とおいとましてとぼ〳〵と家に歸つた。

十二月廿五日

髮　梳　　四甲　廣川　い　と

さら〳〵〳〵。綺麗な細い雪の降る凍り付く樣な寒い日。昨日の初雪から今日にかけての意外の寒さ。如何に力んで見ても我慢してもなまけ箱。例の年寄の友達と仲善しにならぎにはゐられない。此間から汚れた髮を洗ふのを横着してゐたので今日よい序に今來て居る髮結さんの弟子に梳いて貰ふ事にした。『さあ〳〵此處が明るいから早くいらつしやい。』とう〳〵出なきやあならない。『早くいらつしやい』なんてあんまり有難くもない。

ほんとに今日は冷い日だもの。私はしぶ〳〵慄へながら出てお母さんの立つた跡へ座つた。

『お寒う御座んなあ。』

如何にも冷たさうな赤い指した梳手の樂さんがいつた。——白いエプロンして年增のやうな銀杏返をして居た。やがてお樂さんは母の時と同じ樣に私の髮を解き出した。ポロリと額にかゝる湯の雫が冷えて冷たく流れるのを覺え乍らも私は此頃笑顔もしなくなつたお樂さんに何だか爛つたい樣な又懷かしい樣な氣まづい氣がして默り込んだ儘櫛やピンを弄んだ降る〳〵、風にあふられた細い雪が……私はふと鏡越しに樂さんの顏を見た。何といふ變り樣であらう？あの幼い面影は最う何處にも見られない。四年といふ年月人涙に揉れ〳〵て明ければ早一人前の髮結になる樂さんは母との老せた言葉遣にも四年の間錬え上げた腕にも、みんな私を驚かした。

即てらくさんは氣持よく梳き出した。私は四年前の

らくさんを思ひ出して居た。よく黒つぽい着物を着て小さい髷をほんの申譯の樣につけてゐる子だつたそして其處に居るやら居ないやら分らない樣な大人しい哀つぽい子――私はそんな事を思出し乍らまじ〳〵とおらくさんの顏を見た。この人でも嘗ては同じ教室で同じ空氣を吸つて來た人だつた。受持の三宅先生を優しい慈母の樣に慕つて來た人だつた。それだのに何うしてこんなにお互を隔てさせたのだらう？私は四年といふ時の力を感ぜない譯にはいかなかつた。

今まで雪の反射で冷い明るさを漂せてゐたのに又重くろしい不安な灰色に沈んでしまつた。火鉢の火が白い灰を殘して小さくなつて行く。私はその時樂さんに何だか物が言つて見たくなつた。『三宅先生にお會になりまして？』こんな事から聞いて見ようと思つた。一時に懷しい思出の多くが湧立つた。お會ひになりまして？が口まで出かけた時！其の時チラどいつもの顏とませた銀杏返しが映つた!!私はふつと默らされてしまつた。

けれどこの人だつて昔の大村さんだもの何とか言つても見たかつた。とう〳〵私は何氣なささうに『ひどくお寒い日ですね。』と言つて見た。うして出し抜けに、

『先生にお會ひになりまして？』ときいて見た。

『否えのう、あなた、まだ一遍も會ひませんが、先生に手紙を出すのに所書は防地でえゝんでごじやんせうか？へ、、、、字いふものを此頃書きつけやんせんけえなあ、あなた、へ、、、、』

お樂さんの聲が私にはおべつかの樣に聞えて厭な氣持が仕出した。私はもう何も言ひたく無くなつた。何かしら宛が外づれた樣で悲しくなつて來た。私にまでおべつかなんぞ言はなくつたつていゝだらうに私にはどうしても樂さんの氣が別らなかつた。毎日〳〵こんなにしてゐて全体どういふ氣でゐるんだらう？隨分この頃は冷たからうに。けれど樂さんも生ぎる爲に矢つ張尊い職業なのであらう、さういふ氣儘な横着な自分こそ憐れなのぢやなからうか？。かうした心と今もとの不快とがごつちやになつて梳かれて奇麗になつた頭の中で渦を卷いて居た。

こそ〳〵と樂さんは後仕舞して一つ二つおじぎして歸つてしまつた。ほか〳〵と飛んだ刺戟を受けた頭が燃えてゐた。くる〳〵少さく卷いて置いた。ぞく

〳〵と冷い風を衿元に覺え乍らも今もと襖に消えて行つたお樂さんと、そして足袋の上に穿いて居た鼠色のあの不快なカバーの色とが何時までも目にちらついて仕方がなかつた。
又雪が降り出した、小さい粉雪がちら〳〵と。

十二月二十七日　一乙　西原キヌ

多くの草花の枯れはてた冬の時節に、自然は雪の美觀を與へて私等の心目を一新します、花の美はたんに地上の一部でありますが、雪の美は天地を一つに包んだ壯觀であります雪を見て、喜ぶものは、犬の子だけではありません、『雪やこんこ』と歌ふ子供のみではありません、富人も薪炭に乏しい家の人もこの美景を賞めない者はありませんでせう、若し熱帶の人であつて此の一面銀世界である美觀に接する事が出來るならばどんなに驚きの眼を開いて賞めるでせうか。
昔支那の孫康といふ人は雪の光りで書物を讀み苦學をしたと云ひます、今暖かい着物を着電燈の光りで勉强することの出來る私等は孫康に比べて見て其有難さをよろこばなければなりません。

又雪は昔から詩、歌にも多く作られてゐます、白樂天の詩に『香爐峰の雪はすだれをかゝげて見る』といふ名高い句があります、昔一條天皇の皇后が雪の景色を御覽になる時『香爐峯の雪は如何』とおほせられました時おそばに侍つて居た清少納言はつと立つて簾をかゝげたといひます、清少納言は此の白樂天の詩を思ひ浮べたのであります。
明年の御歌會にも遠山の雪といふ御題さへ出て居ります、雪はまことに一点のけがれもなく清く美しいものであります、私等もつとめてこの雪のやうな人間になりたいものと思ひます。

十二月二十八日　一甲　大淵三枝

雪

昨日から降つて居た雪が、今朝起きて見ると一寸許りも積つて居ました。
うら淋しい冬枯れの木立ちも、其の中で獨り生々とした常磐木も、再び春の惠に浴した如く、一樣に銀の花をつけて、ヌツと高くそびえて居る、其の壯觀は、實に何とたとへてよいかわかりません。廣々とした田畑は、目に入る限り、一面の銀世界で、少し

づゝ延びて居た麥の若芽が、眞白の雪の間に〳〵チョコ〳〵と、綠色を見せて居るのはいじらしく、又可愛いらしいものであります。

雪は風流の上から申しましても、甚だ賞すべきものでありますが、又精神修養上から申しましても非常に善い敎訓を私共に與へて呉れます。其の小やみなく降り續いて、終りには一丈二丈の高きに至るといふのも元をたゞせば小さい唯一片の雪に外ならぬのであります。之は何事も根氣よくやれば、何時かの後にはきつと、成功するといふ意味を示し、其の色の飽くまで純白で氣高いといふのは、私共にこの樣な立派な心を持てよ、との天の神樣のおいひつけを傳へるものゝ樣に思はれます雪と言へば、すぐに思ひ出すのは、支那の孫康といふ人の事であります。此の人は雪の明りで一心に勉强したので遂には偉い學者になつたといふ事は私共のよく知つて居る事であります。私は何事をするにも此の人程の熱心を以て雪の心を手本として、立派な人物になり度いと思ひます。

十二月二十八日　第三學年乙　富安艶子

木枯にまじつて、さらさらと雨戸をたゝく微な音に暖い夢は破られ寒さにふるへながら、着物を着かへて窓を明れば、眞白い雪はヒラヒラと降りしきつて見渡す限り銀世界と變つて居る。近來にない吹雪ォウ寒ッ……と障子をかちやんと閉めて、又炬燵の中へもぐり込んで居ると、お臺所の方で寒さうなしわがれた聲で妹の聲が聞える。『ヒラヒラ散り來る白雪に、雪やこんこあられやもぐれ。』と、とんでもない歌を幾度となくくり返て歌つて居るのが聞えた。餘りのをかしさに、そつと行て見ると、コップの中へ雪を入れ其れにお砂糖をかけ、しきりに匙でまぜながら歌つて居たのである。ピスはどんな御馳走を下さるのかと思つて、尾を振り振り暖いいきを吹かしながら、一生懸命に眺めて居るのである。

ピスは私の來たのに氣が付いてか、俄にクンクンとあまえ出した。オオピス！餘り可愛かつたのでお菓子を投げてやると、知らぬ間にペロペロと皆食べてしまつた。雪は未だどんどんと降りしきり早や三寸も積つたかと思ふころ、八百屋の小僧が宅へ注文取りに來た。

私は其時『まあ寒いのにもかゝはらず』と思ふ同時に

雪の日やこれも
人の子たる拾ひ

と曾て學校で修身の時敎つた事が、我がむねにうかんだ。

私は此の丁稚を見て寸時も炬燵の中で、なまけて居る事が出來なくなつた。

十二月卅日　三乙　宮本綾子

一日一日と暮し行きて今は早や殘り少くなつた。今日は餅搗だといつて朝早くから騷いでゐる

一臼一臼搗き上げられるお餅のお母様や婆やの手で鏡餅になつたり小餅になつたりして片附けられる

『婆やは老年のくせに白粉つけて』とひやかせば『あらお嬢様お餅の粉ですよ』と眞顏でいひわけするをかしさ。私もお手傳しようと餅屋の切つて呉れた小餅を掌に乘せて丸めて見たがなか〳〵丸くならない

『まあ綾子さんのお餅の長い事』『あらお母様私丸くしようと思つてゐるの、長い事はありませんは』といへば『お嬢様お餅の長いのとは違ひますおひまがいるとおつしやるのです』と婆やがいふ私恥かしいやらをかしいやらで顏が眞赤になつたお母様も婆やもはては餅屋までがホホホハハハと大笑ひ、お父様は障子を張り終へて、もうお正月の支度も出來たと座敷ごしに門松を眺めてをられる。私はさつきの事を思い出して一人でクスクス笑へば婆やが見てこれもクスクス笑ふ。

脊戸では餅屋の打下す威勢のよいきねの音が絶えず聞えて暮れの氣分が滿ち〳〵て居る

十二月三十一日　晴　一甲　岡田カツヨ

兄の歸省

昨日呉の兄様から三十一日午後一時二十四分松永驛着列車で歸省すると云ふお手紙が來たので今日は朝から待ち遠しくて〳〵晝の御飯も碌々食べられないと云ふ有様。暇さへあれば東の方を見、車夫のみならず鈴の音さへ聞えれば外に飛び出して其のたひに姉様に笑はれるのである。二時過ぎやつと一臺の車が我が家の門前につけられた中からは水兵服の扮裝いかめしい兄様が出られた私が『兄様お歸り』と云へば如何にも滿足さうな笑顏を見せて『おゝと』返事をして下さつ、た此の時此の一瞬時私には眞の親

身の情と云ふものがしみじみ感じられた。互に父母兄弟一つ所に住んで居てこそ分らぬけれども、何の祟りか私のやうにまだ西と東の見分けもつかぬ二つと云ふ歳に御惠み厚い母を喪ひ父には海山遠く隔つた地に旅立たれ又多くも居ない兄弟は皆それ〴〵生計を立てんが爲に別れて居るので偶にかうして顔を合せばいひしれぬ懷しさを覺えるのであつた。私は姉様の呼ばれるまゝに奥の間にと案内した。そして其處の炬燵で、私等兄弟三人と祖父様祖母様などゝ積り積つた四方山のお話に耽つて居たが末には今津の姉様のことに移つた。兄様のお歸りがけに今晩か明日の朝行くと云はれたとのこと早くいらつしやればよいに。しばらくすると火ともし頃となつたこれから夕餉の膳に向ふと云ふ時待ちに待つた姉様が來られた。

やがて夕食も濟むと又埋火を圍んでの物語りに夜を更した。云ふ時に私は思ふのである。もし父が歸つて成長した私等を見られたならば、もし母が此の世にあつて兄弟四人打ち揃つて丈夫な顔を見られたならば、共にどんなにか喜ばれだらうに。又父母と共は暮したならば私等はどんなにか樂しいだらうにとあゝ思ふやうにはならぬ世の中である。

十二月三十一日　日曜、晴

四甲　和田波子

明るい内に明日の仕度がすつり出來たので早速お風呂に入りました。一番湯だからと思つて熱いのを我慢して眞赤になつてしまつた。今夜こそと一生懸命磨き立てる。よく烏の行水だつて言はれるので手や足もいつになく丁寧に洗つて出る。

それからお化粧に取蒐る。夜だから思切つて紅をさしてクリームを引き其上に粉を振つてお白粉をつけたら丁度よい加減になつて奇麗にのびた。

自分ながら常と違つた樣な氣がする。あとから一人で食事を濟してお姉樣がお風呂に入つてらつしやる間に着物を着換へた。傍で見て居らつしやるお隣りの叔母さんが『波さんなんか來年は十八になるんだもの肩上げ取つたつていゝわ』ねと言ふので默つて居ると『丸年(まるぢし)だもの』と附け加へた。

噫何といつても今年は暮れて仕舞ふ。ほんとに後もう數時間で十七にも別れなくつちやならない。何の爲に毎年々々生きて居るのだらう。われも望ある來

年が迫つて居るのならまだしも。更に期待の無い時と思へば噫一時間でも二時間でもキュッと握つて置きたい樣……けれど十代の內はいゝわねとお姉樣の言はれた言葉を思出しても見た。晝の內からどうしても買物に行くからなんて言つて居た妹はさつきから玄關で下駄の音ばかりさせて居る。丁度時計が八時を打ち始めた所へ下女の梅が嬉しさうについて來た三人は七五三飾りの門を潛つて橋を橫に曲つた師走の寒空には光り淡い星の二つ三つ雲間から下界を覗いてゐる。『明日は雨が降らねばよいが』

身も縮む樣な寒い風は惜氣もなく吹付ける。家々の軒には綠したゝる松の電灯の淡い光に照らされて來ん明日を待顏に吹く風に搖られ〳〵ながら寒さうに立つて居る。

やがて暗い小路を曲りまがつて町の通りへ出た。深く障子を占め切て居る內が多いが町だけあつて矢張外は騷々しい。通る〳〵。多くの人が行つたり來たり。皆明日の仕度に忙がしさう。

あの靑物屋つたら多くの人が出たり入つたり。小さい男の兒は今大きな風呂敷包を提げて靑物屋から出たが寒むさうな下駄の音を殘して闇の內に消えて仕舞ふ。向の下駄屋には大掃除が始まつて居る。二人の男が尻からげして一人が水を流せば一人の男が擦る。仲々忙しさうだ。

私等は兒玉で短冊を買ふ。勸商場の前で幼な馴染の雪ちやんに逢ふ。薄化粧して今結ひ立ての髮と見える桃割に赤い鹿の子の手がらが能く映る。學校に居た時小かつた人だが見違へるやうに大人らしくなつていらつしやる。

德光商店で妹やお姉樣の下駄を買つて中崎で新年の繪葉書を買ふ。今年は巳年でよいのがないといふ。勅題の『遠山雪』にした。

赤い紙を貼つてゐれに白地で『うどんそば』と書いてあるのが彼方の角にも此方の角にも見える。今晩は大晦日だもの、うどんやの大繁昌も無理は無い。大きな箱を提げた爺やが向ふの明るい家には入つたとガラ〳〵戸をしめる音がかすかに聞える。

私等はそれから手塚へ寄る。暫く待たされて居ると十一時が鳴つた。又中崎まで行つてノートやレターペーパを買つて歸路につく。梅やは澤山の買物に閉口してるらしい。

あちこちで戸を締る音がした。三人は曲り〳〵て急

いて家に歸つた。と千光寺の除夜の鐘が一……二……三……

あゝ明れば大正六年、戀しい十七にも別れなくてはならない。

歳暮の所感

四甲　福永千代子

オレンヂ色の夕日が薄れて西へ西へと走り行くと反對の方向から夜を閉す黑い幕が靜かに下りやうとして居る。あゝ斯うして今日も去つて仕舞うのです。どうとう今年の最後の光にも別れてしまひました。家々の前には綠色濃き門松が立ちて埋高くもられた白い砂の清きにも徒らお正月といふものが前近く歩んで來た事を思はせます。おゝお正月、我心には如何に強く響くでせう。私は机の前に坐つてじつと胸に手をあてゝ眼をつぶつた。あゝ私も今數時間でこの懷しい思出深い十七の歳を捨てゝしまはなくてはならない。捨て度くはないけれど十八――いやな年――私にはさう思はれてなりません。けれど偉大なる自然の力には到底勝つ事が出來ません。如何に泣悲しんだとて、思へばこの懷かしい十七といふ年をどうして暮したでせう。靜かに一年間を觀て果敢ない生を續けて來た自分のあきたらない姿を眺めた時私の兩の眼からは熱い涙が滲み出ました。何するともなく只罪の一年間、叛いた一年間、又別れの悲哀を一層よく味ひ得た痛手多い一年間でした。今年程澤山の人にお別れした年は生れてから未來は知らぞ過去に於ては決してありませんでした。一人一人と別れる内に年も暮れて我が周圍を見廻した時には遣る瀬ない淋しい感が我心を襲うて來ます。けれどそれよりも未だ〳〵悲しい事それは假令一分間でも一生涯の内の或る部分ですものを、殊に樂しみに希望に滿たねばならぬ十七の年を無意味に過した事です私は嘆かずには居られません。或雜誌に『醒めた歎き』といふ題下に『十七といふ長い年月、華やかな色彩と甘い歡樂にのみ醉はされて遂ぞ自己といふものを見る暇がなかつた彼女が不圖した動機で自分の歩んで來た道を顧みた時うれは樂しい愉快な思出の外に何の印象も無い無意味な年月であつたと知つた刹那彼女は耻かしさと口惜しさに涙も出なかつた』といふ事が有りました。私の今の心は此樣なのではないせうか。何だか私の事を言つてある樣に思はれてなりません。若し時といふ物が有情のものならう

の足許にひれふして、も少しお待ち下さいと哀願するものを。無情な時は少しもかまはぞに袖に縋つて居る私を振捨てゝこんなにしてゐる間にもずん〳〵行つて仕舞ひます。否々恨むのではない。此の長い年月、時は幾度か『爲せ』と言つて餘裕ある時を與へてくれたか知れないのに、それを私が使はなかつたのだ、又せんとして爲し得なかつた弱き心、皆この身から出た錆なので御座います。私の樣な者が世に二人としてありませうあ、ゝ堪らない〳〵。けれど〳〵如何に歎いたとて過ぎし者は再び歸らぬものを私等には未だ〳〵遠い行く手があるのです。其の道は奇麗な平たい何の苦も無い樣な道では有りません。困難は横はり誘惑は潜み我が進み行く道を妨けやうとして居ります。之を突拔いて行くには宗教の力、修養の力のみです。新玉の年と共に心も新しくして神樣のお前に出なければ、そして我が新生活といふものを生み出さなければなりません。斯く決心した私はすぐ神樣の御前に祈りました。過ぎし一年間の罪を懺悔し御許しを乞ひ來む年の我が行く手に常に主の御手の添ひ給はん事の爲に

『夕日は隱れて道は遙けし
行末如何にと思ひぞ煩らう
我主よ今宵も共に居まして
淋しきこの身をはぐゝみ給へ
斯くて定めの總てを神に任せつゝ何處までも行かんと祈りし後の我心にはいゝ知れぬ希望の光が輝いた

一月一日　四甲　平野あい

あつたかい床にうづめて居たからだを少し起して枕元の時計を見るとまだ早い樣ではあるが元日の朝から寢坊も出來まいと飛び起きる。冷い若水に口を清めて仰ぎ見る空は少し曇つて居る。

皆なそろつてお祝の膳に就く。皆の顏にはおさへ切れない喜の笑が見える。着物を改めて姿見の前に立つた時紅の漲ぎる頰の色、我にもあらでほゝゑまれる口元よ。私も十七になつたのだ。眞赤におこつた火のいけられた火鉢のそばで新聞を讀んで居る袴をさばく絹づれの音がして早や年始のお客樣。お母樣が出られる『明ましてお目出たうございます旧年中はいろ〳〵と』などゝ改まつた挨拶が聞える。次から次へと大層いそがしい『郵便』となげこまれた一束の年賀郵便の中から自分のだけより出す。優しく

書れた封書葉書とり〳〵に友情の濃い人々の情が身にしみて嬉しかつた。

夕方つかれたからだを炬燵に休める温いぬくみにさそはれて目をあけて居たのもいやな樣な氣がする。まはりに置いた新年の雜誌の金や赤のきはどい彩がなやましい。

あゝ靜かな元日だあたりは歌留多の聲も笑いさんざめく聲もなう、元日の夜は靜かに〳〵ふけて行く。

一月元旦晴天　　三乙　福島喜代子

一年の計は春にあり日々の計は元旦にあり。柱時計の五時半を告ぐる頃床を蹴起き清らかな若水で去年の塵風にふれた顏を殘りなく注いだ、手からは氣持よく湯氣がポー〳〵と立つて居る、今年こそはしそこねぬ樣にと髮もしつかりと結ひ上げた、雀は最う庭の木に來て千代八千代今年も相變らず幸あれかしと祈るらし、緣端の雨戸を押開らけばにつこと笑まれたお日樣はくだけさうな面を半分紫のウエールでおほつていらつしやる。部屋々々は恙なく掃除された、家内は新玉の年を迎へうれしろうにお膳に向つた、お餅はさも美味さうに皆んなのほゝをふくらせて居る、私は五つ戴いた。着物を着換へると昨日磨いたばかりのピカ〳〵の靴をはいて大いりきで學校に行つた。皆樣はみな〳〵うれしさうにお目出度うお目出度うとお辭儀していらつしやる。祝賀式がすむと飛ぶ樣にして家にかへつた。外はまりつき追羽子たこ上げ飛行器などで大賑ひである。私も今日は着物を着かへてこたつにあたつて居たおひる過ぎお文さんが呼びに來て下ださつたのでお向ひの雪江さんを誘つてお文さんとこに遊びに行つた。座敷の眞中に置かれだ圓火鉢はぺローリ〳〵と紅のほのほを上げて居る、十疊のお座敷には伯母さん從兄さん等文さん綾子さん雪江さん私がくるつと聞くなつて歌留多を初めた皆は一生懸命で自分の方を取られまいと目をグルグルさせて陣取つて居られる。急に向うで『大江山幾野の……』とトンキョーな聲で讀み上げたと思ふ一刹那隣にひかへてゐた文さんが『エッ有ました』と其のふだをピンと飛せた時は、あまりにおかしかつたので皆はドッと大笑ひした、私は其大きな聲に面喰つてハヽッ身ぶるいし目ばかりパチクリパチクリさせて居たので又皆んなはドッ大笑ひ目出度し目出度し。

一月二日　三甲　松本ヨシノ

東の窓に机をよせかけ今日をはじめの筆試みよう思ひ美しく洗ひ清めた筆と硯を持ち出して汲み來たばかりの新らしい水を注いだ私がやがて墨すり出せば金の蛇影はおどるばかりに海の上に浮んでほどなく美くしい墨色は出た春こそ心ののどかなるはまたとないものをわけて年のはじめに松影の下に筆走らすに何んとなう筆の運びもめでたくて常にかはらぬ字ではあるけれどどことなく自分にばかりはよく見えて小鳥のさへづる聲さへやさしくていとど心もすが〳〵しい

此の心持で今年の學びの道に入つたならばこれぞ學びの道の幸となるのであらうと自分で自分の心をはげまされたのである。

一月二日　三乙　高垣當子

今朝は早く起き皆書初をして居ます今年九才になる敏ちやんも一處にして居りました『姉さんこれでいゝの』と敏ちやんが筆を置いて今書いた字を私に見せました『さね此の字が拙いはかうするのよ』『あゝこれは』『それは良く出來てゝよ』『なんだい拙いや』今まで本を見てゐた忠雄さんはこちらを見てかう云ひました。『いゝわよ兄さんなんか口を出さなくつても』『何なまいきな僕などは此の字で甲をもらつたよ』『うそよこないだの御清書に二つしか二重丸が付いてゐなかつたわ』『馬鹿敏子あれは違ふよ』『はんとだわね姉さん』敏ちやんは私を味方に入れやうとする『馬鹿敏子の馬鹿打つぞ』すると奥で『忠雄さん』と母樣のお聲がしました『ハイ』忠雄さんが出た後で『いやな兄さん』と敏ちやんは其の後を見送りました。

一月四日　四甲　村上純子

春姉樣が出して下すつた新らしいライオンの口を開けた。肉色の粉をタップリと楊子と含ませて口に入れるとヒリ〳〵と氣持よい刺戟。

雞が二羽クク、、と鳴き乍ら庭の枯草の中を突いて居る。そして時々空を仰いで『コケッコー』と威勢よく鳴く。ぼんやりして齒をすつてゐるとびつくりさせられる。

ボンボン……聞き馴れぬ音で時計が七時を打つた。春姉樣は緣に立つて居らつしやる。

『滅切お痩せになつたなあ』と思ひ乍ら姉様の細い頸筋を見つめて居た。

ク、、物置の横の花椿が崩れる様にポタリと落ちた椿の花が落ちた。

知つて居るのは私一人である。廣い世界にお前の散つたのを知つてゐるのは私一人である。けれども永久に枝に歸らざるべく涙しながら人知れず散つて行く花もあるものを——

お前は何といふ幸福なものだらう……

雞が其の落ちた花を突ついてゐる。

紅い椿と雞冠の赤、冬枯れた淋しい庭に燃える様に赤く見える。

紅い椿の花！

赤い雞冠！

紅い可愛い色だと思ふ。

靜かな朝の空氣を破つて元氣のいゝ跳釣瓶の音が起つた。《重井の冬の朝》

一月五日　木曜日　晴天　四甲　岡野ユクエ

ポカ〳〵と暖い日が縁側にさし込んで居る雀も今日の様な日を幸にか畑の方でチユウ〳〵と鳴きながらゐさがしをして居る農夫等ものんきさうにほうかむり約して眞黑な仕事着をつけ如何にも輕げな身なりをして麥畑の中に立つて居るほんとに今日の様な日に仕事をするのが一番よ祖母様は日あたりのよいお座敷で目鏡ごしに孫の着物を縫ていらつしやる私もお側で何時から縫て居るか知れないしはだらけの着物を引ぞり出して縫初めたがものあきをする私はもう足がいたみ出していぢもぢしては糸を切つたり手を縫つたり其度にあいたあをしたりばにいらつしやる祖母様はほんとにやんちやなネ

いままで縁側で日なたぼつこして晝寢をして居た三毛は何の夢を見てかニヤンと一聲あけて向の屋根へとび上つた。

一月五日　二乙　吉井千代子

人待つ宵

夜は更けた。時計の針の進むにつれて騷々しい巷の叫び聲がなくなつて行く。書見に疲れた眼をそつとそらすと、身を切る様な笛の音が夜の寒空に一層冴えて、哀れにも清う〳〵流れて行く。ほんとうに靜かな晩だ。一人つぶやきつゝ。

寒風が時々障子に訪れてコト〳〵と音を立てる。笛の音はだん〳〵と遠ざかつて行く。

あゝ足音がして來た。お母樣のお歸りかしら……耳を聳てゝ聞いて居るとあらぬ人。あゝ遲い事。もう歸つて來られさうな物だと獨言いつて火鉢の灰を搔回して居るガチヤリ、勝手で大變な物音。驚愕しこわ〳〵飛んで行つて見ると何の事は無い。暫くそこいらを呆然見廻して居ると表に戸の明く音がしてお母樣のお歸り。戸の隙間から覗くと五日月は早や雲間に隱れて大空には星斗闌干。夜は靜かだ。遠くに辻占賣の聲が低う聞えて折から千光寺の十一時の鐘がゴーン。

德是北辰、椿葉之影再改、尊猶南面、
松花色十廻、

（期詠、德是）

學校彙報

◎日誌摘錄

（自大正五年六月至同六年五月）

○學校長歸校　五月廿三日より名古屋東京長野地方へ學事視察の爲め出張中なりし杉野校長は六月三日無事校歸せらる

附記　七日講堂にて生徒一同に視察狀況を校長より訓話あり。其の要旨に曰く、質素の點に就て當地東京長野と比較するに、長野は著しく質素にして女學生も袴は木綿を用ゐ、はだし足袋を穿ちて通學し居れり。當校の服裝は東京の諸學校と大差なし。東京が案外に質素なりと歎賞して止むべきか。それとも本校が割合に華奢なりとて相戒むべきか、諸子の熟慮を求む。次に體格に就ては本校は健康と整齊との度に於て中庸を得たるを喜ぶ。東京は概して上級生不活潑にして容姿正しきも弱き所あり。長野邊は至つて壯健なれども骨格整齊の點に於いて少しく物

足らぬ點あり。されど長野縣は一般に向學心頗る强く、各人皆特長を發揮するに力め居れり。山岳の研究博物の研究等特に進歩せり。從つて女學生もそれ〳〵研究題目を持ちて科外の研鑽を試みつゝある趣なり。盛なりと謂ふべし云々、

○早縫競爭　十七日擧行。成績表は昨年度追記發表せしを以て之を略す。

○龜山僧正講演　廿日午後三時講堂にて開會要旨別記

○圖書陳列會　廿四日第四學年は各自の作品を圖書室に陣列して職員生徒の觀覽に供す。

○地久節　廿五日午前八時半擧式

○早縫競爭成績披露式　仝日午前十時擧式。木曾靜子岩井清子繁村マツ花咲サカエに對し賞品賞狀の授與あり。

○第一學期終業式　七月廿日終業式擧行、

○阪本敎諭退職　阪本敎諭は奈加陀トロント大學に留學の爲め退職せらる。廿日附辭令交附、十九日送別茶話會を開く。

○第二學期始業式　九月一日始業式擧行

○市長新任挨拶　七日新市長向田幸藏氏巡視職員生徒に對し挨拶並に訓示あり。

○大蘇御着輦紀念式　十五日御着輦紀念式を第一時に擧行す。日清戰役の原因、當時の狀況、本縣の受けたる影響等につき訓話あり。

○戊申詔書捧讀式　十月十三日第一時講堂に於て擧式戊申詔書の御精神に付き訓話あり。

○御眞影拜戴式　皇后陛下御眞影廿七日午後三時三十四分驛御着。奉迎せる各學級代表者は前後二部隊に分れて供奉、〔御行列の次第前驅（吉野敎諭引卒）仝警官御眞影（校長奉持）三宅敎諭後驅（三次書記引卒）市の供奉者〕入御の後御眞影奉安の儀を了りて引き續き拜禮式を行ふ。

式次第左の如し

一、敬禮（樂器合圖）二、開扉　三、唱歌（君が代）四、職員生徒市供者順次奉拜　五、開扉　六、敬禮（樂器合圖）以上

○天長節祝日　卅一日第一時祝賀式擧行

○運動會　十一月一日午前八時四十分より運動開始午後四時終了。此日曇天にて稍寒かりしかど觀覽者各席に滿ち盛なりき。

○立太子禮祝賀式　三日午前八時三十分講堂に參集立太子禮祝賀式を擧ぐ。此の日亦快晴一點の雲なし昨年御即位禮當日天候俄に快晴となりしを想起して

天佑を保全し給ふ　皇祖の御榮えを畏み〳〵懷ふ次第嚴かに進みて唱歌《立太子禮奉祝歌》を終り、靜かに九時三十分を待つ。三分、二分、一分、宮中の御式も今、……侍臣の捧げ奉る壺切の太刀を陛下御親ら取上げ給ひけん。……畏しや皇太子殿下の凛々しき御瞳。……草莽の微臣等思を東の空に走せて御式の芽出度さ神々しさを各がじゝ想ひ廻らしつ。げにも尊き沈默かな。九時三十分聲を限りに萬歲を三唱し奉りて芽出度き今日の式を終りぬ。

○余興及旗行列　式後祝賀余興として足立蘆香氏の琵琶を聽きて一先解散午後一時本校を起点として旗行列《市内各小學校三年生以上及本校生徒全部》を行ふ。尾崎より海岸に出で御所に至り引き返して本町通りに出で長江に入りて再び本町通りに出で歸校解散す。

○八幡社參拜　十五日第三時八幡社大祭に付參拜す

○大元帥陛下奉送迎　大元帥陛下久留米地方に於ける大演習御統率の御事を了へさせられ御還幸の御途次十一月十七日午後零時十四分尾道驛御通過あらせらるるにつき職員生徒一同十時三十分出門驛に至りて奉送迎をなす。

○修學旅行　廿八日午後九時廿三分尾道驛發第四學年生《三宅三橋三木三教諭引卒》五十七名は修學旅行の爲め京阪、伊勢地方に向ふ。

○仝じく　廿九日午前七時十四分發列車にて第一二學年生は岡山へ、仝午前七時五十二分發列車にて第三學年生は宮島へ、それ〳〵修學旅行をなす。前者は午後五時二十分、後者は午后九時廿三分何れも當日無事歸着。

○第三尋常小學校兒童一部收容　廿九日より第五學年女兒五十余名を本校職員室を明けて之に收容する事とす。過般の火災の爲なり。

○第二學期終業式　十二月廿三日第二學期終業式を行ふ

○新年拜賀式、大正六年一月一日午前九時より新年拜賀式を行ふ。仝十時半より市民合同新年祝賀式を本校講堂にて擧行。

○第三學期始業式　八日第三學期始業式擧行。

○競點作文　廿四日午後第一時より競點作文を課す文題は三四年は『女のたなしみ』一二年は『姉と妹』なり。

○孝明天皇五十年祭遙拜式　三十日第一時限遙拜式

舉行。孝明天皇御偉德、和宮御事蹟を訓話あり。

○講演　二月八日午後一時より佐藤日天氏の白虎隊に關する講演を開く。

○紀元節拜賀式　十一日午前九時より紀元節拜賀式を行ふ。

○祈年祭參拜　十七日第四時より八幡神社並に良神社に於ける祈年祭に參拜す。

○競點作文披露式　廿一日午後第一時より競点作文披露式を行ふ。

入選者得點による各學年等級

等級	人員	得点	平均点	
一等	八	一三六九	八五、五六	第二學年
仝	八	一二八七	八〇、四一	第三學年
二等	八	一二七三	七九、五六	第一學年
仝	八	一二七〇	七九、三八	第四學年

優勝者成績

	得点會計	平均點	學級	
一等	一八八	九四	二乙	岸田　道惠
一等	一八五	九三	四甲	兒玉千賀子
二等	一八六	九三	二甲	今井　小園
二等	一八一	三九一	甲	高橋　楠子

○父兄懇話會　廿一日午後三時より第一學年父兄懇話會を開く。校長より

(1) 學校と家庭とは同心一体たるべき事

(2) 父母が直接監督者たる覺悟あるべき事

(3) 生徒を幼稚なるものと見誤らぬ事

(4) 學校教育は中等を標準としたる一齊教授なれば悪しく云へば「悧巧殺しの馬鹿いじめ」に陷る弊あり。故に低能なるもの及優良なるものに對してそれ〳〵個人的の注文のあるわけなれば主任と談合せられたし

との希望あり。各級主任及舍監は父兄と個人的に談合を遂げたり。

○澤田教諭告別式　三月六日晝食後講堂にて澤田教諭の告別式を行ふ。

○新卒業生母姉會　十六日卒業生卒業後の修養につきて母姉との懇話會をひらき裁縫琴生花等の教授所創設の計畫に付意見を交換す。

○進級式、送別會及び枝廣教諭告別式、十九日午前九時より進級式擧行。午後一時より卒業生送別會を開く。次に枝廣教諭退職の披露、挨拶あり。

○卒業式　廿二日午後一時より第六回卒業證書授與式を擧行す。卒業生七十三名、内褒賞授領者性行善良生六名、學力優等生八名、精勤生三名なり。

學校長告辭

四ヶ年前諸子が本校に入學せし當時既に卒業の今日あるは確定の事實に相違なきも多數來賓御臨席の下に卒業証書を受くるは諸子自らは勿論父母敎師も亦大に滿足し且祝賀せざるを得ず諸子今日あるは主として諸子自ら精勵勤學の結果に外ならざるも他に保護者指導ありしことを忘るべからず上朝廷の御高恩は言ふに及ばず父母兄姉が諸子を一人前に仕立てんして財産と心勞とを惜まず二六時中諸子が身邊を保護して呉れた御蔭である諸子は今日高等普通敎育を卒へ學術枝藝の一端を収得して社會から相當の尊敬を受くる身分になりしも諸子が母は全部諸子と同等の敬育を受けしもの幾人あるか諸子の位置が確定すればする丈父母の身の上に立ち反りて常に感謝の意を深くせざるべからず尙茲に一言せねばならぬのは市に對する謝恩である諸子が入學以來四ヶ年間市は毎年多大の經費を投じて本校を經營し諸子勉學上に何等不便を與へざる迄に力を盡して居る諸子の卒業は本校の設立に起因して居ること明なり本校は國家が義務的に設立を命せしものにあらず全く市の好意に依るものである世人往々此等公共團体に對する感謝を忘るゝもの多し相當敎育を受けし諸子は之の大恩をゆめゆめ忘るべからぞ

諸子の大多數は今回の卒業が學校敎育として生涯の終なり諸子在學中父母敎師は常に諸子の行動につき大小となく注意を與へ指導に盡せしも將來は全く社會の一員として自ら志し自ら行ふ立場として多少制裁はあるも示導は漸次減少するものである諸子宜しく細心の注意を拂ひ世人の笑を招くことなき樣心懸くべし

一般に女子は學業を終れば往々放恣に流れ徒に身邊の裝飾にのみ耽り毫も精神の修養に意を用ひざるもの多し爲に吾人が多年苦心敎養せし効果を徒に水泡に歸せしむるあるは嘆ずべきことなり業務の余暇には出來得る限り有益なる書を讀み識者の敎を乞ふて精神の向上を圖る樣努力せられんことを最後の分れに際して聊か諸子將來に於ける希望を述ぶ

三澤視學官告辭大要

諸子の本日あるは眞に光榮にして、慶賀に堪えぞ。此は獨り諸子の先生及父兄の滿悅とする所なるのみならず、社會も亦諸子の今日あるを慶賀し居るなり

然れども社會は直接諸子に對して賀辭を述ぶとの謂にあらず。社會が諸子を高等普通教育を受けたる淑女として尊敬し、諸子に相當の職業を與へ、地位を與ふるは即ち社會が諸子を歡迎するの方法なり。然れども社會は諸子を女學校卒業生として歡迎する一方、嚴正なる批評眼を以て諸子を監視しつゝある事を記憶し居らざるべからず。社會は教師の如く將父兄の如く諸子を指導し、叱り又は教ゆることなし。一度過あらば毫も假借する所なく諸子を擲り去るべし、故に諸子は日常の教訓を思ひ、諸般の智識技能の練磨修養を怠るべからず。諸子は社會を知らず。是れ余が『社會は親切なれども峻嚴なり』と告げて深く諸子の不斷の努力を要求する所以なり。

告辞

卒業生諸子　諸子は多年本校に在りて螢雪の功を積みたるの結果今や全く其の業を卒へ本日を以て卒業の榮譽を擔はる寔に慶賀の至りなり夫れ女子の天職は妻たると母たるとに在りて其業固より容易ならず殊に子女を教養する最も難しとなす然れとも諸子は既に女子として必要なる途を學ひ其智能を備へたり切に望むらくは日常學修したる本校の教訓を心として倚研鑽を重ね他日家庭の主婦となるの日は眞に良妻賢母たるに耻ちざるの決心を以て其實務に盡し內助の功を全ふすると共に一朝國家有事に際しては吾國特有の德性に背かざる限りは克く男子に代りて社界に盡すの勇氣を具ふる等又常に適切の修養を積まれんことを是を以て告辭となす

大正六年三月二十二日

尾道市長從五位勳四等　向田幸藏

答辞

桃花既に紅を潮して春光地に敷く　此好佳節を卜して本校第六回卒業生の爲めに　朝野貴賓の來臨を辱うし　茲に光榮ある卒業證書を下し賜はる　加之今又監督官　市長を始め　校長先生より極めて御懇篤なる訓示を賜はる　我等の面目　何物か之に過ぐべき　我等が本校に入學せし時を顧みれば　ちの多く僅かに尋常小學校の課程を修了せしに止まり　未だ女の道の何たるをも解せざりき　斯かる覺束なき身を以て　本校に業を受くることゝに四年　厚き師の君の御慈しみによりて　幸に本日あるを致しゝな

り　嗚呼　此の恩　何を以てか報い奉るべき
時勢は年と共に進み　今や一般社會が婦人に求むるもの　稍々異なる所あらんとす　我等　尙　學淺く德至らざる身を以て　此の社會觸目の衝に當らんとす　我等の責任いと輕からざるを覺ゆ
希くは　爾今　益々畏き勅語の大御旨を仰ぎ奉り師の君日常の敎訓を心に銘し　特に本日賜はりたる敎訓は　日夕之を服膺して婦道の本分を守り　以て御高恩の萬が一にも報い奉らんとす　謹しみて答へ奉る

大正六年三月二十二日

尾道市立高等女學校第六回卒業生總代

村上純子

大正五年度學事報告　《大正六年三月》

本年卒業するものは大正二年四月入學せしものにて入學當時九十八名なり其後退學轉學の爲今回七十三名卒業することになれり此の七十三名中市內小學校を卒業せしもの三十三名にして他四十名は市外小學校の卒業者なり卒業者の健康狀態は在學四ヶ年間を通じ概して良好なり身長及體重の變化は大要一覽表に示せし如く身長は平均約五尺にして過去の婦人に較べて先づ高き方なり七十三名中母親より高きもの約三分の二あり是等は人種改良上大に悅ぶべき徵候にして小學時代より今日に至る學校敎育に體育を重せし結果と思はる規律的敎育は自然の發育を助長せしむること無論言をふ待たざるも大部分は矯正の結果と思はる余が是れ迄の調査に依れば父母兩人の內母親の高きが父親の高きよりも丈高き子供を產む樣に考へらる然れば我國人種改良の一としては女子の體格を作り且偉大ならしむるが一層肝要と思はる。
体重は平均約十二貫七百あり四ヶ年間約三貫五百の增加なり體力維持につきては一時的運動に對し疲勞の程度は初年級より上級になるに從ひ却て增加する樣なるも體力持續につきては初年級時代よりは殆んど二倍の維持力を有する樣に思はる學業成績につきては本年度の卒業生は從來の卒業者の如く平均的にあらず力に高下を來せり昨年は優等者五名なりしが本年は八名あり三名の增加なり然るに昨年は六十点代のもの一名もなかりしが本年は六名あり斯く學力に優劣の差を生せしは一昨年來隨意科の志望に依り自然組分けに變化を來たせし結果なるかと思はる卒

業生性行につきては前年度と別に異なる点なきも時代の變遷校風の影況及家庭の注意等により自己の價値を知り自己の責任を感ずるもの稍々其數を增せし如く思はる

本市が今回の卒業生を四ヶ年間養成せし經常費は一名に付平均約三十五圓なり

○第三學期終業式　廿四日本學年の終業式を行ひ新學年に於ける教室並に組別を發表す

○入學試驗　四月四日午前八時より入學試驗を行ふ

○入學式　七日午前八時半より入學式擧行

○新任披露　九日秋山幹、小野增野両氏新任披露あり

○第一學期始業式　九日始業式擧行、正副長左の如く任命

甲一兒玉　光子　柳父　コトヒ一梶山　里子　矢野シヅコ
甲二岡田カツヨ　葛西　壽香　ヒ二吉田サワ子　杉谷加津子
甲三藤井喜代子　今井　小園　ヒ三天野　和子　岸田　道惠
甲四岩崎　照子　和田イキヨ　ヒ四村上　文代　國近ヒデノ

○昭憲皇太后三年祭遙拜式　十一日午前八時より式を擧ぐ

○体格檢査　十二日開始二十一日終了其結果別表の如し

○開校紀念式　二十日午前八時より講堂に於て開校紀念式を擧ぐ、創立當時の狀況(一)其後の經過(二)將來の覺悟(三)の三項に亘りて訓告あり、余興として若山氏のお伽噺『石の上にも三年』をきく

○遠足　二十四日快晴なれども風稍強し、豫定の如く午前八時全員西御所に集合、鳴瀧山に向つて遠足す、吉和村端れの三叉路より右折し山畑の細道を縫ひて登る。眼界は一歩より一歩と開け行きて島々の眺め得も云はれず鳴瀧古城趾にて晝食眺望最も佳なり。其れより熊野權現社及八ッギ池に登りて歸途につき午後三時頃西御所にて解散す。

○飛行觀覽　五月五日鳥人スミス氏の飛行を見んとて福山に全校の旅行を企つ。午前八時半驛に集合、九時二分發、仝五十分福山驛着。練兵場にてスミス氏の輕妙なる飛行に感歎止まず。福山高等女學校にて晝食後、工業試驗場、福山博覽會見物、公園にて自由散歩、午後五時三十二分福山發、仝六時廿八分尾道驛着解散

○聯合遠足　十七日高須公園に向ひて四年級と二年級との聯合遠足を試む

○仝　廿四日向島越々濱に三年一年の聯合遠足をなす
○海軍記念式　廿七日日曜なれども午前十時參集式を擧げ校長の詔書奉讀に續きて三宅教諭の日本海海戰に關する講話あり

◎朝會訓話抄

○『忙しくて隙がない』と云ふ言葉はよくお互に使ふ言葉だ。何かの申譯には誠に重寶な言葉で……つい隙がないので御無沙汰致しまして……などゝよく云ふ。考へて見ると大間違の言である。ほんとうに隙がないと云ひ得べき日は一年の中極めて僅少なものである。大抵仕事を手早く片付ければ隙が出來る仕事の少い時はどうしても氣がユックリするから、やはり一日中働きつめてゐて相當忙しかつたやうでそして仕事はと云ふと少ししかしてゐない。テキハキと片付けて隙をこしらへるのに上手な人とならなければならぬ。

○アワテ者は身体先づ動きて心働かず。故になすこと悉く齟齬す。心先づ敏活に働きて後手足之に伴はざるべからぞ。先日某所に於て階下に火事あり。二階に寢ね居たるもの驚き騷ぎて、梯子段をすべり落ち火中に入りて燒死せるものあり。蓋しアワテたるなり。伊賀越の仇討に於て荒木又右衛門櫻井某と戰ふ。一は二刀流の達人。一は長刀の妙手なり。荒木の打つた太刀に櫻井長刀をすてゝ倒る。見物人の中より聲あり『ソレ其處だッ』と。荒木動かず、『立てー尋常に勝負せよ』と櫻井長刀を拾ひ立たんとす荒木一刀横に拂つて之を斃す。初め櫻井の倒れしは荒木に油斷をさせて逆まに荒木を斬らんとの詭計なりし也。荒木若し敵の倒れたるに乘じて踏み込まんか。勝敗忽にして地を替へしなりき。荒木の沈勇を說かんとて作りたる狂言綺語なりと雖ども亦取て以て戒となすべきなり。

○誘惑の恐るべく警むべきは既に屢々之を說けり。爲に諸子が戰々競々として、呉服物雜貨品を憚り、若き男子は之を恐れて避けまどふならば、此は大なる誤なり。恐るべきは物品にあらず、人に非らず、唯己の心にあり。心中に一點の守る所あらば決して何物も得て之を奪ふべきにあらざるなり。

○腹を奇麗にせよ。忠言の耳にさかふは腹がキタナキなり。腹を大きくせよ。些細なことに動搖するは

腹が小さきなり。

○昨日一人の子供誘拐せられしが、多度津にて警官に取り抑へられ、夕方送り返されたり。誘拐の手段は誠に巧妙にして、其の子供を船に誘ひし者（十五六の子供なりしといふ）は多度津行の船には居らず恐らくは尾道出港間際に上陸せし者なるべし。而して船中には他の同志ありて子供が上陸の際巧に再び欺きて連れ行く手筈なりしと思はる。故に警察にては誘拐者と認むべきものを見出だす能はざりしといふ。手段の巧妙なる慄然として恐るべきなり。

○昨飛行を見る諸子の所感いかにぞや。唯目のみ之を視、頭に響く所なかりしならば、吾甚だ之を遺憾とす。飄々として千米突以上の高空に天翔ける飛行將校の心中を思へば、吾人感慨無量なるものあり。就中彼等の信念に對して多大の敬意を表せざるを得ぎ。若し自己の技能に信頼し。飛行機の安全を信ぎるにあらずんば一刻も安じて機上の人たる能はざるべし。信じて之を行へば鬼神も之を避くとか、信念の偉大を示し呉れたる飛行將校に多謝す。

○羅漢は佛道修業中の人である。それで皆六ヶしい顔をしてゐるのは與へられた問題を考へてゐるからだ、そうです。反之大悟徹底せられた佛さまは誠に圓滿な姿形をしてゐられる。あなた方は學問界の羅漢だからして目を張り耳を聳てゝゐなければならぬ序に羅漢廻はしと云ふ遊戯は佛から與へられた問題を廻はして一所懸命に考へる所から起つたものです

○どこかの別莊へ運ぶものと見えて松と柳と二車。狹い小路を多勢かかつてひいて行く。枝が左右に閊えて通れない。仕方がないから枝を矯めて柳は都合よく通りぬけたが、松はボキリと枝が折れた。折角のよい技ぶりが折れたので松の値打を台なしにしてしまつた。人も地位性質につれて辛抱する、又は辛抱し得る程度に相違があらう。松の人に辛抱を強ゐてボキリとやつては無意味のことだ。人から見下げられる程の辛抱するのはよく〳〵の場合で殊に場合によつては死んでも讓らぬ『意氣地』がほしい。

○高富正七氏は忠僕として廣島縣から表彰せられた氏は幼にして某家に事へ、孜々として主家の業務を助けられた。後別家するに及んで家運頗る隆昌となるに引きかへ、舊主家は商運拙く屢々倒産に瀕す。氏は其の都度之を救はれたが遂に支へる事が出來なかつた。而かも尙ほ氏は之を捨てず、旧主の子を養

ひて旧主家の再興を計つて居られるといふことである。恩を思ふことの厚き、蓋し氏の如きは稀なりと云はねばならぬ。曩に本市より表彰せられ今亦此の事のあるのは誠に偶然ではない。吾々は其の忠實の念につきて深く學ぶ所がなくてはならぬ。

○朝鮮は獨立して列國と伍すること能はず。遂に我國の保護の下に人民の安寧を保ち得る事となり居れり。諸子は思を潛めて其の由來を熟考せざるべからぞ。我國は朝鮮が確立せざれば所謂『唇破れて齒寒き』を思ひ、熱心親切に內政の改革をすゝめ忠告止む時なかりき。然るに彼は蜜の如き甘言を弄する野心ある大國を妄信して遂に併呑せらるゝを悟らず、譬へば毒饅頭の甘きに醉ひて其の毒の全身に廻はるを知らざるが如かりき。是れ今日ある所以なりとす諸子個人の關係に於ても如是の事あるを思はざるべからず。良言は苦し常に耳にさかう。甘言は蜜の如し墮落に導かれつゝ之を覺らざる事多し。恐れて愼まざるべけんや

○向島遠足の歸りに渡船に乘るに、先を爭ふて一艘の船に多過ぎる程生徒が乘つた。其の爲に船の底がつかへて動かない。そこで半分は下りよと命じたが中々下りない。僅に十五六名は下りて向岸から戻つて來る他の一艘を待つて之に乘つた。然るに乘手がまだ〳〵多過ぎるから前の船は船頭が努力しても出ない。辛じて出した頃には謙遜にして柔順なる十五六名のものを乘せた後の船が船足が輕いのでサッサと追ひ付き却てお先きへ失敬して仕まつた。

○熊谷校僕は中風症の養母あり長く孝養を盡しつゝあり。彼の妻亦頗る孝貞にして近隣の褒められ者なりしが不幸病を得て沒しぬ。爾來熊谷は無妻にて幼兒を哺育し老母を看病し居りしが、今、又、幼兒の一人が死に瀕す。重ね〳〵の不幸眞に同情に堪えぞ昨日諸子の見舞金を受けたる時、彼等は感涙に咽びぬ。中にも病み衰へたる病兒は淋しき笑をさへ湛えて喜びきといふ。諸子のなしたる善は決して小ならず。

『ヤ、蓬萊山にはや、千歲經るや、萬歲千秋重なれり、ムヤ、松の林には鶴巢くひ、巖のそばにはや、龜遊ぶ』　（鄙曲、蓬萊山）

現在職員

《大正五年五月》

出身學校	受持學科	擔任事務	職名	就職年月日	族籍	氏名
東京高等師範學校	修身教育		校長兼教諭	大正二年十月四日	愛知平	杉野三治郎
仝 上	地理歷史	教務主任	教諭	明治四十三年三月卅一日	兵庫平	三宅素
仝 上	理科地理數學	教務	仝	大正六年四月七日	茨城士	秋山幹
試驗檢定	國語	學級主任	仝	大正三年四月十六日	靜岡士	三橋六治郎
仝 上	仝	仝	仝	大正四年六月十七日	福島平	森要人
東京美術學校師範科	圖畫習字	仝	仝	明治四十五年四月九日	茨城士	大河內定雄
日本体育會体操學校	体操	仝	仝	明治四十五年三月三十一日	埼玉平	吉野賢司
津田英學塾	英語	仝	仝	大正五年九月二十一日	群馬平	高橋みゆき
京都府立第一高等女學校專攻科	裁縫家事		仝	大正六年四月七日	岡山平	小野增野
東京音樂學校師範科	音樂	學級主任	仝	大正四年十月卅一日	仝	內藤谷
共立女子職業學校高等師範科	裁縫手藝	會監	仝	大正五年三月卅一日	廣島平	尸野廣キヲヨ
第六臨時教員養成所	裁縫家事	仝	仝	大正四年四月六日	千葉平	三木多可
廣島尋常師範學校	作法家事	仝	助教諭	明治四十二年三月卅一日	廣島平	岡田タヅ
物理學校	數學理科	學級主任	教師	大正五年十一月十五日	仝	平賀瑞夫
東京和洋裁縫女學校	裁縫		仝	大正三年一月廿二日	廣島士	四田テル
		庶務會計	書記	大正二年二月廿八日	仝	三次隆次

商業教員養成所	商業		囑託教師	明治四十四年四月六日	山口士	河地大輔
	挿花點茶		同	大正二年三月十七日	廣島平	森信常一
東京大學醫學部別科			校醫	明治四十五年五月二日	廣島士	和三郎

生徒原籍郡市別

《大正六年五月末調》

郡市別 ＼ 第年別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
尾道市	四六	四四	四六	三一	一六七
福山市	一	一	〇	〇	二
御調郡	二二	二〇	二七	一三	八二
沼隈郡	一四	一三	一一	六	四四
芦品郡	二	二	〇	〇	四
深安郡	四	二	一		七
世羅郡	一	二	〇	一	四
甲双郡	〇	〇	〇	〇	〇
豐田郡	二	二	〇	〇	四
加茂郡	一	〇	〇	〇	一

佐伯郡	一	〇	〇	〇
比婆郡	一	〇	〇	〇
他府縣	五	五	四	八
計	一〇〇	九一	八九	五九

	一	〇	〇	〇
	一	〇	〇	〇
	二二	一	一	〇
	三三九	二	八	二八

父兄職業別《仝上》

職業別／學年別	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
農業	二四	一七	一四	一〇	六五
商業	五〇	四三	三二	二三	一四八
工業	一	五	六	〇	一二
雜業	四	八	一二	一三	三七
官公吏	一	二	七	四	一四
教員	三	一	四	〇	八
會社員	五	五	二	七	一九
神官僧侶	二	二	二	二	八
其他	一〇	八	一〇	〇	二八
合計	一〇〇	九一	八九	五九	三三九

雜報

教員室だより

日本の女子はモットしつかりしなくてはいけませんネ。從來のやうに學問がなくては駄目ですよ。などゝ盛に氣餒を吐いて居られた阪本花代先生は、とう〳〵御理想を實行なさる機會が降つて來て、今は英領カナダのトロント大學で家政科を研究して居られます。隨分度々御消息に預ります。試驗は四月一杯に濟んで五月一日から九月までお休だそうです。日本の女子學生と云ふので、非常に珍らしがられていらつしやることゝ思ひます。長い休暇は男學生は軍需品製造所に働き、女子は農園に働き、軍國奉公の一端を盡すさうであります。先生は大音樂會や學校參觀や旅行で、まあ〳〵〳〵の連發に從事してゐらるゝことゝ想像しています、先生は近頃よく太つて西洋風に髪を結ふて無論洋服で、ニコ〳〵顏の御寫

眞を拜見しますと天晴西洋人にヒケを取らない御容姿と心强く感じます。

澤田先生は又、とんでもない處へ飛んで行かれました。椰子の樹蔭に猿戯るゝ北ボルネヲはサンダカンの町端れ獵銃肩に專ら身體を鍛へつゝ、椰子林經營の準備中。イヤモウえらい御元氣。

お氣の毒なのは井上先生です、御病氣御快癒を乍蔭祈つてゐます。

新任の先生には小野增野先生、京都第一高女專攻科御出身で枝廣先生の後任。それから井上先生の後任が平賀瑞夫先生で物理學校御出身。東京の高師御出身の秋山幹先生は澤田先生の後を受持つてゐられます。

あとは卒業生大多數の古いおなじみの先生方ばかりどうも先生方がお替りになつてしまつて、學校へ行きたくても、つい億刼になります。と古い卒業生がおつしやる。一應御尤もでありますが、そう云つて寄り付いて下さらないときまりますと、トンとお話になりませぬ。矢張りお出で下さつて新しい先生とおなじみになつて戴きたいと思ひます。

そう云へばも少し先生方の噂を書いて見ませうか、

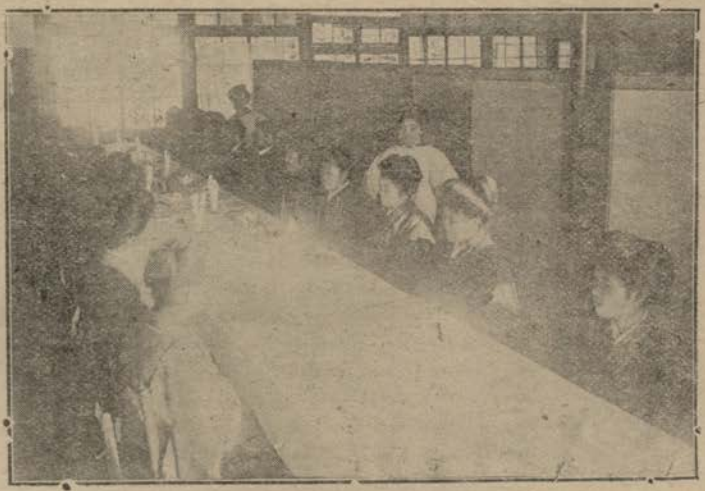
校長先生は不相變西御所から御通勤。『チット遊びにお出で』……『遠いから億刼です。』『なんだ僕は毎日通つてるぢやないか。まあいゝそんなら車に乘つておいで』『車賃は？』『そつちで拂ひなさい。』大河内先生は大正六年四月廿八日といふ日に芽出度御結婚連理の契り濃かに媒介人の校長さん吉野さん大安心だろうで御座います。茲に又日曜其他機會さへあれば子供を連れて歩く子煩腦の先生が三人あります。曰く、森先生、吉野先生、三宅先生、『りんなに云ふことを聞かないと大學校へやらないぞ』と云ふと大低ならおとなしくなるのが、森先生の顯さん。中々有望な腕白者。『どうも間さへあれば手工をやつてるから工業學校へでも入れようか』と云ふのが吉野先生の等さん。『どうもウチの子供は氣が弱くていかん次男坊はさうでもないようだがネ』此七月が誕生で名は邦彦』まあいゝ、人種改良學を應用して四代目には大臣大將を出すつもりサ』と恐ろしく氣の長いことを云つてらつしやるが三宅先生。おあとの方々は次號にて。是も氣の長い話です。

理科室より

別に御知らせする程の事もないが、唯、日頃嘻しく思つて居る事は、この室へ入つて來るどのクラスも、どのクラスも活氣充滿、眞面目に熱心に研究して倦む時を知らぬ事であります。

此度解剖皿が調ひ、其上できれいにいろ〳〵の動物植物を實驗觀察する事が出來るやうになりました。

此間中から二年級が養蚕——大げさに聞えるが實は七十匹許の——をして居ましたが、漸く美しく愛らしい繭を結んだので、皆々大喜びであります。



割烹室より

或雜誌に、家庭料理中廢物利用を巧にすると云ふ事が、目下我國に於ける、主婦たる者の、急務であると御座いました。それでと云ふわけでも御座いませんが。實地に行はれました、方のお話を御紹介致します。

野菜の湯出汁を『だしに』

キャベッ。馬鈴薯等、『他の野菜は未だ試み不申』の湯出汁にて、味噌汁をたてますと、鰹節を入れなくても味がよろしう御座います。

煎茶のかすを『ひたし』に

上茶の一通り用ひたるを、尙よく煎じ又水にさらして充分澁味を拔き水をきりて醬油をかけて食す、と風味がよろしい。

小海老の頭を『清汁』に

小海老の頭のやうにそのまゝでは口にたち殊に小供

等には一層危險であると云ふ、樣なものを集めておき之を擂鉢に入れ擂木で叩きつぶし適宜にこれを入れ《多すぎるやう》尙よくすりつぶす樣にして笊で濾しますと肉は全部水に交つてどろ〳〵した汁になります之をそのまゝ鍋に入れ火にかけますと、煮たつと共に肉はかたまり、汁はすみ丁度おぼろ吸物のやうになります、此時適宜に醬油をさし鍋をおろして春菊等の靑味を入れるとよろしう御座います。

寄宿舍の窓より

窓のポプラがやうやく淡いみどりの芽を吹き出した時分に可愛一年生の姿は見られる樣になりました。始めの內はお家なつかしゆにその方を偲んでは露を宿して居る事もございましたがおい〳〵と皆樣方の情になぐさめられたり又寄宿舍の事にも通じたりして樂しい其の日〳〵を送つて行く樣になりました夕食後の散步にも始めの樣に恥しそうな事もなく皆んなで面白く遊ぶやうになりました、

年々と入舍を希望する人がふへるので室はだん〳〵と狹く今年はとてもこれを續けて行く事が出來かねますので何とかして少しでも皆んなの爲にとの母樣の樣な舍監の先生や校長先生御心盡しで丁度アカシヤの眞白い花が咲く頃でございましたらう二つにしきられて居た舍監室がこわされて一室となりました

先生には御氣毒にも其の修繕中病室へおひきこし下さいまして應接室が二つにしきられ舍監室になりまして此所に御入りになる樣になりました

ほんとに私等は都合よくなりました

とは云へ先生は小さな所で御辛抱下さいまして誠に

御氣毒でございます

お琴の時にもちひられて居つた應接室が彼樣に成りましたので日曜日に御二人來て下さる筈の御琴の先生も御一人しかいらして戴く事が出來なくなりました又昨年頃の樣に蚊帳をつる時分になると應接室や病室に床を取つて居りましたにもう其れも出來なくなりましたので一室に二つづゝつる事になりました其のつる時の面白さは私等が床に就き後れて舍監の先生の御廻りに室のすみつこにくつていた時よりも面白い程でございます少さな木の馬を一つづゝ戴いて從横につる蚊張の紐をかけはづしておつこちるやらころげるやら一人がゆるげば一人がはづし一隅を引けば三人がたほれ誠に何と言ほうか例へ樣もございません彼樣に舍は年々と狹くなりましてや、不自由は感じますが舍内師の君樣を始め姉妹皆むつまじく月々一度は校長先生の御來舍と言ふ樣にその中に何のへだてもなく年々月々と親しさはします家は幾らまづしくとも家内の温かさは萬物の寶でございます、

此の春は一二年の方等の手によつて方々から買ひ集められたパンジーや離菊チューリップ等の草花が可愛らしい花をつけて庭をかざりましたあの井戸ばたの『かきつばた』も濃紫の優しい花を開いて姉樣方のなごりを止めて居ります

ガラス窓を通して疊までそめるポプラの眞青となる頃は梅雨の時節でございます

お濯洗場に見られたおかしい手ぶりの一年生の姿ももう近頃は雨の爲に見られなくなりましたこうして私等は親しい温ひ清い中にその日〳〵を樂しく送つて居ります

姉樣達よどうかよろこんで下さいまし私等は共にはげんで永久に此の温かみの去らぬ樣につとめる考へでございます

言悖りて出つれば亦悖りて入る。貨悖りて入れば亦悖りて出づ。　（大學）

校友會報

文藝部だより

委員　繁村マツ

晝食後の放課時間扨は終業後の數時間を閲覧室に費す事が嚴格な五時六時の授業に腦味噌の硬化しかゝつた私共に取つては如何んなに樂しいタイムでせうか。書物は文部省や若溪會などで撰擇指定された通俗的な少年少女書類や校友會の方から購求して下すつた各科に渉つた參考書類で中には硬くなつた頭を更に硬くさせる樣な物も無いではないが多くは面白いそして有益な書物斗り。それが委員の誰彼に依つて貸與へられ一定の場所に就て默讀されます。其の時の愉快さは何に譬へませう。私達の樣な讀書好な者は之に依つて得る利益は莫大なものです。夫に毎土曜日に又は冬季夏季の休業中には自宅へ借りて歸られるのですから便利は此上も有りません。偶には卒業生の方からお便りが有つてお貸出する事も有ります。閲覧者の多くは私達讀書好の者は勿論ですが學年で區別して見ますと壹貳年の方々が最多數を占めます。之に一つはお珍らしいといふ点も有りませうが又一つは智識欲が最も旺盛なからでもありませう。

最も多く讀まれるのはお伽物で之に次では貞女孝子といつた樣な傳記物で修養に關する物は無論上級生です。時代精神に關する物哲學的な物は先生方によつて多く讀まれます。

閲覧室の賑ふ時季から申しますと冬季が一番です夏は運動のシーズンでありますから餘り多くの閲覧者を見受けません。

新刊書に就ては書物到達の際委員長から各書物に就て其の梗概を豫て設けられたる黑板に掲載され更に多少の批評をして下さいます。之は私達に取つて極めて有益な事と存じて居ります。』

今最近一年間に購求された書物の主なるもの及諸雜誌の一覽を左に掲げませう。

一、最近購入書冊の主なるもの

今上陛下御即位式寫眞帳、をり〳〵草

氏神と氏子、婦人に勸めて、母の道と育兒、簡易生活法、裁縫備忘錄、支那寫眞講義、世界山水圖說、立儲要義、史說史話、大戰餘響、大正の青年と帝國の前途、法華經の行者日蓮、花島風月、水沫集、お伽新日本、目と耳と口、李兵衛物語、曉の小鳥、野の花、八犬傳物語、小波新お伽百話、ドンキホーテ冒險お伽噺、クオレ、日本國民傳說、實傳小說、少年お伽古戰場、お噺の仕方、幼きものに、死の蔭に、世界の不可思議、岡田式靜坐の力、牛、刺繍圖案集、洋樂夜話、現代の美術、歐州戰と交戰國婦人、軍談、國民文庫、歸一協會叢書、

二、現在圖書部類

修身教育	八五	家政	三〇
地歷傳記	一六五	理科	三一
文學	一七八	雜	八〇

合計 五六九部

三、諸雜誌類

實業之日本、新女界、少女の友、地歷畫報、戰爭實記、趣味の友、ABC、中等英語、音樂界、婦人週報、婦女新聞、少女新聞、

運動部報

第六回運動會記事

涼しい秋風に空高く張られた萬國旗に何れもつゝみえる嬉しさを双の頰に漲らせながら幾百の乙女の群はとり〳〵に準備に忙しい。見物人がそろ〳〵と緣門をくぐつてくりこむドーンと一聲、花火の音が空たかく鳴り渡ると同時に身中の血は湧き肉は躍る。勇ましい樂隊の音に足なみ輕く會場にくり出す。西側の觀覽席はもうかなりの人である。校長先生の開會の御言葉が濟むと運動部委員は忙しそうにはしり廻るプログラムに從つて樣々の運動は滯りなく行はれた。各競技に就いて氣付いた所を擧げて見せう

(一年)の徒手体操は初めての事で塲馴れぬため一般に萎縮して見えました(二乙)の虫干競爭(二甲)の駈歩は仲々勇ましく歩調の整然たりしは誠に氣持よくあつた。(四甲)の棍棒は平素の練習不足の方が數名加はつたため不揃ひの點ありしは遺憾であつた(四乙)の割烹競爭は未たのもしき奥樣姿、白の割烹服甲斐々々しくかけてのお働き振りに來賓席からは流石女學校の運動會であるとの賞讃の聲がしきりと

耳に入る。《二三四年》のカレドニアンは委員のお骨折で御卒業の姉様方にも入つて戴いたので大人氣。袴の裾輕くひらひらとひるがへして舞ひ舞ふ乙女に混じつてお奇麗な桃割れや銀杏返しのお姉様方のダンス一際目立つて見えた。過ぎにし昔の學び家に歸りてありし昔を偲ばせる、奥床しき情よ。來年からはもつと澤山出て下さる事を師の君はじめ私共妹達の切に望んでいるところで御座います。今から御願ひ致します。

《一甲》の月の遊戯はほんとに可愛らしかつた。桂の花咲く月の世界に遊ぶ心地、赤い耳をふるはせながら大きな〳〵兎が杵をかついで飛んでくる所は大喝采であつた。

《三年甲乙》の物品交換は仲々よく出來たが白組の一人に不注意の者があつたゝめに、全体に迷惑をかけ來觀者に不快の念を抱かしめたのは殘念であつた。最終の合同体操は各種の運動に心身共に勞れて居たのにも抱はらず非常に元氣であつて見るものをして心を強く思はしめたのはほんとに愉快であつた。

つるべ落しの秋の日が千光寺山の彼方に落る四時過第六回運動會は無事に終りをつげたのであつた、

食後の三十分

目前に迫る夏を恐ばしむるが様な淺緑のポプラや濃緑したゝる木蔭に暑さを避けて何事となく囁き合ふ方々も近頃はほとんど無くなり彼方にも此方にもポン〳〵ドーンとフットボウルの足先より彈き飛ばされる音高く低く或はかすかに。三つのボールは宙を綴つて忙がはしげである。これを奪ひ合ふも面白く又中庭のテニスコートではポーン〳〵と打出されるボールの目も廻はんばかりに行き違ふ。

其他三年生の始めたセレタボールに二年生の可愛い妹達が入り混じつて面白く樂しげにキャッ〳〵と飛び騒ぐ様はほんとに愛らしく全身には快活なる元氣さが溢れて居る四年生は主に網飛び等に夢中になつて居る、斯の様に總ての運動に心を奪はれ我を忘れて輕げに操る体より大粒な霰のとめどもなく降り行く様や又活氣に萌ゆる顔にも過ぎ行く樂しい三十分の遊び時間の終るを惜しむ如く活潑に愉快に。少しの暑さも身に覺えず體を鍛え上げ立派な體格となり四方に叫びつゝある体育といふ事に勉め勵まんと思つて居ります

校友會役員

會長　杉野校長
副會長　三宅教諭
文藝部長　三橋教諭
運動部長　吉野教諭

運動部委員

二甲　佐藤絢子
仝　名越美子
二乙　坂井久子
仝　井上安子
三甲　今川好美
仝　中村喜代
三乙　村上秀子
仝　青子千代
四甲　村上小枝
仝　上野綾子
四乙　田阪小竹
仝　村井駒

文藝部委員

二甲　和田イサヨ
仝　石井トラ
二乙　桑原好子
仝　三浦千代
三甲　岩井清子
仝　越智コウ
三乙　吉村ミツノ
仝　吉井千代子
四甲　繁村マツ
仝　岡崎淑子
四乙　橋本順子
仝　今井高代

大正五年度校友會決算

收入ノ部　四六六、八四六

內譯

前年度越高　七八、三九六
會費　三八二、八〇〇
利子其他　五六、六五〇

支出ノ部　三六七、〇六〇

內譯

雜費　八七、七九〇
運動部　九一、四五〇
文藝部　一八七、八二〇

差引殘高　九九、七八六

同窓會報

同窓會總會記事

今や世の中の進運と共に我同窓會の會合の如きも漸次其趣を改良して時代の要求に伴はなければならない、是迄なし來つた茶話會的のものは已に世の進歩に後れる感がある

今後はよろしく好機を促へて其時間を有益に費し會員をして何か得る所があらしめたいとは常々唱へられまする會長の御意見でございます

此趣旨の下に開かれました本年の總會は從來のものとは稍其樣子が改りました

即第一回は大正五年七月二十一日から仝三十日まで十日間刺繍の講習がございました

講師はかねて此道に造詣深き戸野廣敎諭で場所は母校の下裁縫室でございました

出席會員は總て六十余名で流汗淋漓炎熱やくが如しといふやうな氣候でありましにも拘らず先生の御熱心と會員皆さんの御熱誠と互に相俟つて非常な好成蹟をおあげになりました。左に其際習ひ得られたあらましをあげますれば

木綿部分縫　涎掛　手提袋　手柄　ハンカチーフ

半衿　ふくさ

第二回は大正六年四月の下旬若葉の梢みどり滴らん斗りの好季に三日間、母校の割烹室で料理の講習が開かれました

講師は中野常盤氏で家庭に於ける西洋料理日本料理の簡單なものを數十種出席會員は四十余名でございました

講習が終りましてから作法室で母校の諸先生と御一緒に茶話會の催しがございました

講習で作りましたお菓子を先生方にお供へして第一に會長のお話續いて講師の挨拶先生方の御紹介あとは各思ひ〳〵のお話で大へん有益に又愉快に終りをつげました

料理講習科目の大略

スープ　フイシュコロッケイ　プリン　蒸魚餡かけ

竹の子木芽和　ロールエグス　厚燒　ライスカレー

玉子ダシ卷　泡雪羹鯛のフライ　マッシュポテトー

ビーフステーキ　フーカデン　オムレツ　ラブスター

ーコキール　ロールキャベーヂサーメンスチユー

慈姑カステラ　コロケー　海老揚物　筍玉子トジ

若葉都卷　サツマ汁　オボロ吸物

右は眞の大要を記しましたのでございますが此二回の講習に於て御出席になりました皆さんは多少何か得られし所のあつた事を信じます一刻一秒万事進みつゝある今日皆さんどうか一奮發下さつて又來ん次回の總會にはお繰合せの上多數御出席下さる事を今からお願ひ申上げておきます

雁のつて

西中トク　家事の手傳に忙がはしと委しくは別項參照

生酒コト　家事においりしみのよしなれど全体お勝れ遊さぬ趣き

稲田サト　家事御練習中先頃母校の割烹講習會には御姉妹連れにて御出席の由

井手上千代花　御實家にて四才の康子様の母様として樂しく御養育の赴

辻その　近き日に御出産のおもむきおめで度き限りなり

小倉ひで　宇佐にて妻として將た若き母君として忙がしく御過しのよし今春又男兒御分娩

森ハナ　東京に御住の由御近狀御知らせを乞ふ

小田マサヨ　岩國にお住の事を思ひ出し今春其の地をふみお宅をそれとなく氣をつけたれど知れざりき二月頃に女兒を得られ五月頃來尾致されしが如何にも若き母様らし

水河光代　一月に水河家に嫁され東京にてお住ひ遊ばしお落ち着きになる間もなく此の四月中旬頃福岡に轉住致さる次回には是非共異郷の風物お記しを乞ふ

高橋春子　去年お生れの男のお子様定めし御成人なされ今頃は一歩づつかはされる頃ならん土人の下女をお使の由變りたる御地の御様子御洩しの程を祈る

河村初音　今春四月廣島市本川小學校へ轉任遊ばす斯道に御盡力の由兒供の教育に就き御經驗承り度し若き母君達の得る處あらん

楠戸エイ　御無事にて靜かなる田舍にてお暮しの由今年二月に女兒を擧げられ其の御世話に御忙がはきと子を持つて知る親の恩といふ語を深く共鳴致されつゝありと

河本キミ　三歳の御子様女の由片言ながら大低の事は知れ一家笑ひの中心とか

小西ウラ　川端にお住ひ母校にて紀元節の餘興の時の奈良朝に宮仕へいたされし九十歳のお婆さん眼前に髣髴して記憶すて難きものあり

野崎幸　御様子承らず時折は御洩しの程を

楠戸千代子　本年五月男兒を當地小川産婦人科療院で御出産の由お丈夫なる御子様とか

眞田ふみ　家事御練習中御便り願ひ度し

佐藤ヲカネ　府中なる佐藤家に嫁がれ永く御病氣御入院の處此の程全快致されしと

久留島カメコ　昨年東京に引越されしと御近況御報あり度し

秋葉勝子　青島にて母様としてお暮しの由委細御寄稿參照

田阪花江　山波にお暮しとか御近狀伺ひ度し

伊達房子　螢雪の刻苦の結果本年三月女醫の免許狀を御取りになり只今も東京にお暮し遊ばし御研究の御様子御寄稿を祈る

土屋フジエ　一向承らず御便りに接し度し

堂野エイ　相變らず御無事にてお暮しの由此程御良人滿州より福山聯隊にお歸り遊ばされしと

中野チトセ　横濱にて御良人と御同棲の處此節故郷を見舞はれしとか

父上永眠致され御愁傷の事ならん

長安愛子　兎角御健康勝れられず

近頃は實家にて御保養中御自愛を祈る

橋本信子　佐世保にて御二人のお母様御熱心なる御養育振り承り度し

野田光　家事お稽古中時折は母校にお遊びにお出でられ度し

野村喜代子　大阪の姉様御歸りの際共にお越しになりしと

檜崎タマ　御貴人ロンドンへ御轉任の後は姑上と名古屋にお住ひ寄稿參照

神原久枝　昨年秋男兒を御分娩されれ今は御養育に餘念なしと

松尾初代　小學校にお勤めの由御近狀承り度し

安長ふじの　御無事にて父上や兄様達と樂しくお暮しの由

湯淺熊子　去年の春は實家に御養生中なりしが今年一月頃には女兒を擧げられしとか

藤井フデ　御近況承らず御便りの程を

吉岡繁子　家事に將た稽古事におはげみの由

高田ミキノ　本年三月一日男兒御出産只今は身も心もお子様のためにと寢ても覺めても御心勞の由神戸は誠に暮しよき地なりと

伊藤菊野　御貴人御病氣にて當地に御養生の處おもはしからずとて只今は廣島市にて御療養中男のお子様至極丈夫にて御成人の由

橋本キク　此の節は御二人の母様となられ御多忙にお暮の事ならん

門田ツヲ　只今は天王寺に母様と共にお暮しの由

阿蘇カヲル　家事にいそしみ給ふ

花本ミチヨ　御様子相分らず

伊藤春江　御近狀承りたし

高邸輝代　御近狀承りたし

上田靜江　家事練習中

佐藤壽子　當時尾道へ在らせられ先頃御男兒御出産遊ばしたりと

大本コト　當春御病氣重らせられ黄泉の客となり給ひぬ御子様もお出での由にいたましきかな

大藪花子　御近狀消息文にあり

岡せきの　御貴人と共に福山に在す

谷本梅の　御近狀消息文にあり

古谷末代　御近狀承りたし

村上トミ　折々當市にて御姿を見る事あり

繁田千代　御貴人と共に北米シャトルに在す由

栗井トクノ　當時東京入らせらるよし

小林久　家事練習中

榊原滿江　家事練習中

小林キヌ　當春當市小林家へ入嫁せらる

池田よし子　育兒に御熱心のよし

田坂マス　御近狀承りたし

岡本久代　大阪岡本家へ入嫁せらる

高田玉子　今春御歸尾遊ばさる

井口八重子　消息文に御近狀あり

中川秀子　目下廣島市に御在住の由

池龜イト　御良人と共に朝鮮京城に在り

三坂玄子　育兒のかたはら家事にいそしみ給ふ

平田敬子　御貴人と共に大連より此度東京へ御轉住のよし

日高貞子　少し御様子しらせ給へ

松浦コマサ　御近狀承りたし

大西タミ　一向御様子相分らぬ

立上ツネ　甲奴郡上下町の親戚へ御逗留の所此節御歸尾遊さる

鶴田フミヨ　目下朝鮮に在すよし御様子相分らず

平瀨ノブ　佐賀縣松浦郡大山なる某寺に嫁せらる

竹ノ上コチヨ　御様子相分らぬ

大泰司靜江　家事においりしみの由
渡邊キヨ　委しき御樣子消息文にあり
黑木ノブヱ　少しは御樣子しらせ給へ
橘高きみ代　先日一寸里方へお產の紐をとくべく御歸宅の由且那樣へのお土產にはるれ〳〵御可愛らしい御子樣であるおもの憂き五月雨の此頃にも御宅はいつも春風がそよ吹いてゐる事でせう
田中竹代　淋しい明暮を如何に御暮しなさるやらちつとは御便り下さいませ
神原るい　神原家へ御入嫁後はいとむつまじく靜かな主婦らしい御生活を續け給ふとかそれにまた近々お母樣に御成りなさる由優しい母樣の懷に抱かれるお子樣はどんなに幸福でせうせつかく御自愛の程
林くに　雛樣の樣な御夫婦とは御二方の事をいつたのではないとせうかほんとうに可愛らしい美くしい新嫁樣のライフをおもらせ下さい
日山キヌヱ　先日尾道へ御越しなすつたとかなつかしいお姿を拜見した方があるとか唯今お出の處はお淋しいそうで『眞玉』お待ちかねの由消息あり
高橋シゲル　可愛らしい男のお子樣を御あげの由
松森つや　御養子をおもらひ遊ばし土生村にて萬屋を御いとなみの由
增田由巳子　御出產遊ばしたとかどんなに可愛らしい御子樣でせう御母君としてはた學者の奧樣として貴女の御經驗談がお聽致したいものですね
若山阜世　時々當地にて美くしい丸髷姿をおみかけ致しますがほんとによく御うつりなさいます
松尾ナヲ　大山大將と御同姓の貴女も此度松尾さんと御改姓の由理想の家庭とでも題して本誌の消息欄を賑はして下さいませ
金田菊代　昨秋美作落合町なる金田家に御入嫁遊され家事に御いそしみの由
金谷田鶴　十日市の小學校へ御奉職ときく
河本キヌ　相變らず家事御練習かたはら御稽古事に御出精の由
江川壽代　一向御樣子承らず御近狀承りたし
池田壽子　其後の御動靜伺ひたし
納見千歲　相變らず御勉學の由
政池つな　一向御たよりなし御近狀如何
村上ハルヨ　今春山口樣と御改姓遊さる小學校へは引續き御勤務中相變らぞ御元氣の由
山口ツネヨ　三坂かめ　姉君樣と御むつまじく家事に御いそしみの由
小川のぶ　風涼しき鎌倉の里にて樂しく御過しの御樣子
楠生みね　御養子を御もらひ遊して樂しく日日を御送りの由
栗原フサ　御子供も御成長お店も繁昌さぞ御たのしみのこと
兒玉清子　家事御手傳のかたはら御稽古事に御熱心の由
小山リウ　御兩親の下にて家事にいそしみ給ふ
永田ゐつ　先頃慈愛ふかき母上樣を失ひ給ひこのごろは妹樣方の御世話に忙しぎよし
多田憲代　御近狀承りたし
長尾千代　今春玉の樣な男子を御產み遊して母樣として一家の主婦として忙しき御樣子

原田マサノ　御近狀承りたし
阪田幾世　一向御樣子承らぜ
佐々木まつゑ　廣島に御暮しのよし時々お便りを
正木春子　御妹君と御一緒に御稽古事に御熱心のよし
三熊小里　花の樣な可愛ゆらしき赤樣を御產み遊されしとか御經談承りたし
村上つるこ　御近狀承りたし
三井雅子　御近狀承りたし
村上ヤス　一向御樣子相分らず
稻田ノブ　御裁縫に御通ひの傍ら種々の講習などに御出席遊ばし熱心に各方面に渡り研究せらる
野村藤子　御兩親の御膝下にて家事練習中
壽美谷多賀子　母樣を助けてお店の事家事の事萬事御活動の由
村上下枝　生名村村上家へ御入嫁の后はひたすら家事に御いそしみの由
小西ハル　御稽古に御熱心のよし
下川小雪　御樣子承らぜ
末田ヒサノ　此の節仕舞に御熱心のよし
佐々木豐野　女子大學にて御勉强中
高垣シゲノ　第二尋常小學校に奉職せらる
武田マサヨ　此の節農家のとり入れどきとて御忙しくいらせらるゝ御樣子
中司カツエ　御嫁入り遊ばされし御樣子承る
久田オヒサ　廣島の姉上の元へおこしの由
林良　日日大變に御忙く御暮しの由
藤井靜子　東京にて銀行に御出勤とか
永井恒子　お母樣の御膝下にてお稽古事家事の練習においそしみの由
小松ふさ　いろ〳〵のお稽古事に御いそがしき御樣子
立神タネ　東京女子高等師範學校にて御勉强中
野村アサ　御熱心に家事の研究を遊ばさる
福原かヨ　今春御結婚遊ばされ相かはらぜ向島にお住ひの由
森安ふじの　若き母君として育兒に御熱心の由
松井エイ　家事練習中
三井敏子　一向にお便りなし
三次イチ　御近狀承りたし
宮地清子　六月御退職遊ばされ近く御入嫁遊ばされるゝとか
宮崎亮　相變らず第一尋常小學校に御勤務遊ばされ
村上カヤ　家事練習中
村上ヨシ　東京職業學校にて御勉强中
藤野君代　今春藤野家に御入嫁遊ばされ
堀內好　昨夏御出產後間もなく愛兒は失はれしも君には別に障りなく御幸福にお過しの由
新田ヒサ　家事練習中
兼森シゲヨ　御近狀消息文にあり
村上ミツエ　愛子の御養育に餘念なし近き內今一人の母上となられるゝとは友の噂
兒玉ヨシ　今春職業學校御卒業遊ばされ御家庭にて御稽古事に御熱心のよし
青野セツ　只今は伊豫三津濱に御住ひのよし御樣子承はりたし
市川コワサ　隣村に御入嫁後續いて河內尋常小學校に御勉遊ばされる
永原ヨネノ　御良人と共に岡山に新家庭を持たれ六月上旬に御安產遊ばされし御樣子いと滑稽家なりし君の御母樣ぶり如何にや
伊藤ミネ　御近狀承りたし
今井清子　稽御古事に御急がしき御樣子

植田きくの　久しぶりにて御歸郷遊ばされしが又すぐ御上阪のよし
宮本エン　水島なる新家庭に相變らず樂しき日を御過し遊ばさる
小川春江　東京女高師にて熱心に御勉强中
岡田トヨノ　仙台御滯在中重き腸チブスにかゝられ東京の病院に御入院幸にして九死に一生を得られ御歸郷後は誠に御健かにて御稽古事など遊ばさる
柏原ミユキ　續いて中庄小學校に教鞭を取らるゝよし
井出てつ　東京職業學校にて熱心に御勉强中
永井チサト　故郷にてはよき師匠なき爲め廣島にて色々御稽古遊ばしておいでの由
藤井ナヲ　結婚後御良人ど共に大連にあり
吉原艶子　家事練習中
大秀子　布哇なる御良人の所へ越の由
岡田かつよ　御渡米后間もなく御病氣にかゝられ途にかの地の露と消え給ひしとは紀念のお手紙あり
林久代　家事練習中
德毛みさほ　御針やらおけいこ事に長き日も短かしとずいぶんお忙しき御樣子
岡田季子　近き頃お母樣とならるゝ由人の噂をそのまゝ只今は當地にお出で遊ばさる
高橋としえ　家事練習中
砂川千代鶴　何や彼やおけいこ事に忙しき日を送らる
井上ヒデヨ　今は大阪にお出の由
高田まつゑ　先頃高田家へお嫁きなされたり只今は當地にお出での由いづれ近日の内に朝鮮水原の方へお出でなさるとかお名殘りおし
杉原エツ　若き主婦として家事においそしみと存じます
杉谷シズエ　裁縫通學
田中喜久惠　呉の伯母樣の宅にて三年生の御子供樣の御世話なされつゝ御留守居を遊ばす由
高橋春子　尾道の御親戚にて家事練習中
中村芳子　御良人が船より神戸にお歸りなさる度に御面會に行かれる外は御里にあつて家事に御いそしみ遊ばさる
高シズコ　尙呉にて御修業中
塚本福子　呉の兄上の所にて琴家事練習中
西永ミサヲ　變りなく家事練習中
藤田セイ　母君御病氣なれば裁縫のかたわら家事弟妹樣の御世話に急しとの由
藤田繁子　福島ッギ樣を御姉樣となされさぞ御嬉しき事と存じます繁子樣も近い内に他家の人となるゝとかきゝました
平野たまえ　お裁縫のかたはら家事實習に餘念なき御樣子なり
德永ゆきゑ　毎日お縫物やおけいこ事に御熱心なり今春より清水きぬよ樣が彼の地に奉職なされお二人にて樂しくお暮し遊ばさる
金丸君子　先頃より栗原の小學校に御奉職なさる
阿蘇しずよ　相變らず裁縫の道をはげみ給ふ
石幌いり　家事實習中
武本かめ代　裁縫を學びつゝ家事練習にお勉め遊ばさる
村上美津枝　裁縫のおけいこの暇々にお茶の練習においそしみの由
鞍掛靜子　またま會員として日々お針の道をはげみ給ふ
村井玉枝　先年因の島の村井家へ

お嫁ぎ遊ばす只今は神戸の方へお出の由ちと御様子御洩し遊ばせ
楠生ふみ　大阪なる親戚に御出で給ひこの夏の過ぎ次第御歸りの由
行友房子　青森にて伯母様の御看病遊ばされて御出の由
清水キヌヨ　沼隈郡網町尋常小學校にて熱心に御務め遊さる
安保ちよ　鎌倉なる伯父様の御家にて家事練習中
原歌子　今津野尋常小學校在勤
恵谷ヨシ子　三原師範二部御勉強中
藤田ツギ　繁子様と義姉妹となられ只今は御良人と共に桑名町にあり
正木フサ　家事練習
松本千枝　大坂藤田家へ見習として御暮し遊す由
村上ヒサノ　家事裁縫に御熱心
八杉イソヨ　廣島にて御家内と共に御暮しの由
山根トシコ　廣島の山根へ入嫁されました
山口マサコ　いと御健に日中裁縫家事生花琴の御稽古に御忙がしと
吉田キクヨ　近き内に若き母君と成り給ふ由
米田サダ　御病氣御全快にて日々家事に御いそしみとか
吉本ナミコ　茶生花家事練習中
吉光テルエ　家事練習中
小池貞子　入嫁遊ばされた後も尚琴茶生花の御稽古に御熱心なり
渡里標子　家事御手傳に餘念なし
大山芳枝
安保キクノ　農家の収獲時でお忙しく菊の乾燥においそしみ遊すいづれ大連へお出でなさるとの由
安保コトヨ　家事練習
稲田フサ　裁縫茶琴に御熱心なり
井上安子　裁縫通學
橋本ハナエ　御無事で家事においそしみで六月の末頃母君となられ由
恵谷春子　裁縫通學
恵谷ハツヨ　向島東尋常小學に御奉職の由
岡田ヨシエ　御變りなく御勉強中
大部松枝　家事練習
加藤静枝　分りません
金子輝子　家事御練習
神田ハルエ　他家の人となられたとか
吉川モト　大阪へ入嫁せらる
黒川美左代　御變りなくお針草花栽培に餘念なくお暮遊す
小西シズ　裁縫通學
藤井清子　福山藤井家へ入嫁され只今は御主人が學生なので御一所に御在京の由
杉本愛子　お花お琴お裁縫と忙しき日を御送りの由
上野ゆきゑ　御裁縫は勿論お花お茶盆石も遊ばさるゝ
泉隆子　お裁縫お茶お琴に御熱心中との御事
川本福代　お裁縫お琴へ御通ひのかたはら家事御練習中の由
小林いち　御便りなし
井上タキ　裁縫通學
池田澤子　家事練習中
河野絹衣　近頃は御無事にて家事練習中
松本智恵　お茶お花お裁縫等致して居ります
檀上律子　家庭にありて家事御手傳ひの由
白石道子　岡山市天瀬町片山翠松舎内にて御裁縫においそしみの由
田頭ミス　御自宅にて家事にいそしみ給ふ
神田ハルヨ　先月御調郡山中村の上田家に嫁がれ直樣木ノ庄村に業務の都合にて御出張の由

和田波子　御家庭にありて家事のお手傳ひに御いそがしくお暮しの由
仙田俊子　眞玉會員として吉村裁縫所に御通學の由
平井淳子　御兩親の膝元にて家事御練習中
山本喜代　お稽古事においそしみの由承る
木梨きみよ　御自宅にありて家事御手傳ひの由
木曾章子　御近狀承り度し
池田花子　御兩親のお膝元にありて家事のお手傳ひ遊ばされる由承る
兒玉千賀子　またま會員として吉村裁縫所にお通ひ遊ばさる
檜垣保世　東京市小石川水道町なる女子青年會寄宿舍にありて東京和洋裁縫女學校に御通學の由
大久保文子　三原なる御自宅にて家事の御手傳ひ遊ばさる由承る
大西千代子　御兩親のおりばにて家事御練習中
細谷ツタヨ　栗原村なる御自宅にありて家事に御いそしみの由承る
上月學子　家事練習中
三谷よし子　御近況承はりたし
村上純子　家事御練習中の由
木曾朝子　御兩親のもとにて家事御練習のかたわら來春の受驗御準備に御怠りなき由
津田田鶴　故里の御兩親のもとにて家事練習遊さる
井上敏子　外國語練習の都合上和蘭人なるウキリアム、ハワチェンルイダーのもとに寄宿され午後四時より七時迄未來のタイピストとして神田鈴木町なるタイピスト養成所に御通學遊さる學課は英作文英文速記實地練習の三ツに分れ級の者は四十人にて大抵は女學校卒業後二三年外國人について英語を練習した者が多く又男子の四十歳位の人も少くなき故それ等の人におひ付く迄は大變御苦しみ遊したるの由近々の内若き御叔母樣御上京なさるゝ故そこに同居遊さるゝ樣は承る
濱井よしか　佐伯郡大柿村なる御兩親のもとにて家事の御手傳ひに御急しき由
廣川いと　夏は涼しい布引の瀧の一眼で見渡される神戸高等技藝學校に生れてお初めての寮舍生活此頃は大分學校にも御馴れ遊して故郷なつかしさの涙もかわき午前中は裁縫午後からは刺繍と毎日學課を御いそしみの由
福永千代子　津田英學熟の豫科に首尾よく御入學遊され今頃は試驗の爲に御多忙中
栗原マツノ　眞玉會員として吉村裁縫所に御通學遊さる
中村節代　廣島は泉邸内なる手島樣とて淺野侯爵の御内樣でゐらせれる方の所へ御行儀見習の爲に御修行中當節は御内樣を御慰めする爲に廣々とした御庭の櫻實をとるのが樂しみ仕事にて鶴が多くの雛を生みたるもかの珍らしき由
毛利トキノ　因島なる御兩親のもとにて急しき店や台所のお手傳ひ
のひま〳〵ヴアイオリンの御稽古においりしみの由
東一枝　家事練習中
田中千代乃　家事練習中
阿蘇ケイ　眞玉會で裁縫御練習中
石井秀子　母樣なき家庭の事とて家事の全部は勿論妹樣達のお世話に忙しき由又其暇には水引細工琴の稽古に御熱心のよし
石岡芳子　家にありてお仕事を勵

み給ふ

松岡キミ　今春から松岡と變り給ひて今は御良人と共に京城にお暮し遊ばすよし朝鮮のことども承りたし

井上一枝　四月から縣立福山女學校に滝車通學を遊ばさる

井上春子　眞玉會でお裁縫のお稽古に急がしき由

井上千里　おたよりなし

内海ツタヨ　母校を去られてより直ちに鄕里の隣村なる奥村尋常小學校に御奉職遊ばさる

岡田千代　眞玉會でお仕事に御熱心

小川キミヨ　御両親の許でお稽古をいそしみ給ふ

大久保清子　眞玉會にお通の遊はる

大西政世　鄕里なる御祖母様の御膝下で家事に御熱心老先き短き方を色々とお世話遊ばすとか

笠井ツル　尾道におはす姉様の許より眞玉會へお通ひの由

川ノ上ヤヘコ　毎日〳〵遠い道をトボ〳〵眞玉會へお通ひ遊ばさる

小林シゲコ　近狀承はりたし

碓井敏江　近頃忠海なる碓井家へ御入嫁なされしとか

杉原ミサカ　お裁縫にお通の遊ばさる

田頭ハナエ　御両親の許で家事にいそしみ給ふ毎週水曜日には森信先生の許へお花の稽古にお通ひ遊ばさる

高竹ヨシ　お稽古ごとに御熱心のよし

高橋正子　眞玉會に通ふ

高村照子　日々眞玉會でお稽古を勵み給ふ

高岡勳　お稽古のため尾道へお通ひ遊ばさる

武田トミコ　眞玉會で裁縫御練習中

竹尾ヒサ　歸省遊ばされて次第に快方に向はせられ日々樂しくお暮しの由暑さも去れば當地へお越し遊ばさるとか御自愛を祈る

谷靜香　緑深き初夏の一日をお針や家事の手傳等で忙しくお暮し遊ばさる

田村マツヨ　日毎に色增す若葉のすき漏れて黄金の浪漂ふ里に小女の歌ふ里歌に耳傾けつゝ家事の手傳遊ばさるとか

壇上ハツヨ　先日弟君を失ひ給はれし由御胸中お察しまゐらす眞玉會で御練習遊す

長尾タマ　御卒業後山波の若き先生として御奉職遊ばさるとか

花咲サカエ　家事御練習中

花咲貞子　家にありて諸事御練習遊ばさる

半田政子　家事に御熱心

平田スガ　眞玉會で裁縫御練習遊ばさる

平岡重子　眞玉會でお稽古ごとに余念なくゐらせ給ふとか

深井辰　お障りなく御両親の許で家事にいそしまる由

藤井タキ　眞玉會で御練習中先日鄕里へお歸り遊ばす

村上サダ　御裁縫練習の傍らなか〳〵の御勉强振りとか人の噂

村上貞子　お仕事に御熱心

村上ハルコ　家事おいそしみの由

本森千代　姉様嫁かれてより二人分のお手傳ひ遊ばすとか

吉原美代　京都よりお歸りの後眼も次第に全快に向ひつゝあるとかお花の稽古に通はせらる御用心遊ばせ

脇貞子　近頃神戸の某女學校にお越の噂あり

渡邊シゲノ　福山のお裁縫屋にて御稽古遊さるとか承はる

同窓會決算報告

（自大正五年六月廿七日至仝六年三月卅一日）

收入之部

前年度繰越金	三五八、一四四円
第二回卒業生一人分會費	一、五〇〇
第六回卒業生七三人分會費	一四六、〇〇〇
大正五年度利子	八、二二六
夏期講習會會費剩餘金寄附	一、〇六〇
合計	五一四、九三〇

支出之部

郵税	四、八三〇
雜費	一四、一三〇
雜誌眞たま第三号代	五七、一三〇
合計	七六、〇九〇
差引殘金	四三八、八四〇

消息

井上君を弔ふ

三宅素

前の本校の教諭井上君の訃（六月三十日逝去）が突然教員室を驚かした。深い歎息がアチコチに漏れる。ドンヨリと曇つた梅雨季の空は私共の胸を壓し潰すやうに思はれた。

十日程前に君自身が君の樣子を知らせて下さつた手紙は、君の容態が容易ならぬ重態であることを想像させるに十分であつた。私共はそれでも其手紙の筆勢や墨色を見て却て君の前途を樂觀した。何といふ淺果敢な冷淡な讀方だつたらう。今にして思へば、いつもに似ぬ長い手紙は一言一句君の血涙であつたのに！『井上君は氣をも少し强く持てばいゝ。病氣が重いやうに自分で思ひ過ごしてゐる。こんなに立派に書けるのだから助かるに違ひないものを』と心中に浮べながら……そして慰めの手紙を一日々々と延ばしてとう〳〵こんな事になつてしまつた。何といふ濟まないことをしたらう。

君は大正二年の四月に赴任して來られた。爾來君が病氣を得て退職せらるゝまで三年有半其の間病氣で欽勤せられることも極めて稀であつた。健啖時に私共を驚かした程で隨分丈夫な方であつた。

『温厚珠の如し』とは君のことであらうと私共は常に君の人格に敬服してゐた、君の怒れる貌は唯の一度も見た事がない。默々として多く言はず、最も新刊書（主に數學の書物）に眼をさらしてゐられた誠に篤學の人であつた。

『あんな好い人が何故不仕合なのだらう』と私共は君の訃に接して口々に言つた。『地獄といふものが假りにあつてもあの人は間違つても地獄なんかへ行く人でない』と又或者が云つた。『此の間の手紙には男の子が生れたと云つて來たが……遺つた子供達が可哀相だ』と或者が涙ぐんで云つた。

亡き人の遺骸を守つて、生前の言行を語り合ひつゝ夜を明かすのが『お通夜』のならはしだといふこと

だから、私は今少し君の趣味を語つて君を偲びたい中庭のテニスコートに、屢々君の影を見出した。キツイ球を君は打たない。キツタ球を君は打たない。ボーンボーンとうららかな角のない打方をした。そしてネバリ強い方であつた。時々會心の笑みを浮べながら……テニスの球の打方でも、私は矢張り君の丸い人格の表はれであると思ひ〳〵した。

君は又謠曲の稽古を始めた。非常に熱心で、節廻はしはメキ〳〵と上達した。聲も美しい氣品のある聲であつたが、どうも底力が足りなかつた。肺活量が足りなかつたんぢやないかと今になつて考へられる『ア、そこんところはいけない』などと私のやうなものが先輩顏で謠ひなはして見ると君はキツト中止して私の聲に耳傾けた。謠の方から云ふと君は私の從順な弟子であつた。

君との交游を追憶すると止め度もない程である。吻としてふり反へつて蚊帳の中を見ると二人の子供が寢行儀わるく丁字形になつて眠つてゐる安心さうに！父を失つた君の幼き子等の身の上を、遙に思ひ遣つて、又しても暗涙にむせぶ。

生前死の數日前君の手紙は消息欄に收められて、今は悲しいかたみとなつたが、天は美しかりし君の精神的生活に對して、必ずやうの靈とその遺族とに酬い給ふであらう。

舊師消息

名古屋より　牧田宇三郎

尾道。嗚呼何と云ふなつかしいよい名でせう。名ばかりでなく、其の風光の絶佳なる日本方一として誰に憚りませう。之れは何時でも、私がこゝろも廣き廣島の話が出る度に申す言葉で御座います。そもこゝは、私が中等學校の教師としての初陣の地です。テニスの如きも朝から晩まで、校長先生や三宅先生を煩して、兎にも角にもゲームの一通りを習つたのもこゝである。宙返りに等しきボールを打つて、當時のミス小西、生酒、榊原の諸嬢を困らせたのも昨今の樣ですが、既に五年の昔となりました當時の皆樣は既に令夫人や御母樣とおなりになつてゐらつしやるでせう。尾道生活の時代を追懷すれば聯想の糸は、それからそれへと走馬燈の樣に、頭の中を巡つて、萬盛交々胸にせまつて參りますが、相變らず左右〳〵と毎日やつて居りました、筆を執ることは少しもありませんから、書きたいことは澤山あつても、思ふことの十分の一も筆は動いて呉れませぬ故之れで失禮致します、願くは卒業生各位並に在校生諸嬢向暑の折から御自重の程。

六月十八日

卒業生各位並に在校生諸嬢へ

卒業生皆樣へ　多富久子

打ち絶え無沙汰樣申上候昨年も岡田先生より何ぞ御たより申上ぐるやうの御文戴き候も病後日も淺くとかくはかばかしくなく候ひしため申わけもなくその

まゝ無沙汰申上候皆々様にもさぞ〳〵日々御機嫌よく御成人の御事とかげながらいつも喜び申上居候次に私事も今年は先づ〳〵大したる病氣もなく此上後はダリヤの栽培など樂しみ暮し居候まゝ憚り様ながら御安心願ひ上候もはやほんどに昔話に相成り候へども皆様と廣き講堂を『御神やよ宮ゐかざらん』見よや沖邊をなぞわが物顔に占領致しながらうたひつゞけ候樂しさ今なほ忘れがたく思ひ出も中々にふかく存じまゐらせ候かやうに遠くはなれてもま玉にて皆様の御消息を目あたらしく拜見致しまた高師の小川様より時々諸先生皆様の御様子伺ひあげ候が何よりの樂しみに御座候吳々も梅雨やがて御あつさともに十分御いとひ下され度御願ひ申上候　かしこ

ボルネヲより　澤田芳郎

御訣別以來早や五十餘日と相成り候へ共御地の様子今以て頭腦裏には尤も鮮明なる印象と相成りて恐らく永久になつかしく覺え居る事と存じ候其後私は幾多の迂餘曲折を經て丁度五日前右の所其れは目的地ですが其處に上陸し早速翌日から案内の土人と共に銃を肩にして幾分の藥品其他を用意して奥へ入り唯今は右首府サンダカンより海を三里更に陸を二里位の山中にて一同胞の椰子園に休息致し居り候毎日毎日靜かな赤道無風帶の内で朝夕とスコール後の涼爽を除きては丸つきり燒き付ける如く猿猪鹿を追ひ乍ら今の所体を錬へ居り候されば今の所何も御報告する様な事を持たざるは誠に殘念の至りに御座候へ共今一二週間様子を見學致し候へば時々御報告の材料も獲得せらるゝ事と存じ候

申し遲れ候皆様へ相變らず自己の運命に遲ひ倍々御精勵有らむ事を祈ります　（四月廿八日）

古山先生より

一昨年の丁度今日當地へ參りました。その日に久し振りで貴兄から御通信に預り、誠に千萬無量の感慨を起したのであります。この滿二年間といふものはめつきり通信を絶つてゐまして實に恐縮に存じます併し貴校では杉野校長初め諸先生方が御健在で御勤務の事と遙察してゐます。最早當時教へてゐた生徒も大方居なくなられました、今の四年の方は丁度彼の時に二年であつたかと思ひますがそれも僅に三ヶ月に足りない短日月に過ぎません。それも大方は當時の印象から薄らいでしまつてゐることでせう。今年三月の卒業生中には隨分從來のレコード破りも見えたやうで誠に嬉しく存じて居ります。池田さんの奈良女高師福水さんの英學塾檜垣さんの京都專攻科など數へ切れぬ位であり、其外にも相當御志望の方がおいでになると聞いてゐます。學校の發展上から見ましても愉快に堪へません（中略）新瀉も來て見れば思つた程でもありません。矢張中國筋、就中尾道邊が恐らく我々の永久に居を定むべき地でせうと深く〳〵感じました。（以下略）

古山先生にお斷り申上げます。私へ下さつたお手紙を勝手に掲載致したことをお許し下さい。又、取り分けて私信的の部分を略しました無禮をも御許しを願ひます。（三宅）

南越より　佐藤老生

毎年今頃三宅先生から『真ゐは』に何か書けと再三御催促をうけながら其日〳〵の仕事に追はれて締切に後れ一両年御無沙汰を致しました顧ればこの老生が御地を辞しましたは大正二年の十月でありましたから今日迄足掛五年になります其頃學校にゐられた皆様は殘らず御卒業になつて同窓會名簿に名を列ねて居られる尾道の學校へ行ても一人も知た生徒はゐない先生方も半分は見知らぬ方と思へば何となく心細い様なれど意外な土地で意外な方に御目に掛れる青島に行たら高木様、伊豫へ行たら小川様もし台灣へでも行けば川崎様に逢れるかも知れない世間は廣い様で狭いものです併し今日迄の處は一向御目に掛れない唯皆様から時々御たよりをいたゞいて喜んで居るばかり、昨年の春四年の生徒三十名連れて伊勢奈良大阪神戸須磨京都と廻つて來ましたが尾道地方の方には誰にも逢ない唯京都で豐公廟の抜道を登つて居た時後方の生徒が『今、見知らぬ一人の男があの先生はもと尾道に居られた方でないかと尋ねられました』といふ、やれ懐しい誰だらうと後を追て見たが分らないことに殘念でした、大阪には壽美谷さん其他にも來て居られるとは聞けども逢はない神戸には黒木様が居られる筈だが逢ふ際はなかつたことに神戸には齊藤先生が嫁いで居られるか案内を御頼したのであるが折悪しく御病氣で御目に掛れなかつた本年五月奈良で開かれた教育會に出席し會が終つて女子高等師範をおとづれて始めて池田マサコ様に御目に掛つた、飛白の筒袖が長袖にかはつて居るし丈は大きくなつて居られるが愛らしい目元と特色ある聲音とで直にそれと分つた夕方でもありホンの數分間の立話ではあつたが色々尾道の様子を聞くことが出來て嬉しかつた池田嬢は老生をどう見られたか知らぬが髭の端や小鬢などに白いものゝ見えたことは薄暗い廊下でも著しかつたらうと思ます偖かう年がたつて見ると色々と尾道のことが懐しい色彩を帶て思出されます、定員二百人の豫定で用意した學校は四百人滿員となつたらどうやりくりをつけて居られか窮屈さ思ひやられる、大喧嘩の様にして圖を引直した寄宿舍も新しい内はよかつたが今は餘程古く汚くなつたことであらう舍前のポプラの木は算定法を誤つたからまことに格好のわるいものになつたらう否今頃は仕末にこまつて截てしまはれたかも知れない、色々といぢくりまはした講堂の教壇も大分禿ちよろになつたらう、ア、今頃は祇園祭の御囃子の稽古が『カン〳〵ドンドンカンドン〳〵』と眠さうにぢるさうに聞えてくる筈だ、上の石垣には夏草が例年の通り繁茂して校僕が毎日とりなやんで居ることであらう校僕といへば開校當時の校僕であつた山本は今どうして居るだらうまた汽船の火夫にでもなつて盛に馬力を出して居るか、今年は學校ではどこに遠足したか、在職中に岡山の豪溪へ行かなかつたことは今尚遺憾に思つて居る何時だつたか忠海に遠足して本郷の三時の汽車に間に合せようと泣面になつて驅付けたところが驛の一丁計前で汽車が通り過

ぎた、大兵肥滿の藤永校醫が生徒と一緒に驅けたので足に豆が九つ出來たとて大こぼし歸校時間に遲れたので附添の先生方が心配するに引かへ生徒は宿屋で夕食をたべられるので大喜したことなども思ひ出されるかう古いことを書出すと思ひの絲は連綿としてつきさうにもない今は尾道も大分變つたことであらう高等の藤谷先生も御退隱だそうな尾道の旧家で殊に公共事業に盡された龜山樣も亡くなられたろうだ市役所の人々も大分變られたそうな尾道の生命たる港灣浚渫はどうなつたか遙に尾道の繁榮を祈つて居ります

次に老生の近況の一端を申上ませう、福井は故郷に近いからすぐにも歸省ができる樣にも思ふたが容易に歸られず昨年の夏休に丁度九年振に歸省して半月程居て歸りました旧知半はこれ故人實に桑蒼の變に驚いた歸來相變らず齷齪と仕事に追はれて居ります一週間計前に男女附屬三所の養蠶が漸く上簇、教育總集會も先づ濟んだ、つゞいて記念林下草刈に女生徒をつれて行た大分漆にかぶれて顏や手を腫らして居る明日は男子が下草刈に行く筈又主事が着任するから披露式をせねばならぬ明後日は轉任の先生の送別會次の火曜頃には男子の蠶的漁法のゴリ引と稱する川狩がある夏休が近ついたから檢定試驗の問題選定、女生徒の臨海教育の計畫、其中學期試驗となる丸で活動寫眞を見る樣だ、が其中に閑日月もあつて餓鬼大將になつてテニスもする弓も射る、碁もうつ近頃は球突などにも手を出して見る、子供もだんゞ大きくなる上に殖える福井に來てから更に二人の男子を擧げて總て四男三女頗る盛だ、此點に於て國家に貢献して居ることは決して人後に落ちぬ積である但しかく多數の陸海軍を維持する軍費には常に窮乏を告て居る『仁に當ては師に讓らず』といふ古語もあるから同窓員諸子も大に生産能率を高めて國運の發展に貢献せられよ、老の繰言に貴重の紙面を塞ぐ虞もあるから此位で筆を擱きます、當校にも廣島縣の方で豐田郡出身木原厚君比婆郡出身石畑眞一君といふ二名の先生が居られますから時々尾道の話をしてせめてもの心遣りと致して居ります。

井上先生より

〔前略〕愚生病氣も其の後さしたる變化もなく經過し今日に及び候今日か明日かと思はれ心細く暮し申候昨今に至りて病勢稍衰へた樣にも思はれ候咳嗽咯痰幾分少くなり體溫も稍下り候食物は成るべく多く攝取致居候其爲か左程やせ衰へず候入梅期にても無事過し居り候はゞ或は漸次快くなれるかと之が一縷の望みに御座候併し油斷のならぬ狀態不安の念一刻も去らず候拙家は町並を離れたる極めて閑靜の地に御座候家の廻りには種々の野菜を作り候而親の丹精によりそろ〳〵よい三度、夏大根等出來候庭に水密桃の樹あり澤山實り候母は熱心に袋をかけ居り候見事に熟する事と樂み居り候氣分のよろしき日には努めて庭に下り此等の生長の樣を眺むるにて候一町位の往復大飛行を試みる事も有之候まだ〳〵大難事に御

座候朝顔は近頃芽生え候此等の手入にても出來候樣なればよろしけれど殘念に御座候　後略

卒業生消息

東京より　佐々木豐野

せひ私の學校の事を御話いたしまして皆樣に少しでもわかつていただいたならばどんなに幸ひだろうとはもう入學以來私の思つて居た事で御座います而し女學校の時からあまり上手でも御座いませんでした文筆の道とはこゝに入學いたしましてからはいよいよ遠ざかるばかりで御座いますので今少しの間と思つてゐました御無沙汰がつもりつもつてもう一年半にも相成りました如何に理想は立派でもそれを實現しなかつた時には眞の價値はないといふ事はよくよく存じて居りましたけれども……而し今度會員の方から御親切な御たよりを見ました時如何に私しの樣なもので御座いましてもやりきれなくなりまして何から書いて好いのだかわかりませんけれども兎に角筆をとつて見ました私共は眞に完全な人格を養成し深い原理を追求すると云ふ事をつとめていたしましたならば種々故里の事母校の事を思ふひまはないと一寸考へましたら思はれますけれどいつまでたちましてもわすれられませんのは母校の事でございます私し共が心靜かに金色の本のまばゆい圖書室で讀書にふける時露しげぎ朝の森をさまよふ時もしくはすがゝしい青葉若葉でもつておほわれた校庭にひらゝと蝴蝶の樣に樂しげにはねまはる女學校の方々の樣を見る時その時何につけても思ひ出されるのは先づ第一に母校の事より外に何も御座いません私し共がよろこんでよくあつまりました寄宿舍の前のポプラの木それは他人が見ました時にはどんなにいふかは存じませんけれどもほんとになつかしいものゝ一つで御座いますほんとに何とも云へぬなつかしみのある情味のある母校の事を考へて目さめた時たとひ今まで失望のふちにをりましてもむらゝとどこからともなく勇氣がわいてまいります母校のためさーやりませう！こう思ひながらすべての事を始めるので御座います誠に母校と云ふ言葉は私にとりまして好い刺戟劑で御座いますさてこれから少し學校の樣子を申上げますれば先づこの學校で他の學校と少し變つてゐますのは寮舍の事だろうと存じます寮舍はすべてゞ二十二ばかり御座います大ていは校内のお山の上や麓の所々にございまして丁度この頃は寮のぐるりをとりまく種々の若葉をもつてどの寮もすがゝしくあやどられて居ります それ〴〵の寮舍には大ていこの學校の卒業生の方々が寮監として一人づゝいらつしやいまして或時は私共のお母樣ともなり或時はお友だちともなつていろゝとおやさしう私共を御みちびき下さいます事は女學校の時も同じでございますその下には二人の主婦が居ります これは上級の方々がかはる〴〵なられますので御ざいまして家庭と同じ樣に出きた寮舍に於て家庭の主婦と同じ役目をいたします私の寮では今卅四人ばかり居

りますそれには女學校の方々もいられますので時々はお人形ごつこのお相手もいたさなくてはならない様な事もございますうして寮舍はもと〳〵學生の自治機關の一つとしてをかれてあるので御座います事ですべて寮舍の事はみんな生徒がいたしまして先生にはたゞ御相談申上げるばかりで御座いますのでございますからもちろん先生から御命命などは一寸も遊ばしません寮舍の整理趣味の事は云ふまでもなくお台所のお世話まで一人の下女を相手にいたしますので月末にはみんなで樂しんではいましても七分位は心配がまじつて居りますでもこふして心配しながらやつて行きましても月末に思ひかけぬ何十と云ふお金がのこりましたならその時のよろこびと云ふものは苦心をしたゞけそれだけうれしさも一通ではございませんうして大分お金があまりました時は先生と上級の方々と御一緒に日本橋や銀座の方までいろ〳〵と寮舍の器具を買ひにゐらつしやいますこんな所はほんとに自分の内の様な氣がいたしますそして大低土曜日の晩は一寸した御馳走に御茶などいたゞきまして夜のふけるのもしらずなりで一同御食堂にあつまつていろ〳〵とその週間におこつた事などについて御話をいたします時々は女學校の方々にわかる位な所の論會などもいたしますそうして休みます時にはみんなで祈りの唱歌などうたつて樂しく床につくので御座いますでも宗教は自由ですただ修養のために祈りの唱歌をうたふのですまたこゝの寮舍の一日の仕事としてかく事の出來ないのはまた他にことなつてゐますのは朝夕の瞑想の時間で御座います私共はこの時種々の計畫をたてまたうの日の終りにあたつていろ〳〵と考へるので御座いますかうした樂しい感謝の生活は女學校時代にもおとらないよろこびで御座いますかうした快い寮舍の生活は去年の春私が幾分かの不安をもつて入學いたしまして以來この學校にたゞよつてゐる目に見えぬ清い暖かい空氣と共に私を福にそだつてくれましたこれらはみんな私の入學式の其日から私の不安もおそれもとりのぞいてくれましたほんとに入學式の其の日から私は何とも云はれないあたゝかい誠のあふれる空氣に接し自分の望んでゐた學校はこれだといふ聲がどこからともなくきこえた樣に思はれましたうれ以來校長先生の熱烈な愛國の御叫びや獻身的の御働きぶりにいよ〳〵この學校の主義も精神も今は全くわかる事が出きました廿年以來このとほとい大精神の下に獻身的の努力をあらばしました校長先生の御熱心は今はだん〳〵と世間も見とめ畏くも今春は家政研究館の落成に際して皇后陛下の行啓をかたじけなふし私共の光榮は一方ではございませんそれに四月からは制度も改革されまして一週間わずか廿五時間と云ふ時間だけ授業がございましてあとはみんな自動自念的に自ら何でも研究するだけの自由があたへられましたので眞の勉强が出來皆々のよろこびそれにともなふ勇氣も一通りでは御座いません私も今年からは三年と相成りましてとほとい大精神の下に母校の一人の娘として非常に樂しく努力の生活を送つて居

りますこれもみんな母校の諸先生方の御高恩のいたす所と誠にふかく感謝いたして居ります終りに諸先生はじめ諸姉の御健康を祈り上げます　かしこ

青島にて　秋葉かつ子

異郷の寂しい春もいつしか夢の間に過ぎゆきては青葉の蔭なつかしい心地のいゝ頃となりました先生を始め皆様には御變りも御座いませんか日頃はほんとに申わけもない御無沙汰致しましてすみません何卒幾重にも御許し下さいませ扨又々嬉しい私の大好な待ち兼ねの時が來りましたこんなに遠く母國を離れて居りますので何よりもうれしくつてなりません考へて見ませば私どもよつぽどお婆さんになりましたわね御情深き先生の御膝元を離れましてからは六年にもなりますのね其後母校も日に增し御發展との御事此の上もなく嬉しく存じます私も此節は又々新らしい土地で新らしい人の母と呼ばれて毎日其つとめに忙しく暮して居ります何事も樣子が分りませんので母となりましてもなんだか親と言はれるのが恥かしいやうで相變らず昔の樣に大聲張り上げてうたひ騒ぐ事も時々ございます

此度青島轉勤と聞きました時はほんとに嫌やな心地が致しましたがさて來て見ればうんなに捨てた處ではございませんそれは〳〵ほんとに景色のいゝハイカラな住み心地のいゝ處で御座います第一氣候がよろしう御ざいますので子供等育てますには最適當地と存じますしかし何分御承知の通り占領して間がありませんので未だすべて不整頓で民政署もなく只軍政署によつて取りしまつて居るだけなのでございますから變に感じる事も時々御座います人口は日本人は一万余り居りまして建物など一切獨逸其まゝのもので御座いますから隨分大きくいかにも洋行して居る樣ななまいきな氣分が致しますそれに日本人が一番鼻が高いので御座いますよホ、、、獨逸人なんかちつとも恐いとは思ひませんですから何處を歩るくにも意張つたもので御座います一つおかしな事は青島は金銀二通りのお金が用ひられます銀はは皆な紙幣になつて居ります未だ其他軍票といふ紙幣も御座いましてこれらは　戰爭時代から今に迄用ひられて居るので御座いますりしてこれが時により金銀の相場が違ひますので始めの内など買物するのに隨分困りました物價は大連よりもまだ高いので吃驚する程高いものもあれば又バカにお安い牛肉類等も御座います肉は山東牛とて有名だそうで御座いますから少しはお料理も覺え度いと思ひますけれど子供で手を取つてとても思ふ樣には出來ません青島と申しますとよつぽど遠方の樣に思はれますが内地から船で參りますのには大連よりも寧ろ近い位で御座いますからまあ〳〵心細さ少しは違ふ樣で御座いますこれから夏にかけてはことに避暑地としてふさはしい處で御ざいますから皆樣も是非一度は御遊びに御出掛けなさいまし御進め申します未だ〳〵澤山御話しも御ざいますが余り長くなりますから此度はこれにて御別れ致します何か御身御大切にでは又此次に御目に

かゝりませう　さよなら

河内より　市川こわさ

降りみ降らずみ五月雨の空定めなく陰鬱な今日此頃の日和癖を諸先生はじめ參らせ同窓の皆々樣には如何御過し遊ばされますかお伺ひ致します。扨て此度幹事樣より眞玉雜誌發刊につき近況を通知せよとの報に接しまして大變うれしく平素の御無沙汰のお詫びのしるしにもと最速筆をとりましたしかしとつたものゝ何とかいてよいかと迷ひましたがやめもせでついに出鱈目を申述べる事となりました

さてとや過ぐる月日に關守なく櫻が散れば青葉と代り、代り〳〵てまたこゝに翠滴るの時節が訪づれて參りました離るものは日に疎しとは申せ私共は去るに從ひ尙更其當時の追懷連々として禁ずる術も御座いません。住みなれた校舍を後にかすみこもれる春日かげに送られて涙と共にお分れを惜しみましたは只昨日のやうに感ぜられますに思へば早や二とせ余りを過して參りました。思ひ出すだになつかしきは昔の歡樂で御座いますよ勉强のひま〳〵に袖うちつらねて瑠璃が峯千光寺或は西國寺淨土寺にと玉の浦の風景を心ゆくばかりながめて仲よく暮したあの樂しい夢のやうな四とせがどうしても忘れられません昔をしのび今を考へ追懷は層一層意味深い感じをもたらすので御座います。あゝ今一度これつて深い煩悶もなく他動的な學生時代が!!と呼ぶことは幾度か知れません御承知でも御座いませうが私はつまらぬながらも去年の春師範二部を終へ教育者としてこの活社會へふみ出しました爾來山紫水明な河内の山中で一小學校の教員として天使のやうな罪のない幼い子供を相手に平和な日を送つて居ります。住めば田舍も都の如しとは申せ長く住みなれた尾道こそ最も慕はしく存じます。二年前とは校内は著しく變つてゐませうねされどそこには忘れ得ぬ恩師の君がいらせられます又悲しさ嬉しさ共に語つたボプラ樹も相變らず成長してゐませうそして私どもの幸福を祈つてゐてくれませうしてみれば私どもは永久にこの玉の浦校舍を忘れる事は出來ませんたしかに吾々ここの校舍とは或る何ものかによりてつながれてゐますさらば師の君よ皆樣よ御健やかにましませ

三次より　金谷田鶴子

今宵十日許の月は美しう庭の松が枝をよぎり我が破れ窓に訪れ申候。あゝたちちね今如何にあゝはらから今如何にと思ふ心になやまされ月ようつせかし風よかたれかしの歌を聲もしどろにくちづさむ折柄宿の下女なつかしのお便りをもちつと我が春後に立ち候美しき水ぐきあとしたい行けば眞玉發行の由とびたつばかりに打ちよろこび筆走らせ申候妾は校長先生を初め御一同の先生に申わけもなき御無沙汰致し合はす顏も御座なくたゞ遠き巴峽の地にておわび致し候妾の今日此ころのなしつゝあるライフの有樣をお知らせ致し候私事大正四年及ばずながら小學校教員檢定に應試致し候ところ天運にやパス致し目下十

日市尋常高等小學校に奉職致し居候あどけなき兒童を相手に一日を送るは誠に面白く候へども職員十七名も居り候へば或時は感性を害し或時は恨まれ或時は人の性のうず衣に憂世の露を浴せかけられ故郷の夢を辿る事も幾そ度かはかられぞ候。御在校中の皆様世の中は決して〳〵お考へ通りには御座なく候御身等の美しき麗しのつどひにはならぞして驚く事の度々に候今年は第四年女子五十五名の受持にて誠に忙はしく日を送り申候別して下宿せる身は忙はしく日曜には足袋繻袢のお洗濯に追はれ時として雨さへ妾をなやまし候父は昨夏吉田町へ轉任致し候へば井口八重子さまと樂しく一日を語り明かせし事も御座候八重子様は若々しきお母様にて嬢ちやんも大きくおなり遊ばし子守と一諸に學校へお遊びにお出る由妹よりの文に見え候私事も悲しき時苦しき時はオーガンのミュージックノート手にしてうさをはらし居り候軒端を訪る五月雨も青葉をゆするそよ風も時には情なく候一時は苦痛を覺え辞職せんかとも考へ候ぞ師弟の情にほだされて再びグレートオブゼクトに向はん事を誓ひ申候人間は得手勝手なるものにして樂しき時は其境遇に甘じ辛き時は叶はぬ事をゑがくなどこゝに於て修養の必要起る事と存じ候空行く雲も其見方によりて大違ひに御座候樂觀的にながむる事の肝要に候クラス皆様お轉婆の私が近ごろ沈みがちになりたるには驚き申候之も境遇が然らしむるかと考へ居り候私事も山奥に斗りに暮し候ては世の文明にをくれ敗殘者の如く考へ近き將來に於て皆様の在すなつかしの地に參りたくそれのみを樂しみに日々つとめはげみ居り候くだらぬ事のみ書き筆おしくもなつかしと思ふ折柄月正に中天にあり夜鳥一聲殘して床に入るべく報じ申候あたりの店も靜けく筆の運びも淋しく候まゝこれにて　おさらば

鎌倉より　小川延子

前畧今日は今日はとおもふ内ついとながの御無沙汰と相成りなにとぞおゆるし下さる様お願ひ申し上候私事此節こちらに參り兄姉様のお世話になりおかげ様にて變りもなく暮らし居候間御安心下され度候我家と變り小供も大勢にておもしろく樂しく暮し時々八幡様へお參り致し由井が濱に散歩に出かけ居候御ぞんじの通り大變に景色よろしき處に御座候て日曜などは海岸は人もてみだされ居り候もはや夏のお休みもまぢかく相成候事とぞんじ候間先生様がたには御避暑かた〳〵御いであそばされては如何に御座候や樂しくお待ち致し居候　後畧

弘崎より　大籔はな

前畧さて新聞紙にてもはや御承知の御事と存上候へども本月十八日當市に大火御座候て風上に在りながら余りの强風に一時は大に心配致し申候然し消防夫ならびに軍隊よりの應援により漸く鎮火致し候へぞも何分板葺屋根を强風にあふられ候事とて飛火多く意外の方面より火の手の上るに人々あわてふためき申し候さ候へば知人の手傳ひに行きたる留守中に我家の全燒にあひたる者かなり多く御座候ひき私共の

以前の住宅もあと形なくあのまゝ住み居らんにはとやけ跡を眺めて身ぶるひをもよほし申候其後間もなく三里ばかり離れた大鰐温泉場も大部分燒失され一昨夜も當市に四五軒やけ申候なほ北海道より九州間の大火の記事も毎日見え候事とて日々の羨焚にも皆々注意致居候御地など大火などは承はらず候へども今後とも事なからむ様にと遠きところより祈り上候長き冬に雪とけもおそく從ひて春は一時に華に御座候四月より五月の初めまでは梅と櫻の盛りにて櫻の散ると共に梨の花美しく開き申候是も日々の强風にむなしく散りて只今は林檎花一二輪笑み初め申候當成田家は園藝に趣味深く表も裏も廣き庭園に珍らしき又美しき樹木草花を植えられ候まゝ様この花の順々に咲きて何時も居がらにして花見を致し居候昨今は少し冷かにて袷の著物に羽織など重ね居候御地は追々お暑さにむかひお困り遊ばさるゝ事ならむと御察し申し上候何とぞ〳〵御身御いとひ遊ばさるゝ樣なほ御校の益々發展されんことを神かけて念じ上候先は時候御見舞かた〳〵近況御通知申上候　かしこ

東京より　渡邊キヨ

花の春は去つて若葉美はしい初夏の頃となりましたが諸先生を始め諸姉上様には御變りもなく御すごし遊ばされますか其の後は何とも申わけない御無音に打ちすぎいまさら御わびの申上げ樣が御座いません悪しからず御ゆるし下さいませ第四の眞玉御發行遊ばされるにつき私しの如きふつゝかなるものにまでも消息をとの御事まことにうれしく厚く御禮申上ます私事も御皆々樣とおしき袂を御分ち申上げてより一昨年までは家庭にて生花裁縫の稽古をいたして居りましたが急に產科小兒科の事について研究いたしたくと思ひつき一年間病院へ參り昨夏上京いたしつづけて研究いたして居りますなにか經驗談をとの御事で御座いますがまだ日も淺う御ざいますのでこれとて申し上げる事も御ざいませんが此節より皆々樣方が御子樣を牛乳で御養育遊ばされます樣に見受けられますので餘白を拜借いたしまして醫師及皆樣の經驗上よろしい樣だと申されますのを諸姉上樣方にも御誕生後の牛乳營養法は御承知の事とは存じますが御參考までに申し上げませう稀釋いたしましてから消毒をいたします此の消毒の時間も種々の說が御座いますが私共は羹沸いたしましてから五分間煮て其の儘冷し用ひます時適度に温めて居りますつまらない事を申上げ紙上をおけがしいたしました幾重にも御ゆるし下さいませ申し上げたい事は御座いますが輕い筆には書きつくす事かなはぬ今度は之にて失禮いたします未ながら諸先生始め御皆々樣の御健康を御祈り申上げます

年令	稀釋度	一日量			
第一週	牛乳	一	大凡	四ケ月	二、二
第二週	水	三	三合二勺	五ケ月	一、一八
第三週	煉乳	一、一	三合六勺	七ケ月	一、十五
第四週	水	二、二〇	四合二勺	八ケ月	二、二
三ケ月	純乳		四合二勺	九ケ月	一、十二
				十ケ月	一、十六
				四合五勺	四合七勺
				五合四勺	五合五勺

回數は一日六七回一日二日は一と四第三週頃には一と二半にてもよろしきよし稀釋の時砂糖若くは滋養糖にて甘味をつけます

木原より　兼森しげ子

春葉のしげみいよ〳〵深うなりましたが其後諸先生はじめ同窓の皆様いかゞお暮しなさいますかお伺ひ申上ます時折はお便も致し度く尙又皆様の御様子共も承り度く常々存じては居りますけれどとかく御無沙汰勝になつて誠に申わけのない次第で御座いますあしからず御許し下さいませいつも樂しかつた昔をなつかしく思ひ出す度毎今更ながら月日の立つのは長い樣な短いものと驚くの外御座いません皆樣とお別れしてから夢の間に二年と遊でしまひましたもの隨分皆樣にもお變りなさつた事で御座いませう毎朝毎夕岸に立つては靜な〳〵波と共に自然の景にあこがれて居りますうして心ゆくまでも昔がたりがして見たい樣な一種云ひ知れぬ感にさまようて居りますかうして平凡な一日を重ねては本誌で皆樣の消息承り度く樂しみに待て居ります日ましにお暑さも加る事で御座いませばおひまの節は海水浴になりとゐらして下さいませ久々お話も承り度く樂しんで居りますほんとうに拙い筆もかへりみないで失禮致しました末ながら時候不順の折柄ひとしほ御身御自愛遊す樣はるかにお祈り致して居ります　かしこ

三原女子師範より　惠谷よし子

絶えて御無沙汰致して居りますが御皆々樣には其後御障りもなく御暮し遊されて居られる事と目出度存じ上げます私事相變らぞ無事に消光致して居りますから乍憚御休心下さいませ扨て春宵一刻の夢覺むればすでに庭前の梧葉に秋聲を聞くとかげに光陰矢の如く去りまして花の世界も今や青葉の床しき頃とは化しました此の度は待ちかねの校友會雜誌御發行につきてはふつゝかな私にまで近狀をとの仰せ誠に恐縮の至りに存じます何か珍しい事でも御座いますならばと考へましても平素うか〳〵に過して來た私は恥しながら好ましき材料も見つかりません併し今は懷しい皆樣と袂を分ちて三原に二部生活を致して居ります事でございますからその大畧をと思ひまして拙き筆を運びました私は此の春未だらう寒い初春故郷を後にして此の地に參りました爾來六十日ばかりの中に於きまして私の感想を申し上げて見ますと先づ最初に映ずるものは寄宿舍生活で殊に生れて初めての事故ほんとに嬉しいやら淋しいやら入學當時は殆んど夢中で只何するともなく日を過しました舍は北中南の三寮に分れ各室八人づゝ同生し互に親睦の間柄でございます特に私は友もなく二十五名の二部生の中に一人入つて物淋しく授業を受けましたりして戀しい古里に手紙を書く度に人知れず涙を拭ひましたその中に友達も出來學校にも慣れて來て非常に愉快なる日を送る樣になりました主任の先生が三人ありましても當分は皆誰の顏を見ても同じことで先生やら生徒か又は附屬の先生方でもちつとも禮等しないで平氣で通つて居りました先づ朝五時半暖い床を出て六時半までに各室のお掃除或は髪を整へたり致しましてそれから朝食八時迄は自習八時十分始業に至り午后三時に課業終りお湯も交替に入られ四時

まで運動時間五時迄自由時間で勝手にして宜しく五時に夕食六時迄運動時間で一切室内に居る事は出來ません此の時はテニス或は後の櫻山の散歩等遙に沖を眺めて瀬戸内海の一部を味ひまして其の日の結ぼれている心もいつしか廣々として實に快氣に堪えません六時から七時までは自由是より九時までが大切な默讀時間で一口も口を開く事は禁物皆一心に勉强致します是が九時に終りますと直ぐ消燈の鐘がなり電氣はぱつと消されて一同中寮の廊下に整列し夕禮を致します而して各室に歸り二分間体操を五種位して後深呼吸に終り九時半なつかしい一日中最も樂しい床に入りますそして疲れきつた體を休めて露知らぬ夢の園にさまようてひよつと眼の覺めた時はもう明い〳〵光線が入つて居ります先づこんなのが一日の行事でせう二部は一部と異り短期間の中に多數の教材を授けられるのですから隨分忙しう御座います私共の學科は教育學教育史心理論理法制修身國語數學理科圖畫手工音樂裁縫体操等で女學校で習はなかつたものは漢文法制論理黑板畫の樣なもので大抵の學科は復習的なもので御座います運動は中々盛んで土曜日には(毎週)午後聯合體操か登山等ありまして夏分は苦しゆ御座います又毎月一回遠足級會がありましてクラスの者が互に打解けた樂しい會を開いて感想なり希望なり話し或は餘興をする等私共の樂しみの一つでございます一般に女學校から來た者は餘りやさしすぎて居るし師範生は又女らしくないと批難せられます併し兩方にも又取るべき長所があるのですから二部生は實に幸であつて此の兩者の特点を取る事が出來ると常に先生から申されます音樂は中々熱心でございます併し女學校時代程樂しいものはございません二部生が集ればすぐこんな話をいつも致しますどうしてあの暖いお優しい先生や懷しい皆樣を忘れる事が出來ませう永久に印象の深い思出でございますまあ長々と愚な事のみ書きつらね何とも失禮の至りに存じます末ながら諸先生始め同窓の皆樣何卒御身御自愛遊さる〻樣蔭ながら祈り上げます私共はまだ〳〵苦しい試驗を經なければなりません今三十二日ばかりすればたのしい夏休みを迎へることが出來ます先は乱文乱筆にて失禮致しますかしこ

落谷より　金田きくよ

山ほとゝぎすの初音に何となう青葉吹く風もなつかしく成りました其後諸先生方はじめ同窓の皆樣にはお障りもなく御過し遊ばされますか日頃はとかく御無沙汰ばかり致しまして誠にお詫の申やうも御座いませんお許し下さいませお蔭樣で私は毎日事なう暮して居りますから何卒御心安う思召し下さいませ扨て先日野村樣より會誌眞玉御發行につき何か私も近頃の樣子知らせよとの御事にまことに嬉しく日頃の無音も打忘れお言葉に甘へまして何も變つた珍らしいお話もございませんけれど少しばかりつたない筆もて其後の樣子お報を申します私は昨年十一月まで四方の山紅葉して秋は盛りの頃なつかしい御皆々樣とお別れ致しまして山川へだててこの遠い地に參り

ました誠に田舍の事でございまして尾道邊とは違ひ四面は皆高い茂つた山ばかりで丁度屏風をしたような處流石に參りました當座はものさびしくてなりませんでした其上私の住居は町沿ひではございますけれども同じ庭つゞきの穩居住ひいたして居りますので世間の事何一つもきこえませず只時折裏の畑で農夫どもの歌の聲話をきゝます位で誠に閑靜な庭で御ございますからいつも思はひとり皆樣の上に走りあの母校の庭で樂しく一諸に笑ひ樂しく共に歌つた陽氣な學生時代の事にのみと次からつぎと止めどもなく過し昔の事ども思ひ出してはたゞなつかしく其の日〳〵を過すのでございますしかし近頃は大分住なれました爲めか却て靜かなこの山里もよろしくとても尾道邊では見る事の出來ないことも御ざいます

毎朝私は食事前かならず一度お庭を散歩致して居ります其時朝露したゝる本々の小路を歩みつゝ向ふ遙か見渡せば一面露におほはれ山の色畑人家普く一彩に包まれてしまひまして先十里あるとも知らぬ大洋のようかつて見た事のない私にはこの景色がどんなに珍らしく眺められます事か分りませんもし歌人でございましたなら思ひのまゝに筆取る事が出來ませうものを迷惑に存じて居ります其他私は相變らず毎日〳〵お針ばかりいたし時時分が參りませんので極小人數のまゝごとのような勝手を致します位で大した事もございませんけれども何樣新家持ちの事でございますから何するとなく家事に追はれ此頃の日永の時も一日が直ぐにたつてしまひますまた近頃私は淋しさに小鳥金魚鯉を飼ひましては毎日何よりの樂しみに之等の世話いたして居りますどうか皆樣當地方にお越の節はいつなりともお立寄り下さいませお待ち申して居りますあまりの久し振りでついくだらぬ事ばかり長々と書きつらねました惡からずお許下さいませ筆未ながら追々暑さに向ひますから諸先生はじめ皆樣方どうか御身御自愛遊ばす樣お祈り申ます終に母校の發展會誌の永しへに榮えん事をかしこ

廣島より　永井チサト

嬉しさと悲しさの中になつかしい母校を後に親しい友とつきぬ涙を拂ひつゝ東西南北に手を分ち御別れ致しましたのも最早一と年以上も前の夢と過し今は聞くもいやな梅雨の候となりました

其の後師の君を始め皆樣には御變りなく御健やかに御暮しの事と蔭ながら一入うれしく存ます私も御蔭さまで無事に暮して居りますから御安心下さいませさてこの度は御誌御發刊につき數にもならぬ私にまで御親切に御尋ね下さいまして誠に忝ふ存じます諸先生の御情け深き導によりやつと卒業いたし淋しい片田舍に歸りてはよい師匠とてもなく常に父母の膝下で平々凡々と日を送り去年九月頃思ひついた樣お琴の御稽古を始めました暇には少々針仕事いたして居りましたが思ふ樣に出來ず我ながら恥しくなり遂に許を得てやつと今當地へ來たばかりでございます今迄共に御稽古をして居りました親しいみさ代さんには御許し出ず只一人淋しく感じましたけれど幸ひ

お隣に私と同年に縣立卒業の方が居られましたのでよい友を得ましたお琴お茶は一緒に通つて居りますお茶は先日始めて參りましたばかりでございます縣立卒業生六人皆私共と同年の方で近内始められました何時も皆様の事忘れる暇とてもありませんのにこう大勢お稽古致しますと同窓の皆様の事が思ひやられ今頃は何處にどうしていらつしやるかと昔なつかしく存じます皆開けた方ばかり一度參りまして親しくなり隨分言葉等もかわし山根さんの御様子等も少々承りました

お花は流を異に致し只一人淋しく通つて居りますお裁縫は幸ひ近所によい師匠がありましてそれに通つて居ります高女卒業生三四人居られ色々學校の様子等も承ります先日買物の道すがら新聞先生に御めもじ致しました暫らくで云ふべき言葉も出ませんでした日曜日毎に兄が參ります入營〳〵と騒いだのも先日の様ですが最早半年を過し上等兵になつてからは少々樂な様申します私の如き兄弟の澤山ある家庭では左様に思ひませんでしたが旅へ參ますと只一人の兄が參りますのが嬉しく今に兄弟の有難さを感じましたそれにつけても里には父母が北海道へ出發後まだ日を重ねぬに私も出で只弟妹をのみ膝下に淋しく日を送られる事と察じられますこれからは一生懸命お稽古いたす考へでございます貴き紙上へもて拙き筆に順序もなく書き立ておこがましき次第でございます平に御許し下さいませ終に望み母校の繁榮諸先生同窓の皆様御健やかに居られん事を祈り上げます

東京にて　井出てつ

前畧歸省の日も近づきました今度の夏には歸るつもりで樂しみにして居りますお休みには御目もじも出來るで御座居ませうね同窓の皆様がどんなにお變りになつたか早く承り度く存じます四月の中頃は上村先生が御上京遊ばしましたどんなに嬉しかつたでございませう

昔とちつともお變りにならない先生と十二日には音樂學校で名古屋の生徒の爲めになすつた演奏を聞かして頂きまして風の無いのに散つて來る櫻花の下をそゞろ歩きしまして寫眞をとりに行きました事など又と出來ませうか、先々週の土曜日は阪本先生の母校英學塾のバザーでした去年はお友達もないのに入場券を買つて入つて見ましたが今度は福永さまがいらつしやるので御座いませうでお目もじするのが嬉しさに參りました所が丁度檜垣様もゐらしてね三人でもつてさん〳〵お話しましたの同じ東京に居りましてもお目もじする時はほんとに無いのでございますよ學校はあまり遠くはございませんけれどおしまひの時間がちがひまして『後畧』

時間表をお目に掛けませうか？

	月	火	水	木	金	土
一時	裁	裁	裁		洗濯講義	洗濯
二時	修	仝	家	教		實習
三時	裁	仝	仝	裁	家庭	裁
四時	仝	仝	仝	仝	裁	仝
五時	仝	造花	仝	仝	教模範實習	
六時	仝	仝	仝	仝		
七時	仝	裁		仝		

こんなんでございますよ修身と家庭教育は鳩山先生にお講義を聞きます『後略』

先日のおハガキでは私の近狀をとの事でございましたが私にはそう變つた事も御座いません。唯忙しく〳〵毎日同じことをくりかへして居るに過ぎないのでございます『後略』

尾道にて　松本智惠

忙しいお稽古事の爲めにたまに二三の方に御便りする位で時には御返事さへ失禮いたす事がございます娘といふ名の下にはお茶にお琴にお花にお裁縫には勿論の事日々にうとくなつて行く學事を氣にしながらも只ひたすらにお稽古大事とお化粧の一つも施しきちんと着こなした着物に窮屈な思ひをしながら朝から晩まで通ひ歩かねばなりません娘の子といふ者はあゝもなしければいけないのこうもしなければならないの娘らしくしなければいけないのと二口目には娘々といはれる最も華やかであつて最も短いそのくせそく縛のいちばん多くて一番よく人からは注目される娘時代は華やかといつていゝのでせうか？いやな？否えうるさい？といつていゝのでせうか紙幣くる手つきの大分上手になつた商家の娘は帳場に居る時時々こん事を思ひます

ノートの中より　若き日のイメージ　松本智惠

ト或るカフェーに美しい乙女が居りました。

エ！無論給仕なんです、それは色の白い、そして目と口の可愛い娘なんです、すんなりした体つきに何時も白いエプロンして。

あの何かお召し上りになりまして？。

一寸小首をかしげて、はずかしげにニッと笑む時。

誰だつてマア何て可愛い子だろう、と思はぬ方は無いでございませう。

クリームをなめながら。

貴女は學校は？　ッて聞くと。

女學校の三年迄。

何故よしたの？。

お内がいけなくなりましたから。

では何故こんな家へ入つたの？、

お錢の身入りが割合にいゝから。

そう！貴女が進んでこんな所へ入つたの又御両親に進められて入つたの？。

私がすきで來たの。

何故？。

お錢がいるから。

どうしてお錢がいるの？。

こゝまで問ふとこの白いエプロンの乙女はもう何にも口をきゝませんのそして無言でニッと笑むばかりこの乙女を見た時から妙に此の子の身の上が知りたかつた私はどうかしてその身のローマンスを聞こう〳〵と思ながら過して居ましたがやうやく心安い口の一つもきく様になつてこれだけの事を聞き得ましたの併しもうそれより以上はどうしても話ませんでした幾度會つても幾度話てもこれだけしか云ませんでしたりの内に乙女は夢の様に消え去つて私の目には二度

映じませんでした
別になつかしいとも見たいとも思ひませんでしたけれども形に於ては其の目と口。
身の上については女學校の三年生まで……といふ事だけはどうしても忘れられません。それにしても女學校まで行つた身の何故まあカフェーなんかへ入つたんでございませう。洛陽の都にて若き日のイメージの一つでございます

―車中にて―

汽車うごき初めて。名殘りおしまれて。さよならと云ひさよならと云ふて……
私は西へ西へ。
なつかしい加茂川の瀬々らぎを聞いた彼の夜の四條大橋。美しい京の舞姫に見とれて友達に取りのこされあわてゝ靴音高く走つた事なぞ。ありゝと見えて頭の中は走馬燈のようフト氣付いた時。私のかたはらに十一二になる女にも見まほしい男の子が余念なくスケッチしてゐる未來の藝術家氣取りの少年は私を見てニッコリ笑ひ。
名は　ゆうちやん！
學校は五年生。
大きくなつたら何になるの？　と云へば
あたい繪書きの先生になりたいや
ホホ、可愛いゆうちやん！貴方とはそれだけの言葉をかわしただけで別れました
其の他何も知りません他を知らぬだけれだけ私は可愛らしい貴方が今だに頭のどこかを去りません
小畫家のゆうちやん！それから一年余も經た此の頃貴方のスケッチブックにはどれだけの進歩をあらはしたでせう？
思ひ出しては折にふれ。貴方の末來に幸多かれと祈ります
車中にて若き日のイメージの一つでございます

栗原より　武田マサヨ

御なつかしき諸先生をはじめ同窓の皆々様には御機嫌うるはしく渡らせらる事と嬉しく存じます其の後私事も御蔭さまで日々恙なく暮して居りますから御安心下さいませこれと申すも常々學校にて身体を練えられた結果と喜んで居ります
扨て本年も例によりて眞玉御發行の由喜び樂んで居りますついてはこの私にまで何か消息を知らせとの仰せ嬉しく存じますがこれとて取り上げて申上げる言葉も御座いませんさりとてこれで筆止めるも何だか物足らぬ心地がいたしますから日常あつた事ども少しばかり申上ようと思ひます
私卒業後は暇々に御稽古事に通つて居りましたから『クラスメート』の方には度々あつてたがいに昔を語りあつて愉快に日を送つて居りましたが此の頃は我が農家の一番忙しい時ですから外出することが出來ません私は家事全部を引受けて居りますから裁縫に追はれ炊事に目をまわす樣に忙しく御座います毎日忙しい中にも暇さへあればなつかしき母校を思ひ出し今一度樂しい昔にかへりてなぞゝかなはぬ望をい

だく事もあります
此の四五日と云ふものは除虫菊を摘むのに大勢の雇人ですから忙しさが増してまゐりました
母も私が家事の手傳をするのが嘸嬉しいのでせう人ごとに吹聽して居ます人からお賛めがあれば私はちようしやですものしないでもよいと云はれてもしないとどうも氣が濟まん樣な氣質ですからいたします故夜なんか勞れて稽古事などの練習に眠たくて困る時が折々あります、私は時折の同窓會や折々のお招きには近きを幸ひ必ず參ります校長先生の御敎訓は片時も忘れてゐませんがどうも讀書いたす事も怠り勝ちで世の進歩におくれて行く樣な心地がいたします大きい方の弟に質問されると大さう閉口いたしますまあこんなによく忘れた事と自分乍ら驚きます學校時代は只徒らに遊ぶことばかりに考へましたことをかへす〳〵も口惜しい事で御座いますなほ〳〵書きたき事は山々御座いますがくだらぬ事ばかりですから之でおしき筆止めます
諸先生皆々樣の御心づくしの有益な御話承はりたく御發行の節を今より樂しみに持ち居ります末筆乍ら追々暑さに向ひますから諸先生皆々樣方くれ〳〵も御自愛の程祈上げます　かしこ

尾道より　林　良

西側に綠の美しい柳と松とのならんで居る、少し坂になつた廣い道を初夏のある日曜日の午後奇麗に敷き詰めた小石をザク〳〵踏んで二人は無意識に歩みを續けた
ゆるい石段を一つ〳〵登つて知らぬ間に學校の門まで來てしまつた時二人思はず立止つて顏を見合せて笑つた。こんな事がこれまでにも有つた
三月の終り頃であつた桃の花も半分位開いた暖かい日私は永井さんを久しぶりにお訪ねしたあまりポカ〳〵した好いお天氣だつたので『ちつと歩るいて來ませうか』といつて二人は永井さんのお宅から近い坊地の方へ行く積りで出たそして十五分位後には母校の花壇や植木を傳つて庭を歩るいて居る私達を見出したいつの間にどう云ふ氣で此處へ來たのか不思議がりつゝ顏を見合せて笑つた事が有つた丁度試驗休で廣い學校は靜かであつた北庭の桃が咲きかけて居た庭をぐるつと一巡りして歸つた事があつた
互にその時の事を思ひ浮べ乍らとう〳〵校門を入つて終つた又前の樣に自分達も手入した事が有る花壇を思ひ〳〵の事を勝手に考へ乍ら無言で歩き出したどうして私達はよくこんなに此處へ來るのか知らんこんな事を私は一人考へて見たどうしても自分乍ら分らないスクールシックとても云ふのぢやあないか知ら等思つて私は可笑しくなつて一人笑つた矢張自分の母校だもの……私はふとこう考へた時『あゝさうだ〳〵』と思はず心に叫んだ理屈つぽい言葉を並べて說明しなくつても、もうこれで澤山だこの一言で何にも彼も言ひ盡されて居ると思つたそして大發見でもした樣な云ひ樣のない嬉しさを感じた
チューリップがしほらしうに初夏の光を受けて外の

草花と花壇一つぱいに咲いて居る私達は講堂の裏を廻つて北庭へ出た寄宿舎の前の花壇まで來た時にオヤ今日は日曜日だのに大變に靜だ留守か知らと思ひつゝ永井さんと美しく咲いた花壇にかゞんで色々な事を話した。突然舍監室の窓が開いて

『オヤいらつしやい』といふ聲がした驚いて振り返つたら三木先生がニコ〳〵笑ひ乍らカーテンの間から顏を出してお出になつた『マア先生』といつて二人は夢中で立ち止つてあはてゝ二三度叩頭をして終つた

『今日は生徒が皆高須公園の方へ遊びに行きましたので淋しくつて困つて居りましたまあお上り下さい』こう云つて先生はわさ〳〵入口の方から迎へに來て下すつた二人は先生について中に入つたあつちを見てもこつちを見ても懷しい通學して居る時によく日曜日等に遊びに來た事が思ひ出される廣い寄宿舎はガランとして淋しい位靜かだ開けた窓口の青葉に午後の日が映えて皆の顏が青く見える

『毎日何をしていらつしやいますか』

先生はこんな事を私にお尋ねになつた私はよく人にこういう質問をかけられる其度に何とお答へして好いか分らない實察お答へする事が無い毎日家の中で變化の無い同じ事を操り返して居るんだから『朝起きて先御飯を頂きましてお晝まで家の仕事をいたしまして…』こんな事をお答へするより外仕方がない時々過ぎた樂しかつた事も思出されてもう堪らなくなつて袴を付けて今にも學校へ走つて行き度くなる

『馬鹿なりんな事が今更出來もしないのに……』こんな事を思つては可笑しい樣な殘念な氣になるその後で又こんな事を考へる『いや私は幸福だもう今更りんな事を思つてもつまらないこの繪の樣な故郷で少しづゝでも家事を手傳つて親兄弟の中で平和に暮して居るんだそしては時々お友達と母校へ訪れる事が出來るまあ何といふ私は幸福な人間だろう故郷を遠く去つて居る友遠く故郷へ歸つて居る友達からの私達を羨しがつた手紙の度々雀ひ込むのも無理はない』

入口の方が急に賑やかになつた手に手に美しい花束のお土産を持つた寄宿生の方が皆丁寧に『先生只今歸りました』と挨拶にいらつしやる知らない顏が多くて知つて居る顏がなか〳〵見出せなくなつたのが何だか心細いそれから皆さんに美しいお土産を分けてもらつたりして樂しさうなお話も澤山に伺つた

『あゝこの室へも來てカルタを取つて遊んだ事があつたさう〳〵あの机の邊だあの頃まだ〳〵おさげの小さかつた方がもう大きな四年生になつていらつしやるどうも不思議だ』なんでも無い事まで一生懸命感心したくなるおそくならない内にと永井さんと二人止めて下さる先生や皆さんにお別れして歸りかけると先生はわさ〳〵門までお送り下さつた元來た今度は少し下り坂になつた道を何となく愉快な氣持で歩いた今日の樂しかつた事を知らせてやる遠方の友達からの返事のどんな物であるかを想像した時私は幸福な喜びの微笑を包みきる事が出來なかつた

名古屋より　　稻崎たま子

母校ももう直ぐ十週年が來るではございませんか紫の優しい藤の花を見るにつけ嬉しかつた開校當時の事がしみ〳〵と思ひ浮びます開校式を飾る講堂一面の藤の造花をつくるのにいそがはしかつたその頃の事がはやおほ方一と昔になりましたとはさぞ御一回卒業の皆様も御變遊ばした事で御座いませう

然し日に月に榮え行く母校の隆盛を妹より聞きつたへましてはどの様にか嬉しく存じて居ります。今日幹事の御方様から是非私にも近況をとの御言葉を頂きまして誠に嬉しく御無沙汰の御わびと一方少し計記さして戴きます、卒業以來何かあちこちといたしまして少しも落附きませぬのでゆる〳〵御便りも申上げませず御申譯もなふ存じて居りますが諸先生方を始めまゐらせ御卒業在校の皆様方には益々御機嫌よくいらせられる由誠に御目出度く存じ上げます私も昨年の春までは雪深い小樽に居りましたが其後主人の渡歐と共に當地に引移りまして只今では只一人の母と陸しく物靜かな生活を致して居ります老人を慰めるのが何よりの務め位で別に大した用事もございません故今の内一と勉强をと存じて居りますがなか〳〵思ふ様にまゐりませんこれまでの生活にくらべますと訪ふ人も少く誠に單調なものもございますがそれでも留守を預ります身の上いろ〳〵な責任を皆引受けますので相當の心配もございまして遂々空しく過しますのでございます當地には別段取り立て申上げます様な事もございませんが何卒以上上京の節には一度御立寄下さいます様近々御發刊の『眞たま』により皆皆様の御消息もいろ〳〵何かがわせて頂く事と今より樂しみに致して居ります

末ながら校友會の益々發展をまゝ皆様の御幸福を切に御祈り申上げます

福山市より　谷本かめの

花笑ひ鳥歌ふ長閑な春もいつしか過ぎ去り早入梅の季節と成りました諸先生をはじめ同窓の皆々様には御機嫌よく渡らせられますか御伺ひ申上げます私は變りなく暮して居りますから他事ながら御安心下さいませこの間幹事の方から第四眞玉御發行につき御様子をおしらせになつては如何ですか是非〳〵との御親切なるお葉書がまい込みました私も永く御無音に打過ぎましたが皆様の事をとんとお忘れ申したのでは御座いません例の筆無性者にて心ならずも御無沙汰いたしお詫の申様も御座いません平にお許し下さいませ私も當地に參りまして最早二年餘になりますが別にこれと取上げて申上げる事も御座いません只々毎日裏の座敷にて母と共に話しつゝ裁縫をのみ致して居ります午前中は大人ばかりで誠にひつそりとして居りますがお晝からは今年九歳になる妹が學校より歸りますと私も元の子供になって『今日は五月のお節句で』などゝ歌って今までの淋しさは何處へいづたやらと思ふ位夢中になつて歌ひはやすのがまあ一日の樂しみでせうか様な平凡な日をあきもせぞ送つて居ります様な有様で御座います末になりましたが時節御皆々様ます〳〵御自愛の程を祈り上げます

吉田より　井口八重子

色づきたる麥はいつしか刈られて早さ乙女の玉苗植うる頃ほいとは相成申候折柄師の君樣始め同窓の皆樣にはいと御健やかに渡らせらるゝ御事と御察し申上げ候下つて私事は恙もなく日々單調なる田舍住居を續け居り候間憚ながら御心易う思召下され度候待ち佗びたる眞だま發行も間近く成り久しぶりに皆樣方の御消息承ることかと誠に嬉しく就いては私事も御尋ねにあづかり廻らぬふでも顧ず書つらね申候母校に盡きぬ別れ致してより知る人とてもなき當地に來り幾度か東の空を眺めては先生方を始め同窓の友に憧れたるに永だるにしはたへざりしとて見る昨年の夏酣なる頃はからざる友二人まで得此嬉しさはなかく〳〵に候へど悲しき事には休暇中のみのことで御目にかゝりしみ〳〵語り合ふさへ心にまかせず誠にまゝならぬ事よと殘念に感じ候時々機をる事も候へども日毎の針仕事を語るべき友もなく心はいつしか御地の空をさまよふ心地して學びのやに樂しく過せし昔のことども次から次へと思ひ出されて今度彼の地をふむなれば是非母校を訪れんものと心を定め來るべき日を樂しみ候へど其場となれば連れもなく一人で行くは心許なく感じて唯御目もじ致せし眞上の方に心ばかりの言傳して歸る心の内御察し下され度もし三次の鮎舟へでも御越の際は必らず必らず御立寄り下され度候今春四月頃も毛利公の二令孃當地の御墓に參詣遊ばされ候間余り田舍ぢかしにもなり兼ね申候末ふでながら睹先生始め皆樣の御健康を神かげで祈り上げ候　かしこ

尾道にて　西中篤

昨年の眞だまに第一回生のもの見當らざりし故今年は元氣を出して何か書かんとは思ふものゝ昨今の自ら暇の無きには候はねど心多忙にして考へる餘裕を持たず候さる故手よごれに汚れた一日日記の中より一日一詠をぬいて腰折ながら消息にかへ可申候

臺所にて

流下立ち働けば初夏の曉の風ネルの裾ふく。
夕飯終へ濱に出ればまろらかな島の青葉に心ひらくる。
手拭を目深にかむり糊張れる我し思へば初妻なりき。
つとに起き厨に立ちてエプロンをまとわんとせば石鹼の香よし。
湧く如き船況の初夏さゝやかな船渠ドックの船下しかな。

實家に生母のみとりして

胃癌なる母の白粥煮てあれば柿のわくらは一葉散り來ぬ。
黄ばみたる公孫樹の下を鳩の飛ぶお寺に母の病つのりき。
みくじ引き病本復とわずかなる事をも今はよろこびてみぬ。
何物も好めるものは皆たべとくすしの言葉に泪さしぐむ。
氣持や勝れし日には子等のため生きんと願ひすかぬ牛乳ものむ。
かにかくと事とまやかに語るなる母の言葉は死後に及べる。
死するてふ事を輕くも諦らむる母さみしめば見るもの悲し。
木枯の荒む夜更を背を撫で時計さみしく三つ打つかよ。
此の月日涙と共に明け暮る、近く亡びん母をおもへば。
强く生き金剛堅固の信念に今死にゆかん母の尊し。
美しき御佛になるとておそろしく痛せし顏にも笑をこはせり。
釋尊の入滅の日ぞ今日の日に死にたしなぞと云ひ暮しにき。

意識やうすらぎゆける母は尙口癖のごと子等の名を呼ぶ。
いさゝかの苦しむ樣もあらなくに眠るが如く死にたまふ母。

母の死後を

母上よあゝ事きれし母上よ此の世の名殘りの姿悲しも。
みあかしを晝をあざむく佛間にて通夜する宵のものかなしさよ。
今更に母が白骨眺め入り泪さめ〳〵下る雨の朝。
ぎんてふの皆咲き揃ひ一庭の春の香高し母の喪に居ぬ。
心なき人の記憶にすてらるゝ頃なり母の百ヶ日かな。

生名より　村上下枝

今宵紫の戸たゝく水雞の聲いと哀れに燈火わづかにかきたてゝよりろふ文机の下窓の若枝に吹き通ふ風の音に聞入て居りますと又しても思ひはいつか故郷の方に馳せ行きて何處からともなくほのかに匂ふ口なしの香にそゞろ過ぎこし方が偲ばれてたまりませんん毎日毎日いやにうつとうしい五月雨のこの頃御なつかしき皆々樣にはいかゞ御過しで御座いますか御伺ひ申ます私も去年の秋ゆく日住みなれた故郷の家あの灯に美しい港の町を永久に去つてこの地にまゐりましたが數へて見れば早半年は流れ去つて終ひましたほんとうに月日の足の早いのには今更驚く外は御座いません

たゞの十日も一人で故郷をへだてた事のない私で御座いますもの初めは隨分と心細う御座いました磯うつ波の音高く眞暗い闇の沖にいさり火かすけくまたゝく夜なんかボーと夢の樣に遠くへ消えて行く瀛笛の音にしみ〳〵と父戀ふ涙に暮れた事はいく度でせう？淋しく波の彼方に沈んで行く入日に向てたゞづむ夕べ又しても海のあなたの故郷を偲んでは幼くて母の愛をうばはれた二人のいとしい妹の上など思ひ出は次から〳〵へと湧いて來て人知れずむせび泣いた事はまた幾度で御座いましたでせうしかし住めば都の諺にもれず日一日と馴れてまゐりました今日この頃さまで淋しいのも感じなくなり心安かな呑氣な生活に日々を過して居ります塵多い巷を外に山紫に水きよき磯の家にたゞ一人世に殘りし淋しい父を少しでも安じたいものとうれのみを祈りつゝ毎日樂しく家事にいそしんで居ります何と云つても田舍の事とて都會の樣なにぎはしさ華やかさは御座いませんけれどまた其處に捨てがたい趣きが澤山御座いますさら〳〵と心地よい葉ずれの音を耳にしつゝ朝露ふんで細道をそゞろ歩きします時田の面をスーと流れくる緑の風に雨の樣にまろび落ちる玉のつゆの美くしさ人の子はまださめない朝もやの海原にろの音のみ聞えて姿はみえぬあま小舟磯馴れの松に殘りの月淡く掛つている等實に何とも云はれません

いさゝ小川のつゝみにはうす紅のなでし子もほゝ笑んで居りませうこなたの丘には月見草も夢見る樣にうかんで居ります星美はしい宵々には螢も亂れ散つて居ります詩の樣に靜かな里温かい自然のふところにいだかれて人々はおぢらずたかぶらずせつせと忙しいこの頃を立ちはたらいて居ります質朴な村私の心を養ふには最も適して居ります忙わしい家事の暇々には少しづゝでも身の修養に務めて讀書もいたし

て居ります繪の樣な四方の眺めに好きな歌筆もにぎつてみますしかあい〻草花もいじつて居ります小さい猫のひたひ程の所ながら自分の丹誠が日に日に表はれて行く樣はほんとにうれしい物でございます此れと云つて珍らしい事もございませんたゞ相變らず健かにとのみくだらぬ事を長々と書きつらねまして失禮いたしましたたゞ今十時打ちましたいつの間にか又雨が降り出しました涙をそゝる樣にさるかになつかしい皆々樣を思ひうかべつゝ一人ともし火のかげに筆を馳らせて居りますこれから追々あつさに向ひます何卒師の君はじめ皆々樣方ぐれ〳〵も御身おいとひ遊ばしませ

六月十八日夜十時　　五月雨の窓にて

京城より　池龜琴

月日の立つに早くて校友會誌も第四號御發行の由師の君皆樣のおかげにて年々榮えますのが嬉しく思つてゐますつねづね心にはかけ乍ら筆不精者でついつい御無沙汰がちになり皆樣の御樣子も存せぬ嘸御變り遊ばした事と今から會誌を樂しんでゐるやうな次第で御ざいます此度はこれとて別にとり立てゝ申上げる事も御座いませんがたゞ本年の寒さのきびしかつたのには驚きました内地も一般にお寒むかつたやうでしたが當地などは十數年來往んでゐる方でさへかつてこんな寒さはしらないと申されてゐた位でございました朝鮮は三寒四温と申ますが昨年の十二月の末から本年の一月十日頃まで零下二十度などゝ云ふ日ばかりつゞきました海は勿論雜貨屋などの麥酒の瓶が澤山破はれたそうです湯でさへしばらくすれば氷る有樣で堅氷在髯といつても誇言ではありませんでした内地にいらつしやる皆樣には御想像も出來ませんでせう本年は夏も隨分暑いやうに思はれます冬が寒い年は夏も暑さがきびしいそうで御座いますから何とい厘ても内地が一番住み心地がいゝように思ひますが當地はのんきな所で一度朝鮮で生活した方は内地へ歸つても又すぐ來たくなるさうで御ざいます私も渡鮮して二年にもなりますが別に變つた事もなぐ無事にいらしんでゐます同窓の友に逢ふ事もなく淋しく暮してゐますけれど思ひがけなき小學校時代の友逢に逢ふ事もありまして異鄕の空では殊更嬉しくなつかしいものです近ければ同窓會にも出席してありし學生時代のお話などいたし度思ひますが海山はなれし當地ではどうすか事も出來ませんたゞ時々會誌をみてせめてものなぐさめとしてゐます當地では至るところに楊柳が植へてありまして何れも青々として夏の清々しき氣分がみなぎつてゐますポプラと云えば母校の庭を思ひ出します私たちのゐました時は三四尺程でしたが今は隨分大きくなつてゐる事とそゞろに學生時代の事がしのばれなつかしくございます皆樣御暇の時は御便より御めぐみ下さいましそして異鄕の友をなぐさめて下さい

尾道にて　高竹よし

花や月にと夢に夢見る心地で樂しく面白く暮した陽

氣な春も何時しか去つて今はもう何處を見ても青葉ばかりまるで綠の世界とでも申しませうか　かやうに四季折々隨つて變りゆくと同じ樣に私共も今年の三月榮えある卒業式を最後に西と東に袂を分ちましてより今はもう卒業生と名のつく者となりました初心な乙女が世間てふ二字を知り初めましてより丁度三ヶ月目月日の經つのは早いものとは知り乍らかくまで早いとは。未だ生徒で居た頃「卒業したら度々母校を訪れやう」とは堅く心に誓ひましたものをだぐわけもなく例の無性者からつい〳〵心にも無い御無沙汰致しましておわびの申し樣もございませんが何卒お許し下さいませ

その後師の君樣を始めまつり母校の皆樣には御健かにお過しの御事と蔭乍らお喜こび致して居ります

さて私事もお蔭樣にて日々恙がなく裁縫に通つて居ります他事乍ら御安心下さいませ同窓の皆樣にも御出身の後は色々とお變りの御事と察してをります早く雜誌『またま』によつて御樣子承り度う存じ樂しみに待つてをります下らぬ事長々と書き續けましたがこの頃は日增しに暑さが嚴しうなるばかり一入御身御大切の程伏してお祈りいたします末筆乍ら益々母校の發展をお祈り申し上げます

高　師　よ　り　　池　田　政　子

綠の風そよぐ頃となりましたがおなつかしい母校の諸先生始め同窓の皆々樣にはお變りなくお暮しでございますか私も四年間學びました母校と別れ友と別れ父母と別れ故里と別れて遠い奈良の都に遊學に參りまして以來最早二ヶ月以上になりますのに皆樣に御無沙汰ばかり致して居ります何卒惡しからずお許し下さいませ

四月六日夜みなぎる望みを持つて皆樣とお別れ致し十日いよ〳〵高等師範に入學しました時どんなに嬉しかつたでせう自己のベストを盡して勉强し德を磨き師の君の御恩に報いんと決心し重任の重大なる事を今更切に感じ毎日諸先生より種々御敎訓して下さつた事を思ひ出して一歩でも早く知を進め德を修め樣と勵んで居ります學校の程度は私が想像したよりは高く私の樣な愚かなものは人一倍苦勞いたします裁縫は一週八時間しかございません今頃は本裁單衣女物を縫うて居ります學校だけではとても進みませんので舍に歸つて致しますから一寸のひまもございません英語は母校で程度が高うございました爲め今少しは樂でございます一番困りますのは理科でございます今力學を習つて居りますがむつかしくて大困りを致して居ります試驗は二回あります第一回は五月廿四日から廿六日迄でした始めてゞ失敗しましたので第二回にはきつと取り返さうと決心して勉强してをります母校を代表して來てゐる私が惡い成績を取りましては親切に敎へて下さつた校長樣諸先生に對してすみません自己の出來る限りのベストをつくしてそれで出來ないならば仕方がありませんあゝ私は歸り度くて〳〵なりません靜かな夕べなど花園を散歩します時あの清らかな月が淋しく山の端から上り

ます時等にはたまらない程故郷の皆様がなつかしく偲ばれまして語る友のないのが悲しうございますうの時の私の心を慰安して呉れるものは音樂です淡水色に暮れゆく奈良の空氣を吸ひ乍ら寮の壁にもたれて私の好きな『母のなげき』や『夜の調べ』等を歌ひますその時が一番たのしいのです貴く美しい音樂が私の始めての寄宿舍生活の淋しさを慰さめてくれるのです運動も盛ですけれども私は少しもしないで唯芝生の上に座つてテニスなどを羨やましく眺めて居る許りです今はテニスをする元氣もなくたゞ赤く實る苺畑や咲きみだれたバラの園を散歩するのが關の山です私の舍には十二人をりますがどなたも親切でございますから大變心強く思つてをりますまことに家庭的でございまして舍長が一人に副舍長が一人居られますうして色々親切にお世話をして下さいます炊事も一日一人づゝで致します献立も注文も一人づゝで致します私も馴れないながらも一人で炊事をしてをります廊下玄關食堂浴場洗面所理髪室勉強室兼寝室も毎日掃除をしますし土曜日には石鹸みがきを致しますのでほんとに奇麗です一つの部屋に四人づゝ居ります押入も本棚も本箱も箪笥もあつて少しも不自由なく勉強か出來ますが默學の時間等四人が机を並べて電燈の下で勉強しますが私が一番早く舟をこぎ始めますどうしてこんなに眠いのか不思議でなりません朝は五時起床ですから授業開始までには自習時間が澤山ありますこの校は自學自習の精神で生徒を敎育し又生徒も將來重い責任を持たねばならないので各自が自己を向上せん爲勉强もし德も磨きますので規律正しく凛とした所があつて心地よく感せられますそれ故如何になりましても行爲が惡うございましても敎官も上級生も少しも干渉せられませのので何だか恐ろしい樣な感じが致します同じ學校から來た方は一人もないのでたゞ同縣人の方が友なのです杉野校長先生に山中で敎へて載かれた兼吉樣と河内樣といふ方を知つて居る許りです一見識ある方許りで女學校の樣に親しく話す事も出來ず唯自分で自分の心に語るより外にはないのですほんとにやる瀬ない日を送つて居るのです以上述べました樣な次第で一寸もひまがありませんのでつい〳〵心ならずも御無沙汰致して居ります夏休みも目前に迫つて參りましたお會ひしてたのしくお話しする日を待つて居りますほんとに私等の學校は程度が高うございましした今更感謝せずにはゐられません殊に英語に於ては全國の普通の女學校に比較しても一位より下には落ちないと思ひますけれど私の樣に不眞面目であつたためその立派なる腕を見せる事の出來ないのは殘念です諸先生始め同窓の皆樣これから段々暑さに向ひますから御身御大事に遊ばしませ皆々樣の御健康と本誌の發展とをはるかにお祈り申して居ります

郡須　隆枝

若葉の風の凉しい頃となりましたが御なつかしい母校の諸先生初め同窓の皆々樣には御變りございませんか。四年間棲みなれた尾道の空を後に私は親しい

母や弟妹の愛らしい面を眺めつゝ長い月日を田舍に送つて居ります。母は弱き身にて社會の風波にあたり困難なる商業と戰ひつゝ雇人の指揮から小供の世話まで數事に心を用ひ一刻として胸の休む間なく毎日〳〵頭を惱まして居るやさきへ歸つたのでございますからお針は山の樣に積み上げてありますので私はそれを引受けて致してをります。又弟妹の守も一通りは忙しく臺所もやり洗濯も致しますので長い夏の日も短かく〳〵思はれます。又此節は田植麥刈で農家に取つては一番忙しい季節で御座いますので私の内の樣な農をしない家でもこの爲に商賣の方も忙かしく毎日灯がついてからお夕飯の仕度に取りかゝる樣な事でございます。それでも一週間に二度づゝはお茶の練習も師について習ひ刺繍も暇々にやつてをります。こんな風で母校へ伺ふ事とて叶はず友達より下さる御返事さへおろそかになり誠に相すみません。何卒惡からず御許し下さいませ。承れば近日の内に眞玉御發刊の由何より樂しく待つて居ります、終りにのぞみまして母校の御發展諸先生方の御健康を祈り上げます

臺灣たより

高橋春子

炎帝はや何方より來り給ひてかいつしか綠葉みなぎる夏の世界となりましたも早内地もよほどおあつくなりました事と御察し申上げますはるか北の方にはします諸先生はじめ皆樣には御機嫌よくいらつしやいますか私は誠に申し樣もない御無沙汰致しました事何卒御許し下さいませ扨て第三號のまたまを拜見致しましたのはつい昨日の樣な氣が致しますがもう第四號御發刊のよし益々校運の進み行く事をうれしく思ひます。また先日は幹事方より何か富地の模樣通知せよとの仰せ今更御辭退するも心もとない業と存じまして私が渡來致しまして今日までの事をあらましつたなき筆もかへりみずしたゝめませう私はなつかしい二十余年も住みなれた尾道を後に一昨年まだうら寒い二月廿七日備後丸に乘つて門司港をはなれました音に名高い玄海灘も割合に穩かでした何しろ六千數百噸といふ大きな船でございますから船に弱い人でも皆元氣です又船室の完備してゐるには驚きました夜に入ると芝居浪花節落語及余興もございますので皆々うち集まりお船のあれも不識の間に眠につきます廿九日の早朝甲板に出てあちこちの景色を眺めてゐると間もなく大きな太陽が地平線から出て波の色が金色になる樣は何ともいへません内地で冬を致して參りましたが最早一枚の羽織もぬがなければならないやうな感じが致しました朝四時頃目が醒めましたので空想に耽つてゐますと甲板でアンコートの燈火が見えるといふ聲がしました臺灣にいへの燈火といふ話ですから横になつたまゝ見ますと左手の方に赤と火の光がはるはる光つて見えますこゝより基隆に近いといふことでございますうつゝの夢でゐますと早基隆港についてゐまし先づ第一に目を引きましたのは龍頭首の船にのつた土人が唐の繪にもある樣なさまして本船目掛けて進み來りまし

たまもなく岩壁横づけになると土人が熱帶の果物を持つてまわり指食の絲ぞることが出來ませんが頭に辨髮をだし婦人の纏足を見た時はこわい樣な感にうたれて暫時佇んで居りましたキールン港に上陸致しました時は浴衣でも結構でございましたがこゝから沿岸線にのつて澎湖島に行けますけれど本島の景色を見ますのも一興と思ひまして直ちに汽車に乘り臺北に向つて出發致しました臺灣といへばすぐ生蕃を連想致して居りましたが臺北は實に諸官衙の規模の廣大なる市區の整頓一である實に驚きました天空をます大廈高樓赤に紫にとりどり華かな電燈をかゞやかせ二階造りの家屋東京の銀座もかくやとあらんばかりにおもはせました夕日が大屯山に入ると又瀧車に乘り淡水鉄橋もうちすぎて臺灣第一の富豪林家の邸宅をながめながらいつしか車中にて眠りましたかまびすしき音に眠をさましますと今早次は臺南なればと色々と仕度をして居られました途中の名高い新高山熱帶のけしきは殘念ながら見る事が出來ませんでした臺南は流石南部第一の都會でことに熱帶のおもいをうかばしめました郊外にはビンロー樹の林溶樹の枝をまじえて數十間のはびこつた木蔭にあやしげなる土人の佇みてこの日中のあつさをしのぎつゝありますまたいつぞや在學中學びました印度の景も眼の邊り想像せられました千草の花は咲き盛り常盤の色の變りなき草木はいと青々又ハナヽアナヽスは赤く黄色に美しき色を帶び椰子の木かげに水牛つれし涼む者の稚子はいと可愛らしく見えました臺南より約一里に余る途中を台車に乘り安平にまわりますとそこよりテッパイといふ徑經一尺二寸の竹であみつくつたあやしげな舟に乘り艦を前におしながらその間のきけんさたとへ樣も御座いませんしかしろれも土人は何のくもなく約二十町の沖合に泊つて居ります本船めがけて漕いで行きますそこから本船にのつて好宮へつきました好宮は少さい時浦島が龜にのつていつた龍宮といふ話をきいて繪で見たことが御座いますがほんとにその通りで市街の周圍は一丈有余の白珊瑚を積み上げ城壁をめぐらし中に太古の支那風な高樓の雲にそびえてゐる樣な海に浮べる別天地海ともいへません一週間位は城内外を見物と出かけました私の第二の故郷かと思ふと何となく心細く感せられましたが一二ヶ月と月日のたつにしたがつて土地の有樣もわかり段々と故郷より住みよくなりました市街には内地人三十人も居りまして澎湖廳重砲兵大隊要港部醫院郵便局測候所税關憲兵分隊衞戍病院公學校などの官衙が御ざいますこの地名所舊蹟等十人隊とて明治廿七八年戰軍の上陸した時疫厲の間に斃れし將士千人を埋瘞して氏名をつけたのでございます又松島紀念館とて皆樣も御承知の通り松島艦が海軍士官を乘せ遠洋航海の途次馬公に寄港し港灣内にて火藥爆發の爲沈没した軍艦を引上げ澎湖公園内に紀念館を建て又倶樂部や音樂堂をつくり木を植えて御座いますから綠蔭に三伏の暑さ忘れさす爲散歩しに出かける者がこゝに絶えませんその地昔フランス艦隊此島を占領いたしました時は水師提督ク

ルーベーのこゝで病死した墓碑も御座います又立派な市場も建つて居りまして四季折々の野菜は勿論内地物にいたるまでいつも青々として軒にならんで殊にお魚の多きことは台灣全島第一でございましていつも本島に移出します春三四月頃となりますと毎日何百といふ鯛の市場内に山をなしたゞ五錢で求められますから婦人方は皆こゝに集りこゝよりさげて歸ります台灣ときくからに只々あついことゝ想像なさいますが土用日中では寒暖計は却つて内地よりかよほど低き事も御座います一日中でのお暑い時間の長いとの事ですが澎湖島は四海を撓としよほど凌ぎよくございます冬一二月頃は内地と變つた事もなく冬の仕度で火鉢のほしい事も度々ございます八月になりますと淡白高潔な月が中空にかゝり領臺以前は支那より此月を見んが爲に態々數十海里の波とうに船を浮べ觀賞せしと聞いて居りますしかし十月頃より翌年四五月頃まで北風吹き荒び黄塵万丈の有樣で草木は枯死し折にふれ鹹雨が襲ひ來つて一草木も殘らない有樣でございます又交通は杜絶して一ヶ月六七回の定期船もその數を減じ數回となる次第で御座います私は好宮衛に長い間住ひ度すと思つて居りましたがさる四月総督府の命令で主人が海上をへだゝる事五海哩の漁翁島小池爭に轉住いたしましたので今は漁翁島の人となつて昨年二月末生れた暢坊を相手餘念なく無事に暮して居りますも早片事まじりに何かわからない事を語るやうになりました早く『母ちやん』と云つてもらいたい等初めて母となつた私にはこんなにつまらない事でも樂みになつて日のたつのが待ち遠くて〳〵月日をかきよせ度い樣で御座います當地は田舍の事で御座いますから土人の生活の程度も低くとてもお話にはなりません只一年の内土人の常食の落花生黍さつまいも等を收獲するのみで其他は何も出來ませんから冬になると男はほとんど本島に出稼を致しまして家には女と小兒ばかり躑足女の海岸に出て實をとり居る事も一興で御座います只今は數海里沖合の數十隻の帆船が鰹取りに行き早朝頑丈な漁師が船に魚をのせ濱邊に歸りくる樣は丁度吉和村の事をも時々思ひ出しますこの他燈臺や砲臺も御座います當地にまゐりまして日尚淺く充分なることが出來ませんから後の便にまはします急きましたので文に前後誤点も多々御座いますが何卒御許し下さいませ終りに諸先生の健康を祈り幹事のお勞を謝し奉り眞玉の益々發展せんことを遠く　南の國より

かたみの手紙

左に掲げますお手紙は昨年卒業後戀しいお母様のゐます米國においでになりまして。間もなく病魔の襲ふ所となりお手厚き療養も其功なくとう〳〵あの地でおなくなりなさつた故岡田かつよさんからいたゞきました最終のものでございます

あの學力にあのお元氣將來大に望みを嘱して末を樂んで居りましたあの方がどうしてまー思はず愚痴がこぼれます。永い〳〵御辛抱の末やう〳〵の事で海上幾千里夢寐にも忘れぬ懐しい母様に逢ひやれ嬉しやと思はれたも一時恐ろしい病の手にとらはれて短かい一生を終られたのでございますお母様はまーどんなお心持がいたしませう何とお慰め申上げてよいやら涙の外に一の言葉を見いだす事ができません

昔の人の命なりけりの句もそゞろに思ひ浮びます。命さへあればたとひ幾千里幾万里八重の潮路を隔ていましても又逢ふ時もございませうが幽明已に境を異にしては幾年まつも何の便りがございませうせめてあの方の手になつた最終のお手紙を永久の記念と存じました

米國より　岡田かつよ

前略私事相變らずと申ます内なつかしい母國を去りましてから十五日間海上何の故障もなくて去九月七日シャトルに上陸十何年目で母にも逢ひまだ見ぬ弟にも逢ひましたそしてなつかしい父上にも逢ひました。せめてみる此白骨が生ある父上ならんにはとそぞろ悲しうございました。少し身体の治療をせねばなりませんのでタコマの地をふみましたのはそれから十七日の後でございましたもうこちらの九月はよほど寒うございますのでなれない風土に健康を損ひまして御無沙汰をいたしました。此頃は身体も丈夫になりなれてもきましたので弟と共に學校にいつて居ります一番下の級で小い人と一所で只英語だけ習つて居ります。先生のお話が第一わからない事が多いのでございますしかし生徒もたいへん親切學校の先生も親切で御座いますそれに日本人だからチャイニイスだからといふ様なへだては一寸もありません

當地には日本人も澤山御座いますので白人學校へも日本人の子供がよほど居りますが多くは當地で生れた子供で御座います私共の様に大きくなつて來たものも御座いますけれどそんな人はたいてい男子で御座います學校は八年生までありますからボイスクールになるので御座いますみな子供は快活で御座います白人と云へば背の高い大きな人とのみ思つてゐましたがそれと限つたことも御座いませんとみえて白人でもぜいぶん小さい人もあります然し総べて皆体格が立派で御座いますそれからこちらでは若い人よりも年寄の方が割合に派手な風をして居りますそれに何でも自分によくうつるすきなものを用ひるといふ風に見られますどこまでも自由平等を尊ぶ國で御座いますそれから交通や市街の美くしい事等については申上げるまでもなくどこまでも文明で御座いますすべての事が時間的に行はれて居る様に見えます一つ感心出來ない私のこちらへ來て第一に特に感じた事を申上げると道を歩きながら物をたべる事で御座いますすれも然したれでもといふわけではないだらうと存じますけれども。先日は天長節やら立太子式といふのでこのタコマでも同胞は家業をやすんで盛んなお祝ひの式等が行はれましたあんな時

日本人ばかりで大勢一同に集まつて居りますと母國に居る樣な氣が致します此一週間は大統領選擧で米國人のさはぎ樣と云つたらありません火曜日の夜等このタコマでも新聞社の前の方はあまりの人出でオーリンピールも一時は不通になつたつて新聞に出て居りました今日の英字新聞でみるとキルソン氏が當選だと云つて弟は大喜びをして居ります私の內で皆んなが話しますのをきいてゐますと世の人は多くウイルソン氏を選擧するだらうつていつてゐます此の國では女子に選擧權のある衆が十四あるうで御座います私の內の店のあるのはブロードウエーで御座いましてこの邊には日本人の店が割合に多う御座います。町はABCDEFGHIJKとなつてKストリートがいちばん高いので御座いますこのストリートを橫ぎつて居る道はそれですからみんな阪になつて居りますしかしストリートはコンクリトや煉瓦できれいに造られてありますから雨が降つてもお天氣の日と一寸もかはりはありませんこちらは秋になると雨の日が多いうです雨の日の夜はストリートが電燈の光に反射して殊更に美くしう御座います眞直ぐなストリートの廣いのに兩側には電燈が正しく巨離をおいてならんでゐますタコマはシヤトルに比べると少し田舍で御座いますそれでシヤトルよりは靜かな點があります外を歩いてゐるとまだ廣い餘裕のある國だと云ふ事を思ひ出すこれから日々に寒くなつて雪が澤山降ると云ふ事で御座います然しウオシントン洲は北米の內でも健康地であると云ふ事で御座いますこれからサンクスギビング、クリスマス等が近づいてやがては大正五年も行くので御座いませう先生ほんとに私のためには今年はたいへん早くたつてしまひましたこちらへきて見るとほんとに自分ばかりつまらないあはれなものに思はれます一奮發して修養せなければなりません丁度フアミリーのあるのはたいへん靜かなストリートで御座います日本人の敎會も近くに御座いますし日曜日には母上と一緒にまゐります國語學校もごく近くに御ざいますセテルスクールへは二十分許りで行かれます今度はこれで筆を止めますお寒さのみぎり御身御大切に祈り上げます諸先生や舍の皆樣へ失禮ながらよろしくお傳へ下さいませ。

先生何處も同じ秋の夕ぐれと申しますが母國をはなれてゐるものゝ上には殊更に秋は物を思はせます私の室にはいつも皆樣の寫眞をかざつてなつかしい思ひ出をくりかへしそゞろに昔をなつかしう思ひます先生去年の天長節の日の松茸狩のタノシサ運動會の事等思ひ出すとたまらなくなります

附錄

同窓會員名簿

第一回卒業生

◎印は幹事

現住所

尾道市藥市堂町　旧姓栗村◎西中　天野千代子
尾道市長江町　旧姓生酒◎生酒　稲田サコト
尾道市長江町　旧姓宇佐井出上　千代花
安藝郡中野村　旧姓小川辻　その
松山市港町　旧姓小倉　小倉　ひで
大分縣宇佐町　旧姓大崎森　ハナ
東京市本所區千歳町四八番地　旧姓大田垣小田　マサヨ
岩國町魚町　旧姓柏原　水河光代
東京市外中澁谷六八三　旧姓金丸　河村初音
比婆郡東城町　旧姓佐々木佐　伊藤菊野
尾道市土堂町　旧姓末田　來留島
蘆品郡府中町　旧姓桑田　楠戸エイ
東京市神田區猿樂町一七　旧姓桑田　河本キミ
備中都窪郡帶江村　小西ワラ
沼隈郡今津村　旧姓齊藤　野崎幸
尾道市久保町　旧姓榊原　補戸千代子
名古市古池町　死亡
備中倉敷　首尾木露子
御調郡糸崎町　眞田フミ
青島深山町十番地　旧姓高木　秋葉勝子
臺灣澎湖島小池角公學校　旧姓川崎　高橋春子
尾道市土堂町　旧姓田中　田阪花江
福岡市住吉町住吉町八二二ノ八　旧姓田中　伊達房子
東京　御調郡栗原村　富土屋フヂエ
御調郡市村　旧姓富田　富田サカエ
尾道市尾崎町　旧姓堂野　堂野チトセ
買茂郡竹原明神　旧姓中野　中野愛子
兵庫縣上郡町　旧姓永井　長安信子
長崎縣佐世保町　旧姓永井　橋本光
尾道市米場町　橋本
尾道市鷄師堂町　橋本キク
大坂市北區福島北一丁目　旧姓橋本　檜崎クマ
名古屋市板屋町　旧姓平田　檜崎クマ
尾道市十四日町　旧姓神原　神原久枝
芦品郡府中町　死亡　松尾初代
廣島市三川町　惠谷グマノ
嶋根縣濱田町　安長フジノ
安佐郡可部町　浅井フデ
尾道市土堂町　旧姓山下　吉岡繁子
神戸市布引町　旧姓山路　湯
大阪市南區天王寺上ノ宮内　旧姓吉原　高田ミキノ
門田ツヤ子

第二回卒業生

尾道市長江町　旧姓阿蘇◎阿蘇カチル
東京市神田區錦町一丁目　旧姓井上　花本ミチヨ
愛姫縣新居郡中萩村　伊藤ハルエ
御調郡因島長崎　旧姓池田　高邸テルヨ
尾道市久保町　◎上田静江
尾道市久保町　旧姓宇坪　佐藤ヒサコ
弘前市鷹匠町六七　死亡　大本コト
福山市明法寺沖　旧姓大藪　大藪ハナ
福山市下市　旧姓岡　岡セキノ
神戸市奥平野筋　旧姓梶田　谷ウメノ
御調郡向島　旧姓川本　古谷スエ
米國シヤトルメーン街六〇二東洋商會　旧姓木原　村上トミ
神戸市加納町二丁目　旧姓木曾　繁田チヨ
廣島市段原村　黒木ノブエ
尾道市長江町　栗井トクノ
尾道市久保町　小林
尾道市土堂町　◎榊原　滿江久
愛姫縣三ヶ濱　旧姓末平　小林ヌキ
尾道市十四日町　旧姓谷口　池田芳子
大阪市南區難波赤手拭稲荷神社境内　旧姓田阪　田阪マス
旧姓立上　岡本ヒサヨ
尾道市土堂町　旧姓豊田　高田玉子
高田郡吉田町　井口八重子
福山市西町　旧姓中川　中川秀
朝鮮京城御成町　旧姓中村　池亀琴子
尾道市中濱　旧姓平岡　三坂玄子
尾道市長江町　平田敏子
岡山市上西川町　日高貞子
神石郡仙養村　松浦コマサ
尾道市久保町　大西タミ
尾道市尾崎町　旧姓榊　三上ツヤ子
朝鮮平安北道塔古河龜城害山　旧姓三浦　鶴田フミヨ
佐賀縣西松浦郡大山　旧姓村上　平瀬ノブ
御調郡美郷村　旧姓山本　竹之上コチヨ
豊田郡瀬戸田町　旧姓横山　大泰司静江
東京市麹町區飯田町一ノ八　渡邊キミ

第三回卒業生

尾道市中濱　旧姓池尻　三坂カメ
尾道市長江町　◎稲田ノブ
御調郡因島土生村
尾道市十四日町　旧姓大山　松尾ナチ
作州眞庭郡落合町旧姓柏原　金田菊代
双三郡三次町　金谷田鶴
沼隈郡松永町　旧姓河本　九十九キヌ
尾道市久保町　旧姓楠生　楠生ミキヨ
尾道市土堂町　旧姓栗原　栗原フサ
尾道市久保町　兒玉喜代子
尾道市久保町　小山リウ
陸前石巻裏町六六旧姓佐藤　橋高ミヨ子
沼隈郡松永町　舊姓清水　江川ヒサヨ
尾道市海岸通　◎壽美谷タカ子
山口縣山口町　田中竹代
尾道市土堂町　田阪幾世
吳市東港町　池田壽子
廣島市段原村　佐々木マツヨ
尾道市土堂町　旧姓竹本　神原ルイ
廣島市堺町　旧姓德山　永田悅
尾道市久保町　日山キヌエ
御調郡三原町　シゲル
賀茂郡造賀村　高橋憲代
芦品郡府中下本町旧姓鍋島　多田納見チトセ
尾道市久保町　旧姓西村　褄子
御調郡三原町
尾道市土堂町　◎野村
廣島市堺町　旧姓林　河野クニ
尾道市土堂町　舊姓原田　長尾千代
尾道市土堂町　旧姓原田　原田マサノ
東京共立女子職業學校　政池つな
御調郡土生長崎　旧姓松森　松森ツヤ
尾道市土堂町　正木春子
尾道市久保町　旧姓三熊　三熊小里

朝鮮京城水川坊覆審法院官舍　井雅子
越智郡生名村　村上下枝
尾道市久保町　旧姓村上　村上ヤス
尾道市土堂町　村上ツルコ
沼隈郡高須村　村上ハルコ
東京神田錦町三丁目八番地
御調郡羽和泉村　旧姓山科　増田由巳子
廣島市新川塲町　舊姓山本　山口ツヨ
舊姓吉池　若山帛世

第四回卒業生

伊豫三津ヶ濱　青野セツ
御調郡八幡村　舊姓市川　尾田コワサ
岡山市中筋四百十番舊姓井手　永原ヨシノ
御調郡吉和村　伊藤ミヨ子
尾道市久保町　今井清子
大阪市西區幸町五丁目　植田キクノ
備中玉島町水島　舊姓宇都宮　宮本エン
東京女子高等師範學校　小川春江
尾道市久保町　田トヨノ
御調郡中庄村　岡田ミユキ
御調郡糸崎　柏原シゲヨ
尾道市中濱　舊姓熊丸　森兼村
東京市本所區千歳町六三　上ミツエ
尾道市土堂町　兒玉ヨシ
尾道市久保町　小西ハル
東京小石川日本女子大學玉成寮　小松ゆき
御調郡向島　佐々木豊野
尾道市御所町　下川小雪
御調郡栗原村　末田ヒサノ
御調郡栗原村　高垣シゲノ
東京女子高等師範學校　武田マサヨ
尾道市久保町　◎永井立神タヅ　恒子

御調郡向島西村　中司カツエ
尾道市土堂町　新田ヒサ
尾道市十四日町　野村アサ
尾道市長江町　◎林瓦
廣島市上流町小堺内　久田チヒサ
御調郡向島十番濱舊姓福原　福原ゑ代
東京市京橋區元島町六鈴木内藤　井靜子
廣島市松川町　舊姓藤原　森安フジノ
尾道市十四日町　松井エイ
朝鮮京城覆審院官舍　三井敏子
御調郡木庄村　三次イチ
御調郡因島　宮地清子
尾道市土堂町　◎宮崎亮
尾道市久保町　村上カヤ　死亡
東京共立職業學校　村上ミヨ子　死亡
尾道市久保町　村上ヨシエ　毛利キノ
御調郡吉和村　舊姓本森　藤野喜美代
舊姓吉岡　堀内好

第五回卒業生

尾道市長江町　阿森シヅヨ
相州鎌倉雪ノ下　安保チヨ
御調郡向島西村　安保キクノ
尾道市土堂町　安保コトヨ　池田澤子
御調郡三庄村　石梶イク
御調郡土生村　舊姓石原　井井タマエ
東京日本橋區濱町三丁目　井出テツ　泉隆
尾道市十四日町　井上タキ
大阪市西區立賣堀南通リ三丁目　井上ヒデヨ

朝鮮水原歩兵第七九聯隊一中隊　舊姓入江　高田　マツエ
三原女子師範學校　惠谷　ヨシコ
尾道市長江町　稻田　フサ
尾道市土堂町　井上　安子
伊豫新居郡角野村舊姓惠谷　橋本　ハナエ
尾道市十四日町　惠谷　春子
尾道市土堂町　上野　ユキエ

死亡

尾道市十四日町　岡田　カツヨ
御調郡向島東村　◎大山　芳枝
尾道市西御所町　惠谷　ハツヨ
御調郡吉和村　岡田　ヨシエ
尾道市土堂町　川本　フクヨ
尾道市大宮町　金丸　君子
尾道市土堂町　加藤　靜枝
御調郡木庄村　金子　輝子
大阪西區土佐堀裏町二四　舊姓神田　上田　ハルヨ
尾道市久保町　舊姓吉川　高橋　モト
尾道市久保町　補生　フミ
豊田郡本郷村　鞍掛　靜子
尾道市久保町　黑川　ミサヨ
沼隈郡田島村　小林　イチ
尾道市土堂町　河野　キヌエ
東京市小石川區關口町　◎小西　シヅ
熊本市細工町　舊姓佐伯　藤野　清子
沼隈郡鞆町　舊姓相良　杉原　エツ
兵庫縣印南郡伊保村　清水　キヌヨ
尾道市久保町　砂川　千代鶴
沼隈郡高須村　杉本　愛
尾道市十四日町　舊姓大　杉谷　シヅエ
沼隈郡高須村　小出　秀子
岡山縣和氣郡熊山村　高橋　トシエ
尾道市久保町　武本　カメヨ
尾道市中濱通り　◎田中　喜久惠
尾道市十四日町　高橋　春子
御調郡向島四村　舊姓瀧迫　中村　芳子
尾道市十四日町　高本　シヅコ
吳市幟町九番地　塚本　福子
大連市外沙河口十五丁目北五七　舊姓土井　藤井　ナホ
沼隈郡鞆町　德永　ユキエ
芦品郡栗生村　德毛　ミサホ
豊田郡本郷村　永井　チサト
御調郡美郷村　西永　ミサチ
御調郡向島西村　林　ヒサヨ
沼隈郡今津村　原　歌子
御調郡因島三庄　平野　たゝ
尾道市土堂町　藤田　セイ
尾道市十四日町　樋口　繁子
桑名町三ノ丸　舊姓藤田　藤田　ツギ
尾道市十四日町　舊姓福島　◎松本　智惠
尾道市土堂町　正木　フサ
大阪市東區島町　松千　枝
愛姫縣越智郡閏前村　上美津　枝
尾道市長江町　村上　ヒサノ
廣島市下柳町　八杉　イソヨ
尾道市坊地大阪　舊姓山下　岡田　季子
廣島市大手町　舊姓山根　山根　トシ子
御調郡向島東村　山口　アサコ
御調郡美郷村　行友　房子
御調郡因島外ノ浦舊姓吉田　吉田　キクエ
尾道市土堂町　米田　サダ
尾道市土堂町　吉原　艶
御調郡向島立花　吉本　ナミコ
御調郡向島東村　吉光　テルエ
御調郡三原町　舊姓渡里　小池　貞子
御調郡向島四村　渡里　優子

第六回卒業生

尾道市長江町　阿蘇　ケイ
奈良女子高等師範學校　池田　マサコ
御調郡三原町　池田　花子
尾道市東御所町　石岡　芳子
御調郡向島東村　石井　秀子
朝鮮京城嘉會洞二六　舊姓井田　松岡　キミ
東京市日本橋區吳服町二九　井上　敏子
芦品郡近田村　井上　一枝
尾道市土堂町　井上　春子
芦品郡近田村　井上　千里
御調郡河內村　內海　ツタヨ
尾道市十四日町　岡川　千代
沼隈郡今津村　小川　キミヨ
御調郡三原町　大久保　文子
尾道市土堂町　大久保　清子
尾道市久保町　大西　千代子
尾道市十四日町　大西　政世
尾道市久保町　上月　學子
御調郡美郷村　笠井　ツル
沼隈郡高須村　川ノ上　ヤエコ
尾道市久保町　木梨　キミヨ
尾道市土堂町　木曾　章子
御調郡向島東村　木曾　アサコ
尾道市久保町　栗原　まつの
尾道市長江町　◎見玉　千賀子
御調郡中庄村　小林　シゲコ
御調郡三原町　白石　三千子
豊田郡忠海町　舊姓島谷　碓井　敏江

尾道市土堂町　仙田敏子
尾道市土堂町　田中千代乃
尾道市久保町　田頭ミス
沼隈郡浦崎村　田頭花江
尾道市久保町　高竹ヨシ
尾道市久保町　◎高橋正子
尾道市長江町　高村照子
御調郡美郷村　高岡勳
御調郡栗原村　武田トミコ
賀茂郡志和堀村　竹尾ヒサ
福山市西村　谷靜香
御調郡糸崎町　田村マツヨ
沼隈郡松永町　壇上リツコ
尾道市久保町　壇上ハツヨ
愛媛縣新居郡新濱町　津田鶴
御調郡吉和村　中村シズヨ
岡山縣川上郡大賀村仁賀　那須隆江
尾道市久保町　長尾タマ
佐伯郡大柿村柿浦　濱井ヨシカ
御調郡向島東村　花咲貞子
尾道市久保町　花咲サカエ
御調郡向島西村　牛田政子
神戸加納町女子高等技藝學校廣　平井淳子
尾道市尾崎町　川イト
東京市和洋裁縫女學校　檜垣保世
尾道市久保町　東一枝
尾道市土堂町　平田スガ
尾道市長江町　平岡重子
東京市津田英學塾　福永千代子
岡山縣美津郡白石村　深井辰
尾道市十四日町　藤井タキ
御調郡栗原村　細谷ツタヨ
大阪市夕陽丘高等女學校　三谷ヨシコ
尾道市土堂町　◎村上純子

尾道市久保町　村上サダ
尾道市十四日町　村上直子
御調郡三庄村　毛利トヨノ
尾道市土堂町　村上ハルコ
尾道市久保町　本森千代子
尾道市長江町　◎山本喜代
尾道市久保町　吉原美波子
尾道市久保町　和田直子
御調郡三原町　脇田直子
沼隈郡柳津村　渡邊ヨゲノ

大正六年七月十三日印刷
大正六年七月十九日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　廣島縣尾道市立高等女學校內　岡田タヅ

印刷者　廣島縣尾道市十四日町百九番屋敷　山野佐一

印刷所　廣島縣尾道市十四日町百九番屋敷　三秀舍

發行所　廣島縣尾道市久保町尾道市立高等女學校　校友會